

ロ教會は立つてゐる。小さな落葉松林を背負ひながら、夕日なんぞに赫かがやいてゐる木の十字架が、町の方からその水車の道へはひりかけると、すぐ、五六軒の、ごみごみした、薄汚い民家の間から見えてくるのも、いかにも村の教會らしく、その感じもいいのである。

私はその隣村（追分）で二年ばかり續けて、一人つきりで冬を過ごしたことがあるが、ときどきどうにも爲しや様のないやうな氣もちになると、よく雪なんぞのなかを汽車に乗つて、輕井澤まで來た。輕井澤も冬ぢゆう人氣のないことは同様だが、それでも、いつも二三人は外人の患者のゐるらしいサナトリウムのあたりまで來ると、何んとなく人氣が漂つてゐて、萬物蕭條とした中に煖爐の烟らしいものの立ち昇つてゐるのなんぞを遠くから見ただけでも、何か心のなぐさまるのを感じた。そんな村のあちこちを、道傍から雉子などを何度も飛び立たせながら、抜け道をしいしい、淋しいメエン・ストリートまで出て、それからこんどは水車の道にはひると、私はいつもながいこと聖パウロ教會の前に佇んで、その美しい尖塔を眺め、見入り、そして自分の心の充たされてくるまでそれに愛撫せられてゐた……

さういふ時なんぞ、私は屢々、その頃愛讀してゐたモオリアックの「焰の流れ」といふ小説の結末に出てくるそのかはいさうな女主人公の住んでゐる、フランスの或靜かな村の古い教會のことなどを胸に泛べたりしてゐた。——以前その女の身を誤らせたことのある青年が巴里からはるばるとその村までその女に逢ひに來る。彼はその若い女を偶然村の教會のなかに見出す。彼女は丁度聖體を拜受しようとし

てゐるところである。青年はさういふ打つて變つたやうな女の姿を見ると、もう彼女に話しかけようともせず、又自分を彼女に氣づかせようともしない。彼は聖水を戴いて、度ましく十字を切り、そのまま教會を出ていつてしまふのである。……

さういふモオリアック好みの小説の場面を、私は自分の目の前の空虚な教會の内側にいまでも起りつつあるかのやうに想像を逞しくしたりしながら、いつまでもうつけたやうに教會の木柵にもたれかかつてゐるやうなことさへあつた。

そんな或日の事二月の末だつた……、私はひよつくり出先きから戻つてきた其處のHさんといふ管理人と二こと三こと口を利き合ひ、そのまましばらく教會の側面の日あたりのいい石の上で、立ち話をしあつてゐた。丁度私達の傍らに立つてゐる聖パウロの小さな、彩色した彫像は、彫刻の上手なレイモンド夫人がみづから制作したものだといふ事を私の教はつたのも、そのときの事だつた。そして別れぎはになつてから、そのHさんがかう言つたのである。

「……この御堂が本當に好きですので、かうして雪の深いなかに一人でそのお守りをしてゐるのもなかなか愉しい氣もちがいたします。……」

「あなたが自分のまはりに孤獨をおいた日々はどんなに美しかったか、僕はそれを羨むことでいまを築いてゐるといつたつていくらゐです……」と、そんな事を若い詩人の立原道造が盛岡への一人旅から私達のところに書いてよこしたのは、彼が亡くなる前年（一九三八年）の秋だつた。——そのときはもう私はそのやうな孤獨ではなく、その春さりげなく結婚をして、しかしその年もやはり輕井澤の山中で秋深くなるまで暮らしつつづけてゐた。が、今年はどうも私の身體が變調なので、そろそろこんな山暮らしを切り上げようかと考へてゐた矢先きだつた。——立原も立原で、その夏まへからだいふ健康を害して、一年ほど前から勤め出してゐた建築事務所の方もとかく休みがちらしかつた。さうしてなかば静養を口實に、好きな旅にばかり出てゐるやうだつたが、夏のさなかの或日なんぞ、新しく出来た愛人を携へて、漂然と輕井澤に立ち現はれたりした。さう云へば、あのときなんぞ彼の弱つてゐた身體には、私達の山の家まで昇つてくる道がよほど應へたと見え、最初は口もろくろく利けずに、三十分ばかりヴェランダに横になつたきりでゐた、息苦しさうな彼の姿がいまでも目に浮ぶ。——私と妻とはときどきそんな立原がさまざま旅先から送つてよこす^{たぶ}愉し^{たぶ}さうな繪端書などを受取る度毎に、何かと彼の噂をしあひながら、結婚までしようと思ひつめてゐる可憐な愛人がせつかく出来たのに、その愛人をとほく東京に残して、さうやつて一人で旅をつづけてゐるなんて、いかにも立原らしいやり方だぞと話し合つてゐた。——「戀しつつ、しかも戀人から別離して、それに身を震はせつつ堪へる」ことを既に決意し

てゐる、リルケイアンとしての彼の眞面目をそこに私は好んで見ようとしてゐたのであつた。

その立原は、しかし、その春の末私達が結婚しようとしてゐたときは、まだなかなか元氣で、病後の私のために何かと一人で面倒を見てくれたのだつた。さうして結婚するや否や、誰にも知らさずに、すぐ輕井澤に立つてきた私達に、次ぎのやうな手紙を添へて、私達にささやかな贈り物をしてくれた。——「御結婚のおよろこびを申し上げます。お祝ひのしるしにフランスの『木の十字架』教會の少年たちのうたつた聖歌をお贈りいたします。美しい村でおくらしになる日、森のなかの草舎でこの歌がきかれる初夏、花々のことなど、一切のけふのあはれに美しい僕の夢想を花束に編んで、それに添へた心持でお贈りいたします。それからもうひとつのは、去年の秋の奇妙な出来事が僕にえらばせた歌なので、これがお祝ひのしるしといふのではなしに、ただ、あの不意に家のなくなつてしまつた日のかたみのために、高原の村ぐらしのなかにお持ちになつていただきましたのでございます。澤山の幸福とよろこびと潤澤な日日とを恵まれますやうに。道造」——その贈り物といふのは二枚のレコオドで、その一つはフランス舊教會ラ・クロア・ド・ボア教會小聖歌隊の合唱したヴィットリアの「アヴェ・マリア」とパレストリーナの「贖主の聖母よ」。もう一つはクロオド・パスカルといふ少年歌手の獨唱したドビュッシイの晩年の歌曲「もう家もない子等のクリスマス」。——文中の去年の秋の出来事といふのは、私や立原なんぞが一しよに暮らしてゐた追分の脇本陣（油屋）が火事になつて二人とも着のみ着のままに

焼け出された出来事のことである。——私達はその贈り物をよろこんで受けて、わざわざ山の家まで携へてきたが、小さなポオタブル位はなんとか手に入れて持つてくる筈だったのがうまく行かなくて、只その贈り物は机の上に飾つておいた。とうとうその山の家ではそれを一度も聴く機会が得られなかつた。……

私達の山の家へは、五月の半ば頃、立原はその新しい愛人とはじめての旅行を輕井澤に試みたときに既に訪れたことがあつたのださうだ。丁度、私の父が急病になつて私達が東京に歸つてゐた間のことらしい。立原たちは、私達が留守でも構はずに、その山の家でヴェランダで三時間ばかり晝寝をしたり遊んだりしてゐたのだなどと、夏、又二人でやつて来たとき私達にはじめて打ち明けて言ふのだつた。

「ほら、あそこにそのとき僕が樂書をした跡がある……」

さう云つて、物憂さうに椅子に首をもたせたまま、疲れた一羽の鳥のやうな、大きなぎよろつとした目で彼が見上げてゐる方を私もふりむいて見ると、ヴェランダの壁の上の方の、誰の手も届きさうもないところに、なるほど彼らしい手跡で、

Wenn ich wäre ein Vogel!

と、青い鉛筆で樂書のしてあるのに私はそのとき漸つと氣がついた。

私達が結婚祝ひに立原から貰つたクロア・ド・ボワ教會の少年達の歌やドビュッシイの歌のレコオドをはじめ聴いたのは、その翌年の春さきに、なんだかまるで夢みたいに彼が死んでいつてしまつた後からだつた。私達はそのレコオドを友人の家に携へていつて、それをはじめ聴いたのである。

それから、その夏（去年）輕井澤へ往つたときは漸く宿望の蓄音機をもつていけたので、私の好きなシヨパンの「前奏曲」やセザアル・フランクの「ソナタ」なんぞの間にときどきその二枚の小さなレコオドをかけては、とうとうこれがあいつの形見になつてしまつたのかと思ふやうになつた。私はその二つの曲の中では、ドビュッシイの近代的な歌よりも、寧ろイタリアの古拙な聖歌の方を好んだ。それらのゴプラン織のやうな合唱の中を、風のやうに去來する可憐なボオイ・ソプラノはなんとも云へず美しいものだつた。

その夏、輕井澤では、急に切迫したやうに見える歐羅巴の危機のために、こんな山中に避暑に來てゐる外人たちの上にも何か只ならぬ氣配が感ぜられ出してゐた。日曜日の彌撒に、ドイツ人もフランス人も、イタリア人も、それからまたポオランド人、スペイン人などまで一しよくたに集つてくる、舊教の聖パウロ教會なんぞは、そんな勤行をしてゐる間、その前をちよつと素通りしただけでも、冬なん

ぞの閑寂さとは打つて變つて、何か呼吸づまりさうなまでに緊張した思ひのされる程だつた。前年の夏あたりは、屢々、その教會の中から聖母を讃へる甘美な男女の合唱が洩れてきて、それが通行人の足を思はず立ち止まらせたりしたものだつたが、今年の夏はどういふものか、低いオルガンの音のほかには、聖樂らしいものは何んにも聞えて來ないのだつた。

この頃朝の散歩のときなど、その教會の前を通りかかる度毎に、私はその中があんまり物靜かで、しかも絶えず何ものかの囁きに充たされてゐるやうなので、いつか聞覚えてしまつたヴィットリアの「アヴェ・マリア」の一節などを、ふいとそれがさもその教會の中から聞えてきつつあるかのやうに自分の裡に蘇らせたりするのだつた……

**

八月の末になつてから、その夏ぢゆう追分で暮らしてゐた津村信夫君が、きのふ追分に來たといふ神保光太郎君と連れ立つて、他に二三人の學生同伴で、日曜日の朝、ひよつくり輕井澤に現はれ、その教會の彌撒に參列しないかと私を誘ひに來てくれたので、私も一しよについて行つた。冬、一度その教會の人けのない彌撒に行つたことがあるきりで、夏の正式の彌撒はまだ私は全然知らなかつた。

みんなで教會の前まで行くと、既に彌撒ははじまつてゐて、その柵のそとには伊太利大使館や諾威公使館の立派な自動車などが横づけになり、又、柵のなかには何臺となく自轉車が立てかけられてゐた。私達はその柵の中へはひらうとしかけながら、誰からともなしに少し躊躇らひ出してゐた。さうして三人でちよつと顔を見合はせて、困つたやうな薄笑ひをうかべた。丁度、そんな時だつた、私達の背後からベルを鳴らしながら、二人の金髪の少女が自轉車でついと私達を追ひ越すやいなや、柵の入口のところへめいめいの自轉車を乗り捨てて、二人ともお下げに結つた髪先の先をびよんびよん跳ねらしながら、いそいで教會の中へ姿を消した。

私達はその姉妹らしい少女らの乗り捨てていつた自轉車の尻に、兩方とも「ボオランド公使館」といふ鑑札のついてゐるのを認めた。それは丁度、ドイツがボオランドに對して宣戰を布告した、その翌日だつた。私達は立ち止まつたまま、もう一度顔を見合はせた。

私達は、おそらくけふこの教會に集つてきてゐる人達は、それぞれの祖國の危急をおもつて悲痛な心を抱いてゐるものばかりであらうのに、そんな中へ心なしにも數人でどやどやとはひつて行くのが少々氣がひけて來たのだつた。が、それだけにまた一層、いましてがたさういふ人達の中に雜じつていつた二人のボオランドの少女が私達の心をいたく惹いた。私達はこんど誰からともなく思ひ切つたやうに教會のなかへはひつて行つた。さうしてめいめい他の人達のやうに十字は切らないで、一人づつ、内陣の方へ向つて丁寧な頭を下げながら、まだすこし空いてゐた、うしろの方の藁椅子の上に順々に腰を下ろ

した。

一 番うしろの藁椅子を占めた私は、しばらく黙禱の真似のやうな事をしてゐたが、やがて目を上げて、さつきの二人の少女の姿を會衆のうちに捜し出した。すぐ彼女たちの可愛らしいお下げ髪が目にとまつた。彼女たちは一番前列に、面帕をかぶつた母親らしい中年の婦人の傍に、跪きながら無邪氣に掌を合はせてお祈りをしてゐた。

私はさういふお下げ髪の少女たちの後姿にいつまでも目をそそいでゐたが、そのうち何氣なく、立原の形見の一つである、バスカル少年のうたつたドビュッシーの歌などを胸に浮ばせてゐた。それはドビュッシーが晩年病牀にあつて、無謀なドイツ軍のベルギー侵入の事を聞き、家も學校も教會もみんな焼かれてしまつた可哀さうな子供たちのために、彼等の迎へるであらうわびしいクリスマスを思つて、作曲したものだつた。

Noël ! petit Noël ! n'allez pas chez eux,

n'allez plus jamais chez eux, punissez-les !

(クリスマスよ、クリスマスよ、どうぞ彼等のところへは行かないで。

もう決して行かないで。さうして彼等を懲らしてやつておくれ。)

いま、さうやつていたいけな様子でお祈りを續けてゐるそのポオランダの少女たちが、ふいと立ち上

がるなり、いまにもそんな悲しい叫びを發しさうな氣がする。さう、この歌のレコオドはまあ何んといふ偶然の運命から私の手もとに今あるのだらう。ちよつとその少女たちを私の家に連れていつてそれを聽かせてやつたら、まあ彼女たちはどんなに目を赫かす事だらう……と、そんな事を考へてゐるうちに、ふいと眼頭の熱くなりさうになつた目をいそいで脇へ轉じると、其處では、何か考へ深さうな面持ちをしてゐるドイツ人らしい両親の間に挟まれた、まだ幼い、いかにも腕白者らしい子供が、彼から少し離れた席にゐる同じやうな年頃の、しかし髪などをもう綺麗に分けてゐる子供に向つて、しきりに顔つきや手眞似でからかひかけてゐるのなどがひよいと目に映つたりした。私のすぐ前に並んで腰かけてゐる津村君と神保君は、私のやうに行儀悪くしないで、ちつとさつきから神妙に頭を下げつつけてゐるらしいかつた。

彌撒が了つて、なんだか亢奮してゐるやうな顔のおほい外人達の中に雜ざりながら、その教會から出てきた時は、私達もさすがに少しばかり變な氣もちになつてゐた。私達は、教會のまはりにあちらこちらど一塊りになつて立ち話をしだしてゐる外人達からすんすん離れて、まだ教會の中に残つてゐるらしいポオランダの少女たちの事を氣づかひながら、しかししばらくは黙つたまんまで歩いてゐた。それは何か一しよに好いものを見てきたあとで、いつも氣の合つた友人達の上に擴がる、あの共通の快い沈黙であつた。

これから森のなかの私の家へ寄つてお茶でも飲もう、——さういふ事に決めてからも、私達はとかく沈黙がちに林道の方へ歩いて行つた。かうやつて津村君、神保君、それから僕、野村少年と、みんな揃つてゐるのに、當然そこにていい筈の立原道造だけのゐない事が、だんだん私にはどうにも不思議に思えてきてならなかつた。さう云へば、なんだか私ははじめて彼が私達の間にゐないのに気がつき出したかのやうだつた。……

昭和十五年五月

マルセル・フルウスト

三つの手紙

神西清に

二〇四

今朝、僕はこんな夢を見た。

僕はひとりで活動小屋にはひつた。僕はうつかり眼鏡を忘れてきたことに気がついた。いつもなら活動小屋の一番後の席に坐るのだが、しやうがないので僕はすつと前の方へ出て行つた。さうしたら、やつとスクリーンの繪が見え出した。それにはなんだか妙に美しい色彩がついてゐた。そして沙漠のやうなところで黙めいたものが格闘してゐるのだつた。……

一九三二年七月七日

僕は眠りから醒めてからも、その夢を鮮明に記憶してゐた。そして煙草を啣へたまま、しばらくぼんやり藤椅子に凭れてゐるうちに、ふと數年前、この夢とほとんど同じやうな現實の經驗をしたことのあるのを思ひ出した。僕はその時もやはり眼鏡を忘れたまま活動小屋にはひつたのだつた。ただ夢とすこし異ふのは、その頃はまだ活動小屋にもオオケストラ・ボックスがあつて、そのまはりには子供たちが

大せい群がつてゐたが、僕もその中に混つて行つて、半分はぞのボックスの中を珍らしさうにのぞきながら、半分は筋などは何が何やら分らずにスクリーンを眺めてゐた。

さういふ夢と、その動機とも見えるやうな過去の經驗とを、代る代る思ひ浮べてゐるうちに、僕は何かかしらとても上機嫌になつてきた。そして僕は突然、それが數年前の自分がオオケストラ・ボックスの中をのぞきこみながら漠然と感じてゐた、妙に悦ばしいやうな感情に酷似してゐるのに気がついた。

——それは僕の幼時の追憶から生ずる特異な感情にちがひなかつた。といふのは、そんな風にオオケストラ・ボックスの中をのぞきこんでゐることが、いつもさうしてゐた子供の頃の僕に、その時の僕を立戻らせてしまつてゐたからだつた。そしてそんな僕には、僕の幼時の全體が、——「ジゴマ」だの、「名金」だの、レストランではじめて食べた蝦フライの匂だの、ふだんはどうもよく思ひ出せないでゐる死んだお母さんの聲だのが、思ひがけずはつきりと泛んで來てゐたからだつた。……

僕は今朝の夢のおかげで、それらの過去の經驗の一切を知らず識らずの裡に再び思ひ出してゐたのだ。それで今朝はこんなに機嫌がよいのだ。

何故こんな夢の話を書いたのか、君にはもう解つてゐるだらう。さう、君の御推察のごとく、

二〇五

たしかにこの夢にはブルウストの影響がある。そしてそれからそれへと僕は最近読み出してゐるブルウストのことを考へてゐるうちに、なんだかとても君に手紙が書きたくなつた。と言つたからつて、何もブルウストのことを君に話して聞かす自信があるほど、僕はまだ充分には読んでゐない。君のところからブルウストの本を腕一ぱいかかへて借りて來たのはもう數週間前だが、僕の佛蘭西語のあまり出來ないことは御存知のとほりだし、それに第一あのブルウストの難解な文章だらう。おまけにそれが小さい活字でぎつしり組んであるので、（これは餘談だが、誰やらがうまいことを言つてゐた、ブルウストの小説は、他の作家のものがすべて時や分を記述するのは異り、秒を記述してゐるのだから、ああいふ小さい活字で組まなくつちや感じが出まいと。）一日に一頁讀んだだけでも大抵がつかりする。とても、どの一冊だつて初めから終りまで通讀しようなんといふ氣にはなれない。だから僕は手あたり次第に一冊引つこ抜いては、出まかせに開けた頁を讀むことにしてゐる。かうして讀むと割合に倦きずに讀める。——すこし亂暴なやうだが、その後N・R・Fのブルウスト追悼號の中でヴァレリイがブルウストの作品は何處から讀み始めて何處で切つても差支へないものだと言つてゐるのを發見して大いに意を強くしたね。追悼號と云へば、あれで見ると佛蘭西の歴とした文人たちも、ブルウストを讀むのになんか閉口したらしく、中でもルネ・ボワレエヴといふ作家などは、最初は「スワン家の方」をどうしても讀み通すことが出來ないで途中で投げ出したが、シャルル・デュ・ボスの「アプロクスイマシオン」の中の

原文からの引用の豊富なブルウスト論を讀んで、非常に興味を感じ出し、それから一息に七冊ばかり讀み通してしまつたと白狀してゐる。（シャルル・デュ・ボスのそのブルウスト論は僕も讀んで見たが面白いものだつた。）——とにかく本場の佛蘭西人さへブルウストには手古摺つてゐるらしいので大いに僕も意を強くする。

數日前、僕は或る場末の古本屋からN・R・Fのジャック・リヴィエール追悼號を十錢で掘出してきたが、その中にリヴィエールが何處かでやつたブルウストに關する講演の原稿が載つてゐるので、早速讀んで見たが、リヴィエールもやはり平素音樂的な文體が好きだつたので、ブルウストの、「まるで引き伸ばして頁の隅々にピンで留めたやうな文體」には散々惱まされたことを告白してゐる。後年あれほどのブルウスト最良になつたこの人までが、それなのだからね。

このリヴィエールのブルウスト論、それにさつき舉げたシャルル・デュ・ボスの奴とが、先づ、僕の讀んだもののうちでは、ブルウスト論の雙璧だらうね。これ等に比べると、パンジャマン・クレミュダとか、レオン・ビエール・カンなどのものはすこし落ちるやうだ。——が、君に借りてきたロベール・ドレイフェスの回想記のなかで僕はひよつくり面白い一節を見つけた。ブルウストがその第一作、「スワン家の方」を世に問ふた時、ルタン紙の記者が早速彼を訪問して彼に感想を乞うた。そのときの談話筆記が、そのまま其處に再録されてゐるのだ。これは掘出物だと思ふ。——僕はそれを讀むまでは、ブルウ

ストの批評といへば、かならず時間を論じ、ベルグソニスムを論じ、或は無意識を論じてゐるのを、これは一つの流行かと思つてゐたが、何んとその流行の創始者が當のブルウストであるとは知らなかつた。で、そのマニフェスト(?)なるものはどういふものかと云ふと、先づ、彼は彼の龐大な小説を分冊にして出さなければならぬことを遺憾とし、「自分は今日のアバウトメントには大きすぎる絨毯をもつてゐるので、それを切斷すべく餘儀なくされてゐるものだ」と云つてゐる。さて彼は續けて云ふ。「平面幾何學といふものに對して、立體幾何學といふものがあるやうに、自分にとつては、小説は平面心理學であるのみならず、立體心理學なのである。(この譯語はいささか妥當でない。前者の *la géométrie dans l'espace* といふ術語に對して *la psychologie dans le temps* といふ新しい術語を使用してゐるのだが適當な譯語が思ひつかないので假りにかう譯す。)——時間の見えざる實在、それを私は孤立させようと試みるのだ。そのためには經驗が持續してゐることが必要だ。」それで彼の小説は長ければ長いほど完全に近くなるといふ訣なのだ。そして更に續ける。「自分が希望するのは、自分の小説のおしまひの方で、この小説の始まりのところでは全然別箇の世界に住んでゐる、さまざまの人物の間のごく小さな事件が、時間の経過した結果として、あのヴェルサイユ宮殿の綠青のついた鉛のもつてゐるやうな美しさを所有するやうになることだ。」——これは例へば、第一巻の「スワン家の方」あたりではまだ全然別箇の世界に屬するものとして作者から示されてゐるスワン嬢とサン・ルウとが、最後の巻になつて(そ

れもごく自然な順序をたどりながら)遂に結婚するに至ることなどを暗示してゐるのだらうが、まあ何といふ遠大な計畫をたてたことか! 僕等なんかだつたらたとへさういふ構想を思ひついたにしろ、とてもそれに取りかかつてその十分の一だけでも書き上げる根氣すらなささうだ。第一、誰も相手になぞしてくれまい。それはブルウストだつて、——最初の一卷「スワン家の方」を出しただけでは、そんなことを世間にくら言つても、誰にも聞いて貰へさうもないことは知つてゐただらう。事實、このルタン紙上の一文はその當時は一笑に付せられたらしい。だが、彼はそれから十年間といふもの、あの有名なコルク張りの病室に閉ぢこもつたきり、死の直前まで黙々と仕事を續けて、遂にそれを全部完成して了つたのだ。リヴィエルの所謂「彼の宿命のごとく思はれる受動的なるものを能動的なるものに換へんとする努力」はかくして成就されたのだ。

僕がいまちよつと引用したリヴィエルの言葉はなかなか面白いだらう。が、これはもつと説明する必要がある。それはこの次ぎの手紙でもゆつくり書かう。今は、折角觸れかかつたのだから、もうすこしブルウストに於ける時間の問題から離れずにおこう。

**

ブルウストがその作中人物を描く方法には、極めて多くの獨創的なものがあるが、そのうちの最も斬

新な一つは、それは彼がその小説のなかに時間の経過する感じを與へようとしたためであることが解る。再びさつきのルタン紙上のインタヴァイユに戻るが、その中でかういふことを云つてゐる。「汽車がうねりくねつた線路を走つてゐる間、或時は右に、或時は左に見える、あの小さな町の中にでもゐるやうに同じ人間が、まるで入れ代り立ち代り現はれてくる別々の人間であるかのやうに讀者に印象されるほどの、ひとつ人間のさまざまな姿は——その爲にのみ——時間の過ぎてゆく感じを與へるものだ。」

つまり、現實の中でも屢々起ることであるが、いま自分の前にゐる一人の人間が、ちよつと時間が経ちさへすれば、それとはまるで異つた人間のやうに印象されてくることがある。それがわれわれには如何にも時間の過ぎつつあるといふことを感じさせる。——ブルウストはさういふ「強い、ほとんど無意識的印象」に目をつけて、それを彼の人物を描く方法に取り入れたのだ。例へば、「スワンの戀」のなかに描かれてゐるオデット・クレッシイだが、あれくらゐ時間の過ぎるにつれて刻々に變化する性格と容姿をもつた、少々妖精じみたところさへある女性は、ちよつと類が無いではないか。なるほど、オデットは何處かしらモリエールの書いたセリメエヌに似てゐないことはない。まあ、ああいつたタイプの女にちがひない。しかし、それだつても、ボッチチェリイの描いたジェットロの娘に彼女が似てゐると云ふより以上のことではない。そしてさういふ聯想は、唯、ブルウストが彼の人物を生かすことの出來た手腕において、さういふ大家たちの間に伍して少しも遜色のなかつたことを證明するやうなものであらう。

ブルウストの人物の描き方については、さういふ際立つた特徴に次いで、もう一つの特徴が認められる。そのもう一つの特徴といふのは、——僕はこの間、コンブレエの教會での結婚式におけるゲルマント公爵夫人の顔をブルウストが描寫してゐる一節を読み返しながら、意外に思つたのだが、そこをすつと前に初めて讀んだ時から、僕は何時の間にか自分勝手にその公爵夫人の顔を世にも美しいものに作り上げてしまつてゐたと見える。だが實際は、そこには、むしろ苛酷な位の筆で、ことさらにその「高い鼻、するどい眼、赤らんだ頬」を目立たせるやうな工合に、決して美しい顔としてでなく、夫人の顔が描かれてあるに過ぎないのだ。僕はちよつと欺されてゐたやうな氣がした。「これは僕がすつと前に讀んだことのあるゲルマント夫人の顔ぢやない。」——だが、僕はその一節をすつかり讀み畢へてその本を閉ぢながら、もう一度その夫人の顔を宙に浮べて見た。すると、どうだらう。今度は、その高い鼻、碧い眼、赤らんだ頬がまだ僕の眼前に髣髴してゐるにもかかはらず、その夫人の顔はだんだん前にも増して美しく思はれ出したのだ。「さう、やつぱり僕の知つてゐたゲルマント夫人だつたんだ!」——さうひとりごちながら、ははあ、こんなところにも、ブルウストの作中人物を解く一つの鍵があるのかも知れぬと思つた。

シャルル・デュ・ボスが、オペラの棧敷の中で捕まへてゐるのも、さういふゲルマント公爵夫人の感嘆すべき肖像畫の一つだ。

彼女(ゲルマント公爵夫人)を、薄あかりを浴びて物語めいてゐる他の娘たちよりも、ずつと上位に置いてゐるその美しさといふものは、彼女の頸や、肩や、腕や、胸などの上に、はつきりと、誰にもすぐ分るやうに、見えはしなかつた。そしてさういふ、彼女の微妙な、未完成な線は、われわれの目がそれを引き延ばさずには居られない、見え難い、不思議な線の正確な出發点であり、暗闇の中のスクリーンの上に完全な姿となつて投影されてゐるスペクトルのやうな、その婦人のまはりでびちびち跳つてゐる線のおのづからなる塊りであつた。

「ゲルマントの方」¹

さういふ、われわれの目がそれから現実的な線を引き延ばさずにはゐられないやうな、不思議な、見え難い線、そこにこそ、ブルウストの目のみならず、彼の精神が絶えず追究してゐたところの實驗があるのだ、とシャルル・デュ・ボスは説いてゐるのである。

なんだかすこし尻切蜻蛉のやうだが、ここいらで一度ペンを置く。が、僕は君にもつともつとしやべりたいことがあるのだ。僕はブルウストに關する著書が後から後からと出るのに驚いてゐたものだが、この調子なら僕にもそのうち一冊の書物位は書けさうな氣がする。が、今日はもうへとへとに疲れた。當分僕のブルウスト熱はさめさうもないから、どうぞ次の僕の手紙を待つてゐて呉れたまへ。左様なら。

二

七月十日

この間僕は本郷の古本屋でルノアールの素ばらしい畫集を見つけた。そしてどうしてもそれが欲しくてたまらなくなつて、昨日、とうとうそれを買つてきた。

僕の買った畫集は一九一三年、巴里の Bernheim-Jeune 刊行のものだ。六百部の限定版。金が無かつたので、僕は仕方なしにそれまで大事にしてゐたデュフィとモディリアニの畫集を賣つてやつとそれを手に入れた。

それほど僕はこのルノアールの畫集が欲しかつたのだ。またしても、ここにブルウストの影響があるらしい。

それは丁度、僕が昔コクトオに熱中してゐるうちにいつかピカソやキリコの繪を愛し出したのによく似てゐる。僕はこの頃ブルウストのおかげですこし頭が古くなつたのか、どうやら印象派の畫家たち——ことにマネエやルノアールやクロオド・マネエの繪が非常に好きになつて來たやうだ。マネエなんかも好い畫集があつたら何とでもして買つて來るだらう。ところで、こんな工合に僕がコクトオを通してピカソやキリコの繪に興味を持つたり、ブルウストの影響でルノアール等が好きになつたりするといふ

ことは、それを裏がへしにして考へて見ると、コクトオはピカソやキリコ等の畫家に、そしてブルウストは印象派の畫家たちに多くのものを負うてゐるやうなことになるはしないだらうか？

僕は何處でもいいからブルウストの二頁を開けて見よう。例へばここに、かういふ一節がある。

私はエルステイルの水彩畫の中でこれらのものを見てからといふもの、私はこれらのものを現實の中に再び見出したく思ひもしたし、又、何か詩的なものとしてこれらのものを愛するやうにもなつたのである。……まだ横に置かれてあるナイフのでこほこな面、日光がその上に黄いろい天鵞絨を張りつけてゐる放り出されたナフキンのふくらんだ突起、その形の氣高い圓味をかくも美しく見せてゐる半分空虚になつたコップ（その厚いガラスの底の透明なことはまるで日光を凍らしでもしたやうだ）薄暗いなりに照明できらきらしてゐる葡萄酒の残り、固體の移動、照明のための液體の變化、半分減つた果物皿の中で緑から青へ、それからまた青から金へと移る李の變化、卓の上に掛けられた布のまはりに日に二回は坐りにやつてくる年老いた椅子たち、（その卓の上では牡蠣の貝殻のなかに、小さな石の聖水盤のなかにのやうに、數滴の水が残つてゐる）——かういふ今まではこんなものの中に美があると、思ひもしなかつたやうな、もつとも日常的な事物のなかに、「靜物」の深味のある生のなかに、私は美を發見しようと思つたのであつた。

「花さける少女の影に」

印象派の、まるでクロオド・モネエか何ぞの繪でも見てゐるやうな感じがしないか。——僕はブルウストをベルグソンやフロイドに結びつけて考へようとする人達をよく見かけるが、僕にはブルウスト

は、さういふ哲學者や心理學者たちよりもずつと深い暗示を、これら印象派の畫家たちから得てゐるやうに思はれるのだ。

しかし、さういふのは僕がベルグソンやフロイドの著書をあまり讀んだことがないからかも知れない。もつとベルグソンやフロイドを讀んだら（そしてそれを讀みたいと思ふ欲望はこの頃しきりに起るのだけれど）、さういふ議論もうなづけるかも知れない。フロイドの方は知らなかつたらしいが、ブルウストは若い時分にベルグソンをかなり熱心に讀んでゐたやうである。そして自分でも、この前の手紙に引用したルタン紙のインタアヴィユの中で、自分の小説を「ベルグソニスムの小説」と呼んでも恥しくないと言明してゐる。唯、それにかういふ訂正をつけ加へてゐる。「しかし、それは正確とは云へない。何故なら、自分の作品は無意的記憶(La mémoire involontaire)と有意的記憶(La mémoire volontaire)との差別によつて支配されてゐるのだから。この差別はベルグソン氏の哲學に現はれなかつたのみならず、むしろそれと矛盾さへしてゐるのだ。」

僕はベルグソンをよく知らないので、さういふブルウストの意向を充分に理解することは出来ない。だからそれに對する批評は控へよう。そして此處ではただ、ブルウストの謂ふところの「無意的記憶」

なるものにちよつと觸れて見よう。ブルウストはそれを自分でかう説明してゐるのである。

「私には、有意的記憶——それは就中理智と眼との記憶だが——なるものは、過去の眞實ならざる面をしか與へてくれないやうに思へる。が、昔とはまつたく異つた環境の下で、ふと思ひ出された或る句とか、或る味とかが、思ひがけすわれわれに過去を喚び起すときは、われわれはさういふ過去が、われわれの有意的記憶が下手な畫家のやうに眞實ならざる色彩をもつて描いた過去とは、如何に相違してゐるかを理解する。諸君はすでにこの最初の巻「スワン家の方」において、話者がこんな話をするのを御覧になる筈だ、——「私」(この私ではない)が突然、マドレヌの一片の落してあるお茶の一口の味の中に、忘れてゐた多くの年月、庭園、人々を思ひ出すといふ話を。勿論、彼はそれを有意的に思ひ出すことも出来ただらうが、その場合にはそれ獨得の色彩もなければ魅力もないのだ。そして作者が彼をして云はしめ得たのは、薄い紙片を茶碗のなかに浸すとすぐにそれが水中に擴がり、形をとり、花に變ずる、あの日本の小さな遊戯でのやうに、さまざまな人物、庭園のすべての花、ヴィヴォンヌ河の睡蓮、村の善良な人々や彼等の小さな家々、教會、コンブレエとその近郊、それらすべてのものが、はつきりした形をとりながら、その茶碗の中から町となり庭となつて現はれたといふことだ。」

ベルグソンがかういふ「記憶」の問題をどう取扱つてゐるか云ふことを知れば一層興味がありさうに思へるが、僕は残念ながらこの問題に今は立入れない。しかし、ベルグソンと云へば、僕は、數年前

澄江堂の藏書を整理してゐるうちに、ふとベルグソンの「形而上學序説」の英譯本の餘白に見出した數行の書入れを思ひ出す。なんでもベルグソンの哲學は「美しい透明な建築を見るやうな感じだ」と云ふやうな意味が記されてあつたやうに記憶してゐる。そして僕は長いことこの芥川さんの言葉を忘れてゐたのであるが、最近ブルウストを読み出してゐるうちにひよつくりそれを思ひ出した。さういふ全體の感じなどに、或は、ブルウストとベルグソンとは何處となく一味相通じたところもあるのかも知れない。

ある日、僕はもう一度その書入れを見たいと思つて、澄江堂に出かけて行つた。しかし書棚をいくら探して見てもその本はとうとう見つからなかつた。が、その代りに僕はサミュエル・バトラアの「*Unconscious Memory*」といふ本を見つけた。ちよつと手にとつて見ると、ハルトマンの無意識哲學などを論じたものらしかつた。僕はいまバトラアまで讀んで見る氣はしないので、一目見たきりで再びその本を元のところに入れて置いた。ベルグソンの本を探しに行つてそれが見つからずに、バトラアを頭に入れて歸つてきたのはすこし妙な氣持であつた。僕は家へ歸つてからも、なんだかそれが氣になるので、手許にあつたバトラアの「ノット・ブック」を開いて見てゐるうちに、僕は圖らずも興味深い數頁を發見した。その中でも一番面白いと思つたのは、彼の友人がある日生爪を剥がして突然子供の時分にそれと同じ經驗をした時のことをそれからそれへと思ひ出す話を書いた「剥がした爪」といふ一章である。これを引用するとすこし長くなりさうなので、ここには省略するが、例へば次のやうな簡単な話でもい

ある朝、私は「サウル」の中の“On Sweetest Harmony”の曲を口ずさんでゐた。ジョンがそれを聞いて私に言った。「君は何故その曲を口ずさんでゐるのか知つてゐるかい？」

私は知らないと答へた。すると彼は言った。

「二分ばかり前、僕が“Eagles were not so swift”を口ずさんでゐるのを君は聞きはしなかつたか？」

私はどうもその覚えがないし、それに私がその合唱を自分でやつたのはよほど昔のことだつたから、私がそれを意識的に認めてゐたとは考へられないが私がそれを無意識的に認めてゐたことは、私がその次にくる“On Sweetest Harmony”を口ずさんでゐたことからして明瞭である。

パトラアは、かういふ「無意識的なるもの」が我々の生の根元になつてゐることをハルトマンと共に言ひたいのであらう。——少し道草を食つてしまつたが、ブルウストを論じてパトラアにまで及んだ者は、遺憾ながら、僕が最初の男ではない。パトラアの「ノオト・ブック」の中でそんな発見をして僕は少し得意になつてゐたら、シャルル・デュ・ボスが既にそのブルウスト論の中で、この二人を比較しつつ論じてゐたのであつた。そしてこの分析好きの批評家は、其處でブルウストとパトラアとを同系統の分析家として取扱つてゐるのである。しかし「The Way of All Flesh」の作者はともかくも、ブルウストをそのやうな分析家として解釋するのは、ちよつと僕には同意しがたいものがある。やはりジイドや

リヴィエエルのやうに、ブルウストには事物がひとりでにさういふ風に——あたかも分析したかのやうに——見えたのだと解した方がよくはないだらうか？

——リヴィエエルと云へば、彼のブルウストに關する講演のことを書く書くと云ひながら、いまだに約を果さずにあるが、この次にはきつと書くつもりだ。

三

七月十三日

この二三日、僕は君に約束をしたジャック・リヴィエエルのブルウストに關する講演を、なにしろ長いものなので、どうしたら一番要領よくその主要なところを話せるだらうかと考へて見たんだが、どうも名案が浮ばない。しやうがないから、僕はいつか引用した例の「彼の宿命のごとく思はれる受動的なるものを能動的なるものに換へんとする努力」といふリヴィエエルの言葉を中心にして、特に興味深い數節を次に抄してお目にかけてよう。

——以下はそのリヴィエエルの講演原稿からの抄録である。

先づ諸君に、この世にひどく不釣合な、その挑戦に應ずることの絶對に出来ない、ある男の觀念を與

へなければならぬ。彼の性格のさういふ外貌のすべては、私には次のアネクトオトの中に要約されてゐるやうに見える。——ある夜、私は彼と一しよに眞夜中近く彼のアパートメントを出た（それは彼が友人を訪問する時間だつた）。彼の家政婦で女中で、そして秘書であるセレストが私達についてきた。階段はペンキが塗り立てだつた。ブルウストはいきなりそのペンキに手を突いて、その手袋にべつたりそれを着けてしまつた。すると彼はすぐセレストに向つて優しい、くどくどした叱言を云ひ出した。それを彼女は豫防すべきだつたとか、階段の塗りかへられてあるのを彼女はよく知つてゐた筈なのにとか……彼はセレストの衝立だけがそのペンキから彼を保護しただらうことを何處までも信じ切つてゐるかのやうだつた。彼は、彼自身の力では、物事に働きかけることは愚か、それを防禦することさへ出来な
いと思つてゐるらしかつた。

彼の作品に何等の先入主なしに近づく誰でもを打つにちがひない最初の特色は、實にその密度であらう。諸君はいま笑はれた。何故なら、まだ三頁も讀まないうちに、多くの讀者を中止させ、退屈だと呼ばしむるものがその密度だからである。

しかし私は、ブルウストの作品の最も重要な特色を除いては、これをもつてその主要なものとなすに

躊躇しない。その密度とは一體どんな性質のものかと云ふと、——それを生じさせてゐるものは、頁の各種平方の中に夥しい量で塊まり合つてゐる感覺、印象及び感動なのである。恐らく現實がかくも繊細な、かくも精密な方法で透視されたことは未だ曾つてあるまい。

まあ、コンブレエのこの一節を聞きたまへ。

空氣(レオニイ叔母さんの部屋の)は、大へん滋養分のある、味のよい、沈黙の精のやうなもので飽和されてゐたものだから、私はそこへは一種の強烈な食慾をもつて近づいて行つた。ことに復活祭の休みの初めのまだ寒い朝々は、私がコンブレエに着いたばかりといふせゐもあつて、私はそれを一層よく味つたのである。私は私の叔母さんにお早うを云ひにその部屋へ這入る前に、私はちよつと次の部屋で待たされるのであつたが、そこにはすでに二個の煉瓦の間に火が熾されてゐる、その火の前にはまだ冬らしい日射しが温まりに遣ひよつてゐた。そしてそのため部屋中に煤煙のほひがこびりついてゐた。まるで、田舎によくある大きな竈口とか、古い館の煖爐の枠などのやうに。(さう云つたもの下では、人々は冬籠りの面白さを増すために、戸外に、雪でも、雨でも、はたまた大洪水のやうな災害でもいから起ることを願ふものだが……)私は祈禱臺と、いつもホックでカベアをとめた、凹んだ天鵞絨の眩かけ椅子との間を行つたり來たりしてゐた。その間、火はあの食慾をそそるやうな香り(それでもつて部屋の空氣はすっかり凝固してゐたが、やうやく朝のしつとりした、活氣のある新鮮さがそれを揺り動かし、「立ち昇らせ」てゐた)をバイのやうに焼きながら、それらの香りを薄く剃ぎ、金色にし、皺をよらせ、ふくらませてゐた。目には見えないが手で觸れられなくもない田舎菓子、あの大きな饅頭のやうなものにそれを仕上げながら。

そんななかで、私は戸棚だの、簞笥だの、壁紙だの、もつとしやりしやりした、もつと微妙な、もつと好評な、しかしもつともつと乾燥した匂ひを嗅ぐや否や、私はいつも人知れぬ烈しい欲望をもつて、あの花模様のある寝巻掛の、何とも云ひやうのなく汚れた、にぶい、不消化な、果實のやうな匂ひの中に、再び身を埋めてゆくのであつた。

「スワン家の方」¹

私が諸君に讀まうと思つてゐるもう一つの一節は、ブルウストが數秒間のことを描寫しながら僅か半頁足らずの中に收めることの出來た、感覺のみならず、感情の量をも諸君に感得せしめるだらう。それはオデットがとうとう打負かされてスワンの腕の中に身を投ずる瞬間だ。

彼は彼のもう一方の手をオデットの頬にそつて上げた。彼女は彼を見つめた。あのフロレンス派の巨匠の描いた女たち(それに彼女がよく肖てゐると彼の思つてゐた)の持つてゐるやうな、物憂げな、重々しい様子をして。そして彼女の輝かしい、大きい、しなやかな瞳は、その眼瞼の線にひつついて、まるで二粒の涙のやうに彼女の頬から落ちさうだつた。彼女は少し彼女の頸をかしけてゐた。あの基督教的であると同時に異教的な繪のなかですべての女たちがしてゐるやうに。そしてさういふ姿勢は、もともと彼女には習慣的のものではあつたし、それにまたかういふ瞬間にはそれが持つてこいであるのをよく知つてゐて、さうすることを忘れぬやうに心がけてゐたのであつたが、さういふ姿勢のままに彼女は自分の顔をスワンから離すために全力を出してゐるやうに見えた。あたかもそれが何かの見えない力によつてスワンの方へ引き寄せられてでもゐるかのやうに。そしてさういふ努力もとうとう空しかつたかのやうに彼女がその顔をスワンの唇の上に落してしまはないうちに、それを少し離して、一瞬間、両手

で支へてゐたのはかへつてスワンの方であつた。それは彼が、丁度、自分の非常に可愛がつてゐる息子の授賞式に興るべく招ばれてゐる兩親のやうに、そこに駆けつけ、あんなにも長い間あこがれてゐたその夢の實現を目のあたりに見ようとする瞬間を、出来るだけ自分の心に取つて置きたかつたからだ。恐らくまたスワンは、まだ自分のものにしてゐない、まだ接吻をしてゐない、そしてさういふものとしてはもう見納めになるであらう、このオデットの顔の上に、丁度その出發の日に、永久に立ち去らうとする風景を記憶して置かうとする、あの旅人のやうな眼ざしを注いでゐたのにちがひない。

「スワン家の方」^{II}

かかる厚さ(彼の本の)は、防禦力を完全に取上げられた精神的組織に依つて、或はそれを媒介としてのみ、生じ得るところの奇蹟だ。ブルウストが人生からかくも驚くべき綿密さをもつて印象を受け取つたのは、彼が決して人生と争はうとはしなかつたからだ。彼がこれだけ多くのものを得たのは、彼が最初何物をも欲しなかつたからだ。

さう、私がさつき語つた階段の降り方は、私にはますます象徴的に見えてくる。ペンキが彼の手袋にくつつくのは當然だつたのだ。そして第三者のみが、その間に入つて彼を保護し、彼の上への外界の粘着を禁じ得たのだ。

若しもブルウストの作品の重要性と獨創性とが解したいならば、先づそれが何物をも避け得ない者の

作品であることを考へよ。

しかし、我々はブルウストの性格の中に、彼の根元的な消極性及び印象過敏性の一方に積極的な性質を認めると共に、我々はそのに彼の作品の第二の相、彼の方法の別の獨創性の現はれるのをも見逃してはならない。

手袋の上のペンキの汚點がある。しかし、一方にはまた、ブルウストの強情、要求しそしてそれを手に入れるための彼の手腕、彼の貪慾、「彼の宿命のごとく思はれる受動的なるものを何か能動的なるものに變へんとする」努力、外貌に對する不信任、最初差し出されたものよりもつと堅固なる何物かを捉まへんとする欲求、眞理への熱情、があるのである。

コンプレエの一節を聞きたまへ。ブルウストが感動に直面して本能的にとつた態度、いかなる眞に哲學的な欲求によつて彼の驚くべき享受性が展開するか、諸君に理解させたい。

……突然、一つの屋根、一つの石の上の太陽の反射、一つの小徑の香りが、私を立ち止らせるのであつた。それらのものが私に與へてくれる或る特別な快さを楽しむために。それからまた、それらのものが私の眼に見えてゐるものの彼方に何物かを隠してゐるやうな風をしてゐて（私にはいかに努力をしてもそれが發見できなかつたが）そ

れを取りに来るやうにと私を誘ふので。そして私はそれらのものの中に確かに何物かがあるやうに感じたので、私はそこにちつと立止まつてゐた、動かさずに、見つめつつ、呼吸しつつ、そして形象や匂の彼方に私の思考と共に行かうとしながら。そしてもしも私のお祖父さんに追いつき、どんだん道を進んで行かなければならないやうな場合には、私は目をつぶりながら、それらのものを再び見出さうと努力した。私は屋根の線、石の色合ひを正確に思ひ浮べようとして一所懸命になつた。そして何故だか分らなかつたが、私にはそれらのものが今にも充ち溢れさうでもう半分開きかかつてゐる、そしてそれらのものがその覆ひになつてゐるところの、その中身をば將に私に手渡ししようとしてゐるかのごとく思はれるのであつた。

「スワン家の方」

かくのごとく子供の頃から、ブルウストは自分の中に世界を非常に蠱惑的なるものとして受け入れると同時に、彼はそのものを理解すべく、そのものからそのもの以上の何物かを引き出すべく、「形象の覆ひの下に」隠されてゐる現實（物質的なものであるか觀念的なものであるか彼は知らぬが）を發見すべく彼を駆りやる場所の——彼自身の言葉を借りれば——「困難な心の義務」を感じたのだ。レイナルド・ハアンは「ブルウスト追悼號」の中で、實際においても彼がいかにその義務に忠實であつたかを示すところの、非常に意味深いアネクトオトを語つてゐる。

私の到着した日、私達は庭園に散歩に行つた。私達はベンガアルの薔薇の木の柵の前を通つた。そのとき彼は突然立止つた。私も足をとめた。がすぐ彼は歩き出した。私もさうした。すると彼はまた立止つた。そして私に、い

つもの子供らしいすこし悲しさうな、やさしい調子で言つた。「僕だけでもうすこし此處に居ても構はないでせうか？ 僕はもう一度あの小さな薔薇の木が見たいのです。」私は彼から離れた。小徑の曲り角で、私は振り返つて見た。マルセルは薔薇の木のところまで引返してゐた。館を一周して歸つてきた私は、さつきと同じところに彼がちつと薔薇を見つめながら立つてゐるのを發見した。すこし首をかしげ、眞面目さうな顔つきをして、彼は目をまたたいてゐた。いかにも熱心に注意してゐるらしく眉を軽くひそめながら。そして彼の左手で熱心に、彼の小さな黒い口髭の端を自分の唇の間にはさんでは、それを噛んでゐた。私は、彼が私の足音を聞いて私の方を見たやうに思つたが、彼は私に話しかけようともせず、身動きさへもしなかつた。私はそれ故一言も云はずにその場を通り過ぎた。一瞬間がたつた。マルセルが私を呼んだ。私は振り向いた。彼は私の方に走つてきた。彼はやつと私に追いつき、私が怒つてやしないかと私に訊いた。私は笑ひながら、怒つてなどゐないことを確めた。それから私達は一時中絶してゐたさつきの會話を再び續けた。私はその薔薇のエピソードについては何も質問をしなかつた。私はそのことで冗談も言はなかつた。私はそんなことをすべきでないのを漠然と感じてゐたから……

**

若しも私たちが次のやうな言葉を絶えず思ひ出さなかつたならば、何物をも理解し得ないだらう。「私はそこちつと立止まつてゐた、動かすに、見つめつつ、呼吸しつつ、^{イマージュ}形象と句の彼方に私の思考ともに行かうとしながら……」——若しも私たちが絶えず、この追求し、欲望する精神を感じてゐなかつ

たならば……

リグイエエルはざつとこんな工合に論じながら、更にブルウストのかういふ寧ろ形而上的^{メタフィジック}な傾向がいかにしてもつと實證的^{ポジティブ}な傾向に轉換して行つたか、そしてそれがあらゆるクラシックに共通するところの人間的要素をどんな風に彼の作品に與へてゐるか、と云ふことにまで説き及ぼしてゐる。——そこまですべきであらうが、僕はもうだいたい疲れてゐる。ここいらで不本意ながらペンを置く。が、又、山のホテルにでも行つたら、ゆつくりブルウストでも讀んでやらうと思ふ。さうしたら、その時またこの手紙を續けよう。

昭和七年七月

ブルウストに關する三つの手紙を神西清に宛てて書いてから數ヶ月が過ぎた。その間、私は心にもなく、ブルウストの本を殆ど手離してゐた。

唯、ときたま、ガボリーのブルウスト論の中で見つけた「私の月日が砂のやうに私から落ちるのを感じる悦び」と云ふクロオデルの言葉が思ひがけずに私の口をついて出てくるやうな瞬間があつた。そしてちよつとの間だけ、私はその文句そつくりの悦びに浸つてゐるのだつた。

そしてその時はまた、私に、數ヶ月前ブルウストを夢中になつて讀んでゐたときの思ひ出がいつの間にか蘇つてゐる時でもあつた。

その數ヶ月の間に私は何をしてゐたか？ 私は俗な小説を二つばかり書いた。

夏のはじめに、ふと口に頬ばつたボンボンの味が、ながいこと忘れてゐた夏休みの楽しさとか、悲しみだとかを、私のうちにまざまざと蘇らせた。輕井澤のホテルに飛んで行つて、私はせつかにその

思ひ出を書取つた。

秋になつた。ジョルジュ・ガボリーの「マルセル・ブルウストに就いてのエッセイ」を讀んだ。ガボリーは、すでに死に瀕してゐたブルウストの代りに「ソドムとゴモル」や「囚はれの女」の校正をした時のことなどを物語つてゐる。これを讀んでゐたら私は急にその二つが讀みたくなつた。

私は「ソドムとゴモル」を讀み出した。が、すぐにそれを放棄しなければならなかつた。秋には定期的に出る熱がまたしても私を襲ひ出したから。

一月ばかり私はちつと寝てゐた。そして僅かに「ギルヘルム・マイステル」などを讀んだ。

冬になつた。私の二十代はそんな空虚のまま、この冬のうちに閉ぢようとしてゐた。

私は再びせつかに私の二十代の最後の小説にとりかかつた。それが私の過去の作品の無意味な繰返しになりさうなことは自分にも分つてゐた。しかしその時はどうしてもこれを書いてしまはなければ他のものには手がつかないやうな氣持だつた。

私はそれを書き上げた翌日、上野の美術館にフランス繪畫展覽會を見に行つた。そして私はたくさん騒がしい乾いた印象しか受けられないやうな繪の前を通り過ぎた後、一枚の大きなパステルの前までくると、そこに三十分ばかり私は釘づけにされた。その畫面一ぱいに何だか得體の知れぬ壞れたものがごたごたに積み上げられてゐる間から、或る不思議な靜寂がひしひしと感じられてくるのだつた。そして私

にはその苦しうな古代的静けさのみがひとり眞實なものやうに感じられ、それだけが現代にしっかりと根を張つてゐるやうに思へた。それはジョルジオ・デ・キリコの「トロツキエ戦勝標」だつた。

「こんな繪を見せられちやたまらないなあ——」

昂奮してその繪の前を去りながら、私はただ溜息をついた。私はひどく疲れたやうな氣がした。そしてなんだか急に自分の書き上げたばかりの作品があまり性急で、あまり乾いてゐるやうに思へだした。

* そのキリコの繪と向ひ合つてピカビアの數枚の繪が並んでゐた。ピカビアは古代とははむれてゐる。それをからかつてゐる。だからその繪は騒しいだけなのだ。さう云ふ缺點がキリコの古代のやうに靜かな繪の前だけに一層目立つて見えた。

**

眠りから醒めた瞬間、いま夢みてゐたばかりのごたごたした不確かな事物の間から、一つの像——たとへば一つの女の顔だけが、私の目にありありと残つてゐる。そしてその不思議な美しさが、私に、以前から彼女に對して抱いてゐる愛をその時はじめて氣づかせるやうなことがある。キリコの繪のなかの漂流物の間に混つてゐた一個の青ざめた石膏の首はそれに似てゐた。

**

今、考へて見ると、さう云ふキリコの悲痛な繪を自分の二十代が終らうとしてゐる瞬間に私が見たと云ふことは何か意味がありさうに思へるのだ。

その繪を見てきてから數日といふもの、私はへんに切なくてならなかつた。キリコの悲痛な美しさが、そしてこの頃そんなキリコの繪にだけすがりついてゐるやうに見えるコクトオの苦しい氣持が、私には今までになくしみじみと分かつたのだ。

私は突然、獨逸語を勉強し直さうと思つた、ゲエテが原文で讀みたくなつたのだ。キリコが私をゲエテに向はせたのだ。私は、今日のすぐれた詩や繪の中で死に瀕してゐるやうに見える靜かな古代的な美しさを、その昨日の生き生きした完全な姿でもつて見直したいのだ。

私はインゼル版の「詩と眞實」などを買つてきた。しかし永いこと獨逸語を讀まない私にはすぐにはそれを讀めさうもなかつた。

**

私はしばらくどうしやうもない氣持で日を過してゐたが、或日、ふらりと神戸へ出かけた。

露西亞人ばかりのゐる、小さなホテルに泊つた。そのホテルのことを私は「旅の繪」といふ小品の中に描いた。

私はトランク一個すら持たず、勿論、本などは一冊も持つて行かなかつた。そんなものは讀みたくもなかつたのだ。しかし、最初の夜、慣れないベッドの上になかなか寝つかれず、本がなくて困つたので、翌日私は海岸通りの何とかいふ藥とパイプと洋書を買つてゐる店でサミュエル・ベケットの「ブルウスト」といふ小さな英語の本を見つけて買つてきた。

晝間は町や波止場をぼんやり散歩をして、夜寝るときだけそれを讀んだ。言つてゐることには大して獨創的なところはないが、しかしブルウストの方法をかなりてきばきと紹介したもので、ある頁は私に私の嘗つて讀んだことのある數十頁にわたる長い情景を一瞬間に蘇らせ、また他の頁は是非そこを讀んで見たいものだと思ふに空想させたりしてくれるので、なかなかその夜毎の一二時間の讀書は楽しかつた。

そこに一週間ばかり滞在してゐるうち、私は扁桃腺をやられて、しかたなしに家へ歸つた。ベケットに刺戟された私は寝ながらブルウストの「再び見出された時」を讀みはじめた。

私はもうすでに三十歳になつてゐた。

**

「再び見出された時」は漸く私を活気づけてくれた。

ブルウストがそれまで私の内部に奥深く眠つてゐたものを少しづつ呼び醒ましたのだ。すでにコクトオやなんか私の内部をすつかり耕してしまつたものと思つてゐたのに。私の内部に眠つてゐるものはまだまだうんとあるのだ。その発見が何よりも私を元気づけた。

私は當分ブルウストを讀んでやらう。さうだ、それからゲエテも讀まう。私は自分の跡にどんなジグザグな線が残るか知らないが、ともかくもこの二つの相異つた精神について行つてやらう。その一方が詩に對する私のやや性急な愛をもつと、平靜な愛に變へてくれるだらうならば、また一方は、私のこれまでに殆ど打棄らかしておいた自己の考へへの誠實を養つてくれるだらう。

*ブルウストのなげやりな混雑した文體は私の簡潔な文體への好みを困らせる。しかしそれはガポリイも言ふやうに、彼の美徳——誠實であることの結果であるやうに見える。私は今までのなまじつかな簡潔さよりも、さう云ふ誠實な混濁を欲しいのだ。

**

私とその秋のはじめに讀んだジョルジュ・ガポリイの「マルセル・ブルウストに就いてのエッセイ」は、彼の内部に眠つてゐたものがブルウストによつて呼び醒まされた過程を精しく語つてゐて、面白い。ブルウストの死んだのはある冬の晩（一九二二年十一月八日）だつた。前から彼が重態であることは知つてはゐた。しかし彼の側近ではなかつたので、ガポリイはその翌朝、新聞を讀んではじめてその死を

知つたのだつた。新聞にはごく小さな記事しか出てゐなかつた。それにはただ彼が一九一九年度のゴンクウル賞の受賞者だつたと云ふことだけが書かれてゐた。

「それは日曜日だつた。私は、アペリティブの時間になつてもまだブルウスタのあるカフェの中に、ブルウスタが死んだといふことなぞ知らない人々の間に、坐つてゐた。私はボオドレエルの死を、そしてその死を知つたにちがひない人々のことを夢想した。それから私は再びブルウスタの死の上に戻つて行つた。……私のホテルの部屋には、花模様のある机掛で掩はれたテエブルの上に、『囚はれの女』の原稿が載つてゐるのだ。……晩、私はそこに歸つて行つた。しかし、どうしても私はそれを讀み續けるやうな氣にはならなかつた。私のことを子供らしいと云ふ奴は云ふがいい。だが、前もつて自分の容態をはつきり知つてゐて、一生の間あんなにも死について考へてゐたその死者のことを思へば、このタイプライターで打たれてあるとは云へ、彼の手が觸れ、彼の眼差が注がれ、その餘白やその端に貼られてある(まるで未知の國の地圖のやうに擴げられる)薄つべらな紙の上に彼が澤山の書入れをした、この原稿を諸君は何と見るか？」

* 重態になつてゐたブルウスタには「囚はれの女」の原稿を訂正することが出来なかつたので、前に「ソドムとゴモル」の校正を見たガボリイがその仕事を託されてゐた。「囚はれの女」は彼の死後間もなく刊行された。

ガボリイは「ソドムとゴモル」の校正をするまではブルウスタを殆ど讀まないでゐたことを告白してゐる。

「スワン家の方」の最初の部分をほんの少し讀んで、なんだかそれから晦澁な、ぎこちない印象を受けたままそれを放棄してしまつたのだと云ふ。そしてその文章の長過ぎることを彼は讀まない口實にしてゐた。ともかくも彼はブルウスタを理解しなかつたのだ。が、心の底ではそれが單なる時の問題にすぎないやうに感じてゐた。

さう云ふガボリイをブルウスタの方へ導いたのは、フロイドだつたのだ。

そこでガボリイは、フロイドの學説が初めて巴里に這入り込んできたときの話をし出してゐる。フロイドの弟子である、あるボオランドの婦人がやつてきて彼女の小さなサロンで初めてその學説を紹介した。その會にはN・R・Fの作家たちも殆ど全部出席した。しかし或者にはその會の目的は科學ではなかつた。それを氣晴らしだと思つてゐた。だんだん皆は不注意になり、不眞面目になつて行つた。そして最後の會はとうとう馬鹿笑ひの中に終つた。

その會はそんな不首尾に終つてしまつたが、しかし精神分析に對する興味はガボリイをブルウスタの

方へ導いて行つた。ブルウストは勿論フロイドを知らないだらうし、フロイドも恐らくブルウストを讀んでゐないであらうが……

その時丁度、ガボリイはN・R・Fの社長から「ソドムとゴモル」の校正を託されたのだ。

「『ソドムとゴモル』の書き出しは私に私の初期のポオドレエル熱を思ひ出させた。」とガボリイは書いてゐる。

「……ポオドレエルの思ひ出が私をブルウストの作品へ導いて行つた。ブルウストとポオドレエルの間には多くの類似点があるのだ。ブルウストはポオドレエルのやうに、死に先立つところの死苦をはずきりと知つてゐた。又彼のやうに、少からずカリカチュアの趣味、レスピアンの趣味を有つてゐた。『ポオドレエルに就いて』といふジャック・リヴィエールに宛てた手紙の中で、彼は『悪の華』が最初は『レスピアン』と題されてゐた事を、そして『悪の華』といふ題はバブウによつて發見されたのであることを喚起させてゐる。又二人とも屢々珍らしい形容詞を搜してゐる。ポオドレエルが『秋の歌』の中で「出發のごとくに響く」ところの「神祕な物音」と形容したのは、ブルウストが『ソドムとゴモル』の中で一少女の笑ひを「ジエテニウムの香りのやうに、きつくて、肉感的で、挑發的な笑ひ」と形容したのに

も比較されよう。二人の間には、もつと他の類似点がある。不意打に關するポオドレエルの理論と、ブルウストの作品の中にまるでヴオドヴィルのやうに仕組まれてある多くの不意打の効果と。ポオドレエルの傳説と、ブルウストの傳説と。それから悪魔主義がポオドレエルの作品に於けるのは、スノビズムがブルウストの作品に於けるやうなものだ。ともに裝飾であり、缺點だ。……しかしながら、ブルウストがポオドレエルの「影響」(この言葉に普通持たされる悪い意味で)を受けたとは言へない。ポオドレエルが彼に與へたものはすべてブルウストは自分の物としてゐる。(バルザックが「創造の錬金術」と名づけたものによつて)……私はペンを手にしたまま、讀んでゐるそのテキストからどうしても離れられなかつた。ときどき章句の美しさや、反省の情熱的興味が私の注意をそらしはしたが、そしてまたハムラン街の彼の部屋(いつも鏡屏の閉まつてゐる)の中で、眞夜中、死の床にならうとしてゐるそのベッドの上に體を折り曲げて、作品を校正したり、書き直したりしてゐるブルウストの幻が目の前にちらついてならなかつたけれども。死にかかつてゐる者によつて完成された、何といふ仕事! 死についての感想を筆記させるために死苦の中から再び身を起したブルウスト、そしてその痛ましい部屋の散らかりやうと云つたら!

箱だの、壘だの、熱くなつた枕の皺の中に

くしやくしやになつてゐる貴重な手帳だの、

インキの汚點しみのついた机掛の上にはらばつた本だの……

以上抄したものはガボリイのエッセイの最初の一部分に過ぎない。ガボリイの筆は更らに、ブルウスが非常な關心を持つてゐたやうに見える夢の分析に向ひ、それから更に彼の描いたレスピアン達の方へ向けられてゆく。

しかし其處は、私がまだ充分に読んでゐない「ソドムとゴモル」や「囚はれの女」を読み終つてからにでもした方がいい。

サミュエル・ベケットの「ブルウスト」はガボリイのエッセイ風なものと異つて、ブルウストの方法を丹念に追究してゐる。(ベケットと云ふ人のことは少しも知らないが、聞けば「トランジション」などによく詩を出してゐるイギリスの若い詩人ださうである。)

ベケットは先づブルウストの謂ふところの無意的記憶を説明してゐる。(それに就いては私もこの前の雑誌の中で説明した。) さうしてベケットはその無意的記憶の主要な例が「失はれた時を求めて」全卷

のうちに約十一許りあることを指摘してゐる。次に擧げるのがそのリストだ。

- 1 茶の中に浸したマドレエヌ。(「スワン家の方」*)
- 2 ベルスピエ醫師の馬車から認めたマルタンヴィルの鐘塔。(同右*)
- 3 シャンゼリゼエの亭の徴くさい臭ひ。(「花さける少女の影に」*)
- 4 バルベツクの近くで、ヴィユパリジス夫人の馬車から認めた二本の樹木。(同右*)
- 5 バルベツクに近い山査子さんざしの籬。(同右*)
- 6 バルベツクのグラント・ホテルへ二度目に行つた時、彼は彼の靴のボタンをはづさうとして屈む。(「ソドムとゴモル」**)
- 7 ゲルマント邸の中庭のでこぼこな石疊。(「再び見出された時」**)
- 8 皿にぶつかるスプウンの音。(同右**)
- 9 彼はナブキンで口を拭く。(同右**)
- 10 水管を通る水の音。(同右**)
- 11 ジョルジュ・サンドの「フランソワ・ル・シャンピ」。(同右**)

私は此處でベケットの本を離れて、それらの十一の無意的記憶に關して私のための覺書をつけて置きたい。

最初の有名なマドレエヌは前の「雑記」にも引用したから省略する。第二の経験は、幼時、ベルスビエ醫師の馬車に乗せて貰つてコンブレエへ歸る途中に起る。ある道の曲り角で、夕日に照らされてゐるマルタンヴィルの鐘塔を認めたとき、彼はなんとも云ひやうのない悦びを感じる。「私にはそれらの姿を地平線に認めて私の受けた悦びの理由は分らなかつたし、その理由を是が非でも發見しようとすることはすゝふん苦しいやうに思はれた。……」そのうちその鐘塔の背後に隠されてゐるものがいくらかづつ彼にはつきりしてくる。これまでになかつたやうなある考へが浮んでくる。それが言葉といふ形式をとり出す。彼は醫師から鉛筆と紙を貰ふと、すぐその場で、鐘塔の奥へつつある印象を書きつける。それを書き上げてしまふと、とても嬉しくなつて、彼は聲をかざりに歌ひはじめた。

第三の場合は、シャンゼリゼで少女たちと遊び疲れて、自分の家への歸り途、四目垣のある亭の徴くさいやうな臭ひを嗅ぐと、突然、いままで潜伏してゐた幻イマージュが浮び上るのだ。その幻はそれとそつくり同じやうにじめじめした臭ひのしてゐた、コンブレエのアドルフ叔父さんの小さな部屋ちやうどのそれなのだ。しかし何故こんなつまらない幻の喚起がこんなにも異様な悦びを彼に與へるのか分らないのである。

第四の場合。バルベックの近郊をヴィユバリジス夫人などと共に馬車を驅らせてゐる間に、彼は三本の樹木を認める。「私は三本の樹木を見つめた。私はそれを十分に見ることが出来た。しかし私の心にはそれらが何かしら得體の知れないものを隠してゐるやうに感じられた。……私はどんなにか一人きり

になつてしまひたかつたらう。……さうしなければいけないやうにさへ私には思へた。私は一種特別な悦びを覚えてゐたけれども、それはもつともつとそれに就いて考へるやうにと私を強ひたのだ……」

しかし馬車は遠ざかつて行く。

「馬車は私がおのみ眞實であると信じてゐたものから、私を眞に幸福にさせましたであらうものから、すんすん私を引き離して行つた。……私はまるでひとりの友人を失つたやうに、自殺をしたやうに、ひとりの死人を知らない振りをしたやうに、神を否認したやうに、大へん悲しかつた。」

第五の場合も同じバルベックである。アンドレエといふ女友達と一緒に散歩をしてゐるうちに、「突然、とある凹んだ小徑で、私は幼時のやさしい思ひ出に心臓をしめつけられて立止つた。私は私の足許にまで延びてゐる、擦り切れた、艶のある葉によつて、もうすつかり花の落ちつくした山査子さんざしの茂みを認めた。私のまはりには昔のマリアの月や、日曜の午後や、すつかり忘れてゐた信賴だの過失だのが一つの雰圍氣になつて漂つた。私はそれをつかまへたいと思つた。私は一瞬間立ち止つてゐた……」

第六の経験は「心の間歇」と呼ばれてゐる有名な一節だ。彼はその愛してゐた祖母の死後、母に連れられてバルベックのグラント・ホテルへ二度目に行く。（最初の時はその死んだ祖母と二人きりで行つたのだ）最初の夜、私は心臓が苦しくてしやうがなかつたので、その苦痛をごまかすために、私は靴をぬがうとして注意深くしづかに屈んだ。しかし、私が私の深靴の最初のボタンに手をふれるや否や、私

の胸は見知らない神々しいもので一ぱいになつて脹らんだ。嗚咽が私をゆすぶり、涙が私の目から流れた。」

その瞬間に、數年前の、このホテルへ着いた最初の晩、疲れ切つた彼のために靴をぬがせてくれようとして、その上に身を屈めてゐた祖母のやさしい、氣づかほしげな顔が、その腕のなかへ身を投じたいやうな衝動を彼が感じたくらゐ、生き生きと完全に蘇つたのだ。そしてそれと同時に彼は初めてその祖母が死んだといふ事に、死んだのが誰であつたかといふ事に、氣づくのだ。そして彼はその祖母が死んでから一年許りと云ふもの、彼女のこと、彼女に對する自分のこまやかな愛情すらも、すつかり忘却してゐたこと（ブルウストはそれを「心の間歇」と呼んでゐる）を認めて驚く。

さて、最後の五つの経験は「再び見出された時」の第二部のはじめに次から次へと連続的に起る。だからそれ全部でもつて一つの靈感を形づくるものと見ても差支へない。其處でブルウストは彼の作品がいかにして生れたかを自ら語つてゐるのだ。

ゲルマント邸に於けるマチネに招待されて、彼は途すがら、いかに自分には文學的才能が缺けてゐるか、のみならず文學そのものが空虚なものであるかを悲しい氣持で考へながら、其處へ出かけて行く。

中庭を横切らうとしたとき彼はあんまりぼんやりしてゐたものだから、向ふからくる自動車に氣づかなかつた。運轉手の叫びで、彼は慌てて脇へどく。そして彼は思はずも出つばつてゐた敷石につまづく。が、眞直にならうとして、彼がその足を前のよりもいくらか低くなつた石の上のせつた瞬間、彼の悲しい氣持は突然消えてしまふ。そしてその代りに、彼がバルベックの近くで馬車の上から認めた三本の樹木だとか、マルタンザイルの鐘塔だとか、茶の中に浸したマドレーヌの味だとかが嘗つて彼に與へたのとそつくりな異様の悦びが彼を襲ふ。が、何故このやうな悦ばしさが二個のこぼした石疊によつて喚起されたのか？ 彼は突然、自分の足の下の凸凹が、ヴェニスサン・マルコ洗禮堂の二個のこぼした石疊の上で感じてゐたあらゆる感覺を生き生きと彼に喚び起させたからであることに氣がつく。だが、何故こんなつまらない感覺の喚起の中にこんなにも異様な悦びがあるのだらうか？ その不可思議に苦しめられながら、彼はゲルマント邸へはひつて行く。

彼は小さな圖書室に導かれる。丁度サロンでは音楽が演奏されてゐる最中なので、それが終るまでそこで待つてゐなければならぬのだ。その時その圖書室の隣の食器室から皿にスプウンのぶつかる音が聞えてくる。するとさつき凸凹な石疊が彼に與へたのと同じやうな悦ばしさが再び彼を襲ふ。それは森のほひと煙のほひとの混つた、なんだか熱いやうな感覺である。皿にぶつかつたスプウンの音が、小さな森の手前に汽車が停まつてゐた間その車輪の何かを修繕してゐた工夫のハンマアの音を喚起

させたのだ。……給仕長が彼のためにオレンジエドを持つてくる。彼は渡されたナブキンで口を拭く。すると今度は突然、青空の幻が彼の目の前をよこぎる。彼はまるで今自分がバルベックの海岸に臨んだホテルの窓の前に立つてゐるやうに感ずる。昔その窓を前にして彼が糊の利いたタオルでもつて骨を折りながら自分の體を拭いてゐた時のことが、いま彼が口を拭いたばかりの硬ばつたナブキンによつてありありと思ひ出されたのだ……

さう云ふ経験を繰り返してゐるうちに、彼は遂に彼の捜し求めてゐた一つの法則を發見するに至る。「私のうちに再生したもの、……そのものは物體の原素^{エッセンス}だけを食つてゐるのだ。そのものはその原素の中にのみ彼の食物、彼の無上の快樂を見出す。……嘗つて聞いたり嗅いだりしたことのある或る音響とか、或る匂ひとかが、再び——現在と過去とに於いて同時に、實在はしなくとも現實的に、抽象的にならずに觀念的に——聞かれたり嗅がれたりするや否や、忽ち物體の永續的なそして平常は隠れてゐるところの原素^{エッセンス}が釋放される。そして或時はずつと前から死んでゐることくに見え、また他の時はさうでないごとくに見えてゐた、眞の自我^{モア}が、彼に齎^{モア}された天の糧を受けて、覺醒し、活氣づいてくる。時間の秩序から飛び出した一分間が私にそれを感じさせるために私を時間の秩序から飛び出した人間に改造したのでつた。」

このやうにして作品の結論が書き出しのマドレヌの上に直接に結びつけられてゐるのだ。ブルウス

トは作品を始めたごとくに作品を終へる。ただ、彼はとうとうマドレヌの神祕の鍵を發見しつつ終へたのだ。^{*}「これらの感覺を幾多の法則及び觀念の表象として説明しなければならぬのだ。換言すれば、私の感じたものを薄くらがりがりから引き出して、それを何か精神的に同値のものに變へなければならぬのだ。ところで、私にとつてその唯一とも見える手段は、藝術的作品を創ること以外に有り得ようか？」

^{*} バンジャマン・クレミユはこれらの點からアルカストの作品が古典的なピラミッド^{ピラミッド}式^{ピラミッド}構成^{ピラミッド}を持つものであることを主張する。しかしそれに対してそれは構成と云ふよりも、寧ろ統一と云ふべきだらうと反對してゐる論者もある。

まだ私が説明しないである最後の二つの無意的記憶もやはり、彼がその小さな圖書室の中にかかるところを考へめぐらしてゐる間に、彼を襲ふのだ。水管の中で水が軋るやうな音を立てる。夏の夕方に、バルベックの沖合で遊覧船の立てた長い叫びにそつくりなその音響が、さながら自分がバルベックに居るやうな思ひを彼に抱かせる。……彼は書棚のうちにふと一冊の本の表題——ジョルジュ・サンドの「フランソワ・ル・シャンピ」を見つける。すると彼は急に、何だか泣きたいやうな感動に襲はれてしまふ。子供の時分、いつも眠る前に、彼の母がその小説を讀んでくれたその折の、低い、子守唄のやうなくらゐにまで甘やかな彼女の聲が、いま彼の耳にまざまざと蘇つたからである。

音楽がやつと終つたので、彼はその圖書室を去つて、サロンの中へはひつて行く。戦争が長いこと彼を社交界から離してゐた。彼は其處でいきなり假面舞踏會のやうな印象を受ける。彼は灰色の髪だの、白い髻だの、皺だらけの顔のうちに辛うじて彼の知人等を認める。最初彼がフォルシュヴェイル夫人（前スワン夫人）だとばかり思つてゐた肥つた未亡人は、何んとその娘のジルベルトなのだ！そして其處に集つてゐる人々はみんな「彼等の背後に重たさうに引きすつてゐる年月のためにひよろ長く伸びて」見えるのである。

「再び見出された時」はさう云ふ年をとつた主人公たちの長い、痛ましい描寫のうちに終つてゐる。

昭和八年四月

リラの花など

ブルウストの文體について

散文の本質といふものは、自分の考へをどんな風にも構はずに表現してしまふところにある、と言つてもいいやうであります。スタンダールにしる、バルザックにしる、さういふ意味での、本當の散文家でありました。それから、いまお話ししようとするブルウストも、さういふ散文家の最もすぐれた一人であります。

ブルウストの文體は、一見しますと、いかにも書きつばなしのやうで、混亂してゐて、冗漫に見えるのであります。しかし、それだからと言つて、その文體そのものを非難する譯には行きません。ブルウストの場合には、その驚くべき冗漫さも已むを得ぬと我々に首肯せしめるだけの充分な理由があるからであります。「スワン家の方」の何處でもいいから開いて御覽なさい。例へば、ここにアスバラガスを描寫した數行があります。

私は、女中がいま莢を剥いだばかりの小豌豆が、テーブルの上に球ころがしの緑色の球のやうに澤山ならんでゐるのを見ようと思つて立ち止つた。しかし私がうつとりしたのはアスバラガスの前だつたのだ、——それはすつか

り群青色と薔薇色とに濡れてゐて、その穂先は葵色と空色とにうつすら染まりながら、まだ畑の土のこびりついてゐるその先端に行くにしたがつて漸々に、天上の虹のやうに暈かされてしまつてゐた。さういふこの世ならぬ色合のせるか、私にはそのアスパラガスが、何んだか或る微妙な生物が面白半分そんな野菜に變身してゐるやうな気がし、そしてその變裝(食べようと思へば食べられる、硬い肉の)ごしにまるであの曙の生れようとしてゐるやうな色合、あの虹の下描きのやうな色合、青味を帯びた夕暮れの消えんとしてゐるやうな色合となつて、その風變りなエッセンスが——それを晩飯に食べた晩は、夜中すつと、シエクスピアの夢幻劇みたいな詩的でばかばかしい笑劇でも演ぜられてゐるかのやうに、私の尿瓶を香水瓶に變へてしまふところの、それほど風變りなエッセンスが、そのうちに認められるやうに私には思はれた。

皆さんに出来るだけお解り易いやうにと思つて大變意譯をしましたので、原文をひどく傷つけやしなかつたかと恐れてゐますが、——こんなお粗末な翻譯で見ましても、ともかくも、このセンテンスが非常に長いといふことだけはお解りになるでせう。一度讀んだきりでは、恐らく何が何やらお解りになりません。三度、四度と繰り返し讀んでゐるうちにやつとその意味が掴めるやうになる。そして初めて何んといふ豊富な形象がこの短い章句の中にぎつしりと詰め込まれてゐるかに驚きます。(こんな長たらしいセンテンスは殆ど毎頁に大きく寝そべつて居るのです。——御覽のとほり、アスパラガスの描寫は唯二箇のセンテンスで了つてゐまして、それは豌豆のことを書いた比較的短いセンテンスに先立た

れてゐます。いきなりアスパラガスの描寫を始めずに、先づ田舎家の臺所に這入りこんだ少年の「私」が、テエブルの上に轉がつてゐる豌豆を見ようと思つて立ち止りながら、それからふとその傍にあつたアスパラガスに目を止め、思はずそれにうつとりと見入る風に運ばれてゐます。さういふ不意打ちによつて、その少年のみならず、讀者にもそのアスパラガスの美しさを一層生き生きと感ぜさせる。——かう云ふところにも、ブルウストの常套的な手法の一つがあります。……で、そのアスパラガスを描かうとするや、先づその全體の色調を述べます。それから、徐々にその穂先の細かなニュアンスに移つて行きます。と同時に、その獨得なニュアンスが一齊に喚び起すさまざまな記憶(曙の色合、虹の色合、夕暮れの色合)、そしてその一方では又、それを食べた晩のシエクスピアの夢幻劇のやうな記憶(匂ひの)までが其處に展開されてゐる。——かういふ工合に、ブルウストは、一瞬間の感覺の喚び起すあらゆるものを残らず、手荒いくらゐに、一つのセンテンスの中に一緒に縛りつけてしまひます。が、若しブルウストがそれだけのことをしかなかつたのなら、彼の作品は遂に印象派の畫家たちの仕事を單に文字の上でしたのに過ぎなかつたでせう。が、彼の作品がさういふ印象派以上の何物かであり得ましたのは、——

此處で、私はブルウストの友人のある音樂家の語つた彼の逸話を挿入することを許して貰ひます。その音樂家の話によりますと、ある田舎の別荘に彼と一緒に招かれたときのこと、その庭園を二人で散歩

中、突然彼は一本の薔薇の木の前に立ち止つたきり、その友人のことなど忘れてしまつたやうに、いつまでも、顔をしかめたまま、それを見つめ續けてゐたさうであります。さういふ殆ど傍若無人と言つていいほどな、そしてその當人自身をも苦しめるやうな、何物にか強制されてゐるかに見える模索が、こんなアスバラガスのやうなものの前でもなされてゐることを諸君も既にお氣づきになつてゐるだらうと思ひます。ブルウスト自身も、さういふ彼の倦まざる模索を、小説の終りの方で、こんな風に説明してゐます。「私の感じたものを薄くらがりから引き出して、それを何か精神的に同値のものに置き換へなければならぬのだ。」そしてさういふ感覚に瞬間的に訴へられるもの、云はば泡沫にも似たものから、もつと永遠性のある、何か精神的なものを引き出さうとする、さういふブルウストの模索こそ、彼の作品を單なる印象主義のそれから切り離してゐると言はなければなりません。

**

もう一つ、「スワン家の方」から引用して見ませう。今度はリラの花の描寫です。

リラの季節もその終りに近づいてゐた。二三の花はまだ彼等の花のデリケートな氣泡 (bubbles) を葵色の高い枝付燭臺のやうに噴出 (effusant) させてゐたけれど、つい一週間前まではその香ばしい泡 (mousse) を逆巻いてゐた (dételait) それ等の葉の多くの茂みの中では、空虚な、ひからびた、香りのない泡 (écume) が、ちぢまり、黒ず

みなから、萎んでゐた。

これはクルチウスといふ獨逸の批評家が「ここで、ブルウストは、比喩の連絡によつて、我々にリラの實體、そのものを目に見えるやうにさせてゐる」と言つて激賞してゐる一節であります。クルチウスが説明しますには、「先づ、植物の生長のリズムが「噴出する」(effuser) といふ言葉によつて我々に與へられる。それはまことに「葵色の高い枝付燭臺のやうに」輝かしく見える。それから、小さな星状の花が、水面に生れる「氣泡」(bubbles) に比較されつつ示される。」(私の翻譯では、それ等の比喩の順序が逆になつてゐますが、これは已むを得ません。) それから、すべての比喩が岸邊に戯れる波に持つて行かれてゐます。「逆巻く」(defreter) 「泡」(mousse) 「泡」(écume) ——ブルウストは、彼自身でも、「フロオベルのスタイルについて」といふエッセイの中で、「自分は比喩のみがスタイルに或種の永遠性を與へ得ると思ふ。」と述べてゐますが、これらの海の要素から借りて來た一聯の比喩が、いかにリラの實體そのものを我々の目に見えるやうにさせるのに効果的であるか、これは全然リラの花なんといふものを知らない我々をも、それを知つてゐるかのやうに楽しませてくれるのでも知られます。そこにこそ藝術上の創造があるのであります。

クルチウスは更らに、これらの章句のリズムの素晴らしさを説明してゐますが、それは原文で味つていただくより仕方がありませんし、それは私などの持つてゐる語學力では、なかなかその妙味はわかり

ません。——しかし、ブルウストが、どんなにさういふ章句のリズムに注意してゐたかは、彼の友人の一人が語つてゐる次ぎのやうな逸話によつても解りませう。

ブルウストは、ある眞夜中に（それは彼が何時も友人を訪問する時間でしたが）もう寝てゐたその友人のところを訪ねて来ました。さうしてそんな遅い訪問をいかにも慇懃に言ひ譯をしながら、佛蘭西語で *sans rigueur*（厳しくなく）といふのを伊太利語ではどういふか、その正確な發音法を教へて貰ひたいと頼みました。そこでその友人は即座に *senza rigore* と發音しました。するともう一度それを繰り返してくれと言ふので、今度はゆつくりと發音しますと、それをブルウストは、目をつぶりながら、聞いてゐたさうです。それから丁寧に禮を云つて、忽ち消えるやうにその部屋を出て行つたさうです。——そのあとで、その友人は何んだか、その異様な客が自分の部屋から、自分では氣づかないでゐた形や、色や、匂ひや、音などを持つて行つてしまつたやうな、妙な苛立たしさを感じずには居られなかつたと告白して居ります。

**

「ブルウストの聲は忘れられない。」と、彼の年少の友であつたコクトオが書いてゐます。「僕には彼の作品を聴かずに、彼の作品を読むことは困難だ。スワンだとか、アルベルティンだとか、シャルリュス

だとか、ヴェルデュランだとかが喋舌するとき、僕は、ブルウストが喋舌するときの、喋舌らうとして唸るとき、腹の底から笑ふやうな、不確かな、引き伸ばされた聲を聴くやうな氣がする。」——さう言はれると、ブルウストのそんな聲を知らない我々にも、その聲のアクセントの描く曲線は臆げながら辿れるやうな氣もしますけれど、さて、その微妙なところになりますと、我々外國人の耳にはなかなか掴みにくいのであります。ことに翻譯などで讀む場合は、先程説明しましたやうな比喻の方はどうにか解るやうな氣もしますが、かういふ文章のリズムは全然解りつこないと斷言してもいいかと思ひます。

私は冒頭に、どんな風にも構はずに表現してしまふのが散文の本質だと述べ、只今は、さういふブルウストの文體の微妙な味にまでも迫らうとしました。しかし、さういふ文體の微妙な味といふものは、作家がどんなに無頓着に書かうと、おのづからそのうちに具はつてしまふものでありますので、一層それが微妙なものであることを御注意申し上げたいと思ひます。

ブルウストの文體は、注意深く見てみますと、以上のやうな微妙なものであります。その表面は、文法上の誤りなども大變多いさうで、いかに最眞眼に見ても、甚だ不手際なものであります。それは先程も述べましたやうに、一瞬の感覺から、すぐその場で、何か永久性のある精神的なもの（それこそ本當の現實なのであります）を抜き出さうとする困難な仕事、その仕事に参加する夥しい數の記憶のこ

んがらかつた現はれであります。——もう一つ、その出発点となつてゐる、感覺そのものの豊富さに依ると言はなければなりません。

コクトオの話によりますと、ブルウストから受取つた手紙には、いつも「僕らがそんな事をしたとは一向信じられない、その癖、どうも僕らがしたらしい、そして唯、僕らの粗雑な感覺がそれを氣づかないでゐたに過ぎないところの、さまざまな被害の苦情」が一ぱい書いてあつたさうであります。この話や、さつき眞夜中にブルウストの訪問を受けた友人の話（ブルウストが歸つて行つたとき何んだか自分の部屋の、自分では氣づかないでゐた形だの、色だの、匂ひだのを持つて行かれたやうな一種の苛立たしさを感じたといふ）などから推して見ましても、確かにブルウストは他の人間の全く知らないやうな感覺の領分と交渉を持つてゐたことが理解できます。さういふ今まで誰もが語らうとしなかつた領分内のことを、ブルウストは語らうとしましたから、甚だ不器用にしか語れなかつたのだと言ふことが出来ます。そしてさういふ不器用な、ぎこちないものこそは、ブルウストに限らず、あらゆる獨創的な作家に背負はされてゐるところのものであると申しても差支へないやうであります。

昭和九年五月

附記 「マルセル・ブルウスト」はもうかれこれ十数年前の舊稿である。それ以來、私はいくたびかブルウストを読み、そのつどこの大なる作家に対する敬愛を深めて來た。今年の夏も私は一月ばかりブルウストを読んでゐた。このごろの私にとつてはこの比類のない作家が彼獨自の新しい方法で絶えず人生の姿を明らかにしてゆく——その見事な過程のみならず、そこに漸次見出されてゆく人生の業苦のやうなものがひしひし胸に迫つて來るのである。いまの私はさういふブルウストについてこそ語りたい。——しかし、いまだ機會を得ず、此處にはこの舊稿をその儘載せておくことにした。（昭和十八年十二月記）

小説のことなど

モリアックの小説論を読んで

二五六

この頃私は逢ふ人ごとにモリアックの小説論の話をしてゐる位だ。

私はつい最近、彼の小説論を二冊ばかりと、「癩者への接吻」といふ小説を一つ、立て続けに讀んだところなのだ。彼の小説論は、勿論本格小説論だが、讀んですこぶる啓發されるところがあつたし、小説の方は彼としてはかなり初期のものらしいが大へん氣に入つた。これこそこの頃私の一番讀みたいと思つてゐた小説であるやうな氣がした。この作以來、モリアックはいい小説をだいたい書いてゐるやうであるから、この夏でも出来るだけ多く讀んで見たいと思つてゐる。

さて、モリアックの小説論だが、早速その一節を引用して見る。

「十八歳の少年は、彼が人生について知つてゐるもの、即ち彼自身の欲望、彼自身の幻滅をもつてしか本を書くことは出来ない。彼は自分でその殻を破つたばかりの卵を描くことしか出来ない。概して、彼は他人を觀察しようといふ考へが起るにはあまりに彼自身に夢中になりすぎてゐる。われわれの中に小説家が形態を具へ出すのは、われわれがわれわれ自身の心情からわれわれを引き離し得るやうになつて

からである。」「自分自身の物語を語る作家」がかうも簡単に子供扱ひにされてゐるのは少々不満だとは云へ、これは今日の私達には、適切な忠告を與へてくれた言葉である。——以上の一節は、去年あたり書かれたらしい「作家と作中人物」といふエッセイの方から引用したが、その同じエッセイのずつと先きの方で、モリアックは又、かうも言つてゐる。

「最も客觀的な小説の背後にも、……小説家自身の活きた悲劇は隠されてゐる。……しかし、その私的な悲劇がすこしも外側に漏れて居なければ居ないほど、天才の成功はあるのだ。「ボヴァライ夫人は、私自身だ」といふフロオベルの有名な言葉は、頗る理解し易い。——が、その言葉はもつと時間をかけて考へて見る必要がある。それほど此の本を書いた作家がその中に自分を入れさせてゐないやうに見えるからだ。「ボヴァライ夫人」が傑作であるのは、即ちその作品が、その作家から切り離された全體として、世界として、一塊となり、位置してゐるからである。われわれの作品が不完全であればあるほど、その割れ目からその不幸な作家の苦しめる魂が漏れるのである。」

「が、ある天才をもつてしても作家と作品とのさういふ結合を得なかつた、出来損ひの作品はまだしも良い。魂のない作家によつて手ぎはよく、外側から構成された作品なんぞよりは。……」

モリアックを俟つまでもなく、作家にとつて自分を棄てることがいかに大切であるかと云ふ事は、今日、私たちの最も關心をもつべき問題となりつつある。——さういふ今日、私はいままで好い氣にな

二五七

つて自分自身の物語、或ひはそれに似たものをばかり書いてきた私自身がすこし腹立しいくらゐである。さうして最初から、さほど苦勞せず、他人を觀察して得たものだけで物語を書くことに慣れてゐる人達がたいへん羨しい氣もする。——が、羨しい氣はしても、どうも矢張り、その人達の仕事には、今だに、そしてこれからも興味もてさうもない。私の興味は、何と言つても、その作家が自分を棄てるのにどれだけ獨得の苦痛をかけたか、といふ點に専らかかつてゐるやうである。

**

私のこれまで書いて來たものは所謂「私小説」と呼ばるべきものであるかも知れないが、私はつひそ一度も、私小説本來の特性であるところの、他人の前に何もかも告白したいといふ痛切な欲求からそれを書いたことはなかつた。私はむしろ漠然と、わが國特有とも云ふべき、その種の小説の小ぢんまりした形式が自分には居心地よいやうな氣がしたので、それに似た形式の中で自分勝手な作り事を書いてゐたのだ。私の作品は——といつて悪ければ、それらの作品を書いた感興の多くは、——フィクションを組み立てることにあつた。私は一度も私の經驗したとほりに小説を書いたことはない。(さうかと云つてまた、自分の感じもしなかつたことは一べんも書いたことはないが……)

私をしていま、かうまで言はしめるものは、居心地がいいのでつかうかと私の居ついてゐたその形式の、恐ろしい罫の中にいつの間にか自分が落ち込んでゐるのに漸く氣がついたからだ。——此處で、更らに私的な問題に立ち入ることを許していただきたい。で、私小説をどう云ふ信念から書くにせよ、すべての場合を通して、その主要な感興は自分自身をはつきり識らうとすることにあると言へる。(たとへ私のやうな場合にあつても)——最初は自分自身のうちに私小説に書けさうなものばかりが見えてくる。が、そのうちにだんだんそれが私小説からはみ出してしまふ。そして今さら自分の氣持のあまりに複雑なのに驚く。そして、私小説の中に入れるためには、どうしてもその氣持を歪曲させなければならぬやうな羽目になる。たとへば、一つの戀愛を描くときにも、自分の感情全部から、その一部を孤立させ、誇張し、——同時にそれを純粹にさせて、描くよりほかはない。その結果、小説中の「私」の氣持は、現實の私の氣持とは似てもつかないものとならざるを得ない。勿論それは嘘ではないのだが、それがそつくり本當の氣持かといふと、必ずしもさうではない。私自身の場合などでは、私はなまじつか私小説らしいものを書いたため、他人に私を識つて貰つた分量より、むしろ誤解された分量の方が多いのではないかといふ氣がするくらゐだ。——それでは、さういふ複雑な氣持をそつくりそのまま書いたらいいではないかと云ふ考へが一應は起る。が、さうなると、いきほひ支離滅裂なものになつて、殊にこれまで私達の書いてきたやうな、活きた混沌から一つの小さな秩序を得ることをその本分とする短篇小説などの中には、到底盛んすることは出来ない。——むしろ、矛盾したそれぞれをはつきり分離させて、それ

ぞれ異つた性格に負はせ、そしてそれぞれを思ふ存分に活動させることをその本分とする長篇小説が書けるやうになるまで、何とか誤魔化してゐてやれと云つた氣持で、知らん顔をしてゐたのが、先づ私の正直なところである。

此處に、私がこれまで私小説のやうなものを書くよりしかたがなかつたと云ふ唯一の辯解があり、しかし今までのままでは、もうにつきもさつちも行けなくなつてゐることを、ついでに告白して置きたいのである。

もう一つは、作家の手腕である。

私は一つの作品を書く毎に、これまで自分の書いた作品にすこしも似てゐないやうな作品を書きたいと考へた。そこで、私の諸作品を跡づけてきた曲線は極めてジグザグな筈だ。……が、それにも拘らず、私は作品から作品へと、いつも同じやうな人物しか描けなかつたことを認めずにはゐられない。そこに描いてゐるのは、即ち、それらの人物の中に投げられてゐる私自身の影でしかなかつたのだ。さうして批評家から「お前は人間が描けない」と言はれると、私は好んでそれを肯定しながら、しかし私の作品はそれでもいいのだといふやうな妙な自信を持ち續けてゐた。——勿論、眞の小説といふものが人間を

創造することにあるといふ事は否應なしに認めてゐたが、私はさういふ眞の小説をあまり嚴格に考へ過ぎてゐるせゐか、たうていこれまでの私にはそんなものは、それに近いものすら書けさうもないと考へたので、あべこべに、少しもさういふ小説らしいところのない小説ばかり書いてゐたのだ。たとへ二流三流の小説にせよ、さういふものの方が現在の自分の手腕を思ふがままに揮へ、自分を小さいなりに完全に表現できると考へたがためだ。

そこで私は、これまで、自分の作品の中に人物を置く場合には、風景畫のなかに小さな點景人物を置くほどの用意しか持ち合はせなかつた——とまで言はなくとも、それはいつも「私」(語り手)の心のなかに獨得な屈折をして入つてきた幻像に過ぎなかつたのである。

「麥藁帽子」の中で試みた私の方法は、さういふ自分には最も素直なものであつた。私は一人の娘を語り手に映つてゐる側からのみ描いていつた。娘の心理の動きがどうしても語り手に解らないままに、小説が進展し、その結末に及んでもその心理の上に何等の照明を與へずに、小説を閉ぢる。讀後、讀者をもその語り手と共に、一種の謎めいた氣持の中にとり残させる。——それは一篇の小さな心理小説でありながら、普通の心理小説家がそれをするやうには、娘の心理の裏側に讀者を引つ張つて行かない。常に光線は「私」の側からのみ投せられてゐる。——さういふ氣まぐれな思ひつきで、私はその娘の幻像を出来るだけ生き生きさせようとしたのだ。

「聖家族」の中では、それと反対に、私は諸人物に頭上から何處からともなく、云はば一種のレムブラント光線のやうなものを投げようと試みた。さうしてその光と影の中でさまざま人物を出来るだけ巧妙に動かさうとした。が、それらの人物は私には将棋の駒のやうなものだつた。あらかじめ駒の動き方が定つてゐて、その上私の手のままにどうにでも動いてくれたのだ。「むづかしい詰め将棋を何とかかんとかして詰ましちやつたやうな小説だなあ」と小林秀雄がそれを讀んで私に言つてくれたが、恐らく小林の考へたよりもつと、その比喩はあの小説をうまく説明してゐたのだ。

そんな「聖家族」のやうな作品を書いたあとだつたので、私は「麥藁帽子」のやうな手法の素樸さに身をゆだねられたのだらう。

**

私達の間でいつかライジゲの「舞踏會」の話が出たとき、あの女主人公の顔がはつきりと浮んで來るかどうかといふ事が問題になつた。さうして皆の意見は期せずして、それが浮んで來ないといふ點で一致した。たしか横光さんも座に居られて、どうかするとあの女の妙にしやがれたやうな聲だけは浮んでくるが顔は決して浮ばぬ、言はれたやうに記憶する。

その後、私は古い「エヌ・エル・エフ」を繙いてゐるうち、フェルナンデスの何とかいふエッセイの

中で、次のやうな一節を讀んで、突然、その時の話を思ひ出した。今、その雑誌が私の手許にないので、その題も忘れたし、その一節を引用する譯にも行かないが、何でも「各人が漠然と、いくらか大ざつぱに感じてゐるものに一番共通性がある。ドストエフスキイは流石にそこに目をつけてゐた。彼は、各人各様とも言ふべき視覚的描寫などはかなぐり棄てて、各人に直接に共通し得る漠然たる感覺をのみ、ひたすら明瞭な意識の上ののぼすやうにと骨折つたのである」といふ論旨だつたやうに思ふ。私達のその時の意見は、はからずもフェルナンデスの同意を得たばかりでなく、漠然としてゐたところを極めてはつきりと説明して貰つたやうな感がある。

ドストエフスキイといへば、私はどういふものか「白痴」が好きであるが、ムウシユキンが一體どういふ顔をしてゐるのか、すこしも分らないのだ。そのため私はその人物をまだはつきり捉んでゐないのかとさへ疑つたが、それも「舞踏會」の場合と同じだつたのだらう。小説が心理的であればあるほど、その小説は少くとも視覚的ではなくなるものらしい。

しかし、小説において讀者に漠然たるものを與へる方がより効果的であるのは、何も視覚的なものばかりではあるまい。たとへば、此處にモオリアックの面白い例がある。彼は子供のとき目撃した實際の出來事に材を採つて、自分の良人を毒殺する女を描いたことがある。「テレエズ・デケルウ」その場合、實際はその女は他に情人があつたがためにそんな行爲に出たのであるが、それを事實のまま描かず

に、その女がさういふ恐ろしい行爲に自らを騙つたものを彼女自身は何も知らずにゐたやうに、モオリアックは作り變へて、一層の効果を得たと言つてゐる。

ドストエフスキイがどれだけバルザックよりも新しいかといふやうな事も、かういふ點から説明できやしないかと思はれてくる。

さうしてモオリアックが他の本、「小説論」といふ表題のエッセイの中で、この二大作家の隔りをはつきりと示してゐる箇處に私達はぶつかるといふ。

「……バルザックの主人公はいつも辻褃が合ふ。彼は彼を支配してゐる情熱でもつて説明されないやうな行爲は何一つしない。それは實に見事である。」——つまり、ゴリオ爺即ち父性愛、従姉ベツト即ち嫉妬、ユウジエニイ・グランデ即ち吝嗇、といった工合で、彼等はいつてもその埒内にあつて行爲をする。

「それがバルザックに「型」即ち、一箇きりの情熱に全く要約された存在を創造することを許したのだ。」

「ところが、それに反して、ドストエフスキイは人間心理の纏れを解きほごさうとはしなかつた。——彼の人物にあつては、崇高と破倫と、低い衝動と高い願望とが、解きほごしがたく、もつれ合つてゐる。それはもはや理性の動物——「吝嗇漢」「野心家」「高利貸」ではなしに、遺傳を負はされ、缺點のある、

血肉の人間だ。……

彼の描いたのは露西亞人だ。不合理、矛盾は露西亞人の特質ぢやないか、と人々は言ふ。——が、彼の主人公が、われわれにかくも矛盾だらけに見えるのは、彼等が露西亞人だからではなしに、むしろわれわれに似た人間、即ち、活きた混沌、矛盾に充ちた個人だからである。彼等にはわれわれの理性から見ると、不合理そのものであるやうな生の論理以外の如何なる秩序も、如何なる論理も與へられてゐないからである。彼の作中人物が、各瞬間に、彼等が感ずるのが自然であり普通であると思へるのは、まるつきり反對の感情を感じてゐるのを見て、われわれはびつくりする。……」

モオリアックの意見は、まあ大體さういふ事になると思ふ。が、モオリアックは、自分は一方（これは批評ではないと斷つてゐるが）佛蘭西小説の傳統——その秩序と明晰さ——を熱愛してゐる者であると告白する。そしてさういふ二つの欲求の争闘を感じながら、彼はかういふ問題を提出してゐる。「佛蘭西小説の傳統を否定せずに、それを英吉利や露西亞の作家——ことにドストエフスキイを受け入れることによつて豊富にすること。われわれの主人公に、生きた人間の不合理、不確かさ、複雑さを與へること、と同時にわれわれ民族の天性に従つて、構成し、秩序づけること。」

そしてその二つの欲求の間の葛藤こそ、彼等佛蘭西作家の解決すべき唯一のものではないかと問題を提出してゐる。

佛蘭西では、早くからジイドが熱心にドストエフスキイを讀んでゐたやうだ。それがより若いモオリアック等を刺戟して、かくもドストエフスキイに關心せしめるやうになつたのではないかと思ふ。丁度、今日のわが文壇はその當時に似てゐないか、さうして私達の間では、小林秀雄が早くから熱心にドストエフスキイを讀んでゐてくれるのは大いに感謝していいことだと思ふ。私などは何もそれに口を挿むことはないが、モオリアックの出した問題は私達にもたいへん有益に思へるから、それを此處に置き換へておく。

**

さて、モオリアックに戻らう。

さうして彼によつて提出された問題を、その後、佛蘭西で最も見事に解決したのは誰だらうかと考へて見る。さうして先づ第一に、それはモオリアック自身ではなかつたらうかと云ふ答案が浮ぶ。が、私はさつきも言つたやうに、まだ彼の小説は「癩者への接吻」一篇きりしか讀んでゐないのだ。もう少し讀んで見るまで、——少くとも彼の最大傑作であると定評のある、一昨年書いた「蝮のとぐろ」とい

ふ小説を讀んでしまふまで、——その答案は保留して置きたい。

私がこの小論文の冒頭に引用した「作家と作中人物」は、その傑作「蝮のとぐろ」製作後に書かれたものらしい。これには、もう一方の「小説論」(恐らくこれは前者から十年ぐらゐ前に書かれたものか)と同じ論旨が、作者の體驗によつて、すつと深められつつ、展開されてゐる。さういふ見方をして、兩者を讀み比べてみると、私はモオリアックの思ひがけない進歩の跡を發見したりする。

その中で彼が人物描寫について述べてゐる一節が特に面白く思はれるから、それを此處に引用してお目にかける。

「一つの小説を創作してゐる間、私は何度氣づいたことか、すつと前から主人公として考へてゐた人物、そいつの發展をその最後のデテエルまで決めて置いた人物が、プログラム通りにうまく形づくられるときは、それは彼が死んでゐるからであり、——彼が從順であるのは、それが死骸に過ぎないからであるといふ事に。反對に、私が補役として何等の重要性を帯びさせなかつた人物が、自分勝手に第一列にのり出し、私が彼のために用意しなかつた場所を占領し、思ひがけない方向に私を引つ張つてゆくことがある。「愛の沙漠」の中のクウレエジュ醫師は、私の意圖では、挿話的な人物(主人公の父親)であるべきだつた。そのうちに彼は小説全體に侵入してしまつた。私はその本を考へる度毎に、その可哀想な男の苦しんでゐる顔が他のすべての人物を領し、それらの忘れられた頁の上にはとんど一つ、それだけ

が浮んでくる。……」

この一節は、私にすぐ、ドストエフスキイが「悪霊」を書いた時、考へもしなかつた新しい人物（スタヴロギン）が、初めに主人公となるべき筈であつた人物を驅逐して、その小説の眞の主人公となつてしまつたといふ話を思ひ出させた。

しかしモリアツク自身は、この一節を書いた時には、そのドストエフスキイの話を思ひ出してゐたかどうかは知らない。

今、この小論文を終へるにあつて、私はもう一度、モリアツクのテエゼを繰り返して置きたい。即ち、一方では論理的な、理智的な小説を書きたいといふ欲求、また一方では、不合理、不確かさ、複雑さをもつた生きた人物を描かうといふ欲求、——われわれはその二つの欲求の戦場であるがよい。……これは何も佛蘭西のみに限つた問題でなく、私達の間でも大いに考へていいことだと信ずるので、此處にその問題にアンダラインして置くのだ。

私はこれまで私達、私達と書いてきたが、私達といふのは、「白痴」とほとんど同等に、ラジイゲの「舞踏會」をも熱愛してゐる人達の謂であることを、最後に於いて明瞭にさせて置きたい。昭和九年六月

ヴェランダにて

一九三五年晩秋。或高原のサナトリウムのヴェランダ。二人の患者の對話。

A 君はよくさうやつて本ばかり読んでゐられるなあ。

B うん。どうも書くことを禁せられてゐると、本でも読んでゐるより他に時間のつぶしやうがないからね。しかし、かうやつて本でも読みながら、それとなく次の仕事のことでも考へてゐるうちが、僕等には一番愉快なのだよ。

A その本は何だい？

B これか。これはジャック・リヴィエルの「フロオランス」といふ小説だ。これを書きかけで、この可哀さうな男は死んでしまつたのだ。

A リヴィエールつて「エテユウド」を書いた奴かい？

B うん、あいつだ。あの「エテユウド」を翻譯した連中に云はせると、リヴィエールなんていふのはまるで希臘神話の中の龜みたいな奴で、生れつき飛べないくせに自分でも飛ばうとして、驚かなんぞに引張り上げて貰つたが、途中で墜落してしまやあがつたと云ふのだが、——ほら、そんな繪があの本の

表紙についてゐたらう？——随分怪しからんことを云ふと思つて、すこしリヴィエールが可哀さうになつてゐたが、どうもこの「フロオランス」なんか読んでゐると、それも半ば肯定したくなつてくるね。

……僕はずつと前から、この「フロオランス」といふ小説の草案のやうなものだけは知つてゐた。随分面白いものになりさうで、大いに期待してゐた。それがやつと今年の春に——リヴィエールが死んでからもう十年になるが、——單行本になつたので、早速取り寄せて貰つたのだが、読んでみたら草案などで想像してゐたのはまるつきり違ふ。期待が大きかつただけ、それだけ失望も大きいのだ。

A そんなにつまらないのかい？

B うん。つまらないと云へばつまらないけれど、さう簡單にも片づけられないね。ただ、どうも僕の想像してゐたのとまるつきり違ふんでね。どう違ふかといふと、その草案などで見ると、リヴィエールは非常に小説らしい小説——例へばメレディスみたいな客觀的小説を書きたがつてゐるのだね、少くとも讀者を「リヴィエールではない何物かの眞中に投ずる」やうな小説を意圖してゐる、——が、出來上つたものは、いや出來上りかかつてゐたものは、まるで論文みたいな小説なんだ。どこまでもリヴィエールがつき纏つてゐる。「エテュウド」の臭ひがする。これはエテュウド・ブシコロジツクか。……しかし、途中でつまらなくなつて何度もはふり出さうと思ふんだが、それでもやつぱり最後までかうやつて読んでゐる。何が僕にこの本を棄てさせないのかしらと、讀むのに倦いては考へて見るんだが、そんな

時にひよつくり死を前にしながらこの小説を書いてゐるリヴィエールの悲痛な姿が浮んでくることがある。……僕は前に彼の妹の書いた回想記を讀んだことがあるんだ。それに據ると、リヴィエールは死ぬ一年ばかり前にこの仕事にとりかかつてからと云ふもの、それまで長いことすつかり失つてゐた少年時代の無邪氣な様子、——殊に遊戯なんぞに夢中になつてたときのやうな様子を取りもどし出し、さうしては口癖のやうに「僕にだつて小説が書けることを皆に分らせてやるんだ」と云つたり、「ああ早くこの本の出來上るのを見たいがなあ」と子供のやうに氣短かになつたり、又、ラジイグの死んだ時は「僕もこんな風に死んでゆくんだよ」などと妹に云つたりしたさうだ。そんなに大事だつた小説を書きかけで死んで行かなければならなかつた男、しかもその書きかけの小説すら恐らく彼自身の期待からもひどく外れてしまつてゐたであらうこと、最後になつて遂に自分の才能を自覺しなければならなかつたこと、そんなことを考へたら誰でもこの小説を最後の頁（痛ましくも中絶されてゐる……）まで讀んでやりたくなるだらうぢやないか。すこし感傷的になつたが、もう止さう。さうして別の方から出なほさう。どうも僕はこんなことを喋舌つてゐるうちに、「フロオランス」にあるのはそんなものだけぢやないことに氣がつき出してきたんだ。——やつぱり、この小説なんぞでも、作者は本の中にちやんとした主題を置いてゐるね。眞劍になつて何か云ひたがつてゐることのあるのが、讀者にも知らず識らず通じてくるのだ。だから、それをすつかり聞いてしまはないうちは、やつぱり途中で止められないのだね。

A 西洋の作家はそこが日本の作家と違ふな。僕などはあまり讀まないが、ときどき日本の小説を讀む度毎に考へさせられるんだが、一體何か云ひたいものを持つてゐてそれで書いてゐる作家が幾人ゐるの
だい？

B ……………

A で、その「フロオランス」といふのは、何を書かうとしてゐるの？

B *Le vent se lève, il faut tenter de vivre.* (風が立つた、生きんと試みなければならぬ。)——ヴァレ
リーの詩句だが、これがこの小説の題辭トピックになつてゐる。一番簡単に云ふと、さういふ生きんとする試み
——その苦しい試みをビエエルがいかに超えていつたかが、その主題だ。もうすこし精しく云ふと、ビ
エエルとフロオランスとの出會、彼等の戀愛、昔の戀人に奪回されるフロオランス、彼の嫉妬、——さ
ういつた人生との痛ましい苦闘ののち、遂にビエエルは自己の快樂を犠牲にして再び元の自己へ、神の
許へ歸つてゆく。(その結末のあたりは未完に終つてゐるが、序文でリヴィエエルの細君がさう解説して
ゐるのだ。)——まあ、さういつたやうな境遇の心理的研究のやうなものになつてしまつてゐる。リヴィ
エエルのねらつてゐたやうな小説的興味などはちつとも起らない。フロオランスといふ女だつて、ちつ
とも描けちやゐない。……この間讀んだモオリアツクの「テレエズ・デケルウ」なんぞに比べたら、ま
るでなつちやゐないのだ。……ただ、あの生眞面目で、氣どりやのリヴィエエルが人生に對して持つて

ゐた愛、生の悦びを味へるものなら何でもかんでも手に入れようとしてゐた意慾、さういつたものだけ
が悲しいまでに僕を打つてくるのだ。さうしてそれだけだ。が、本當にそれは悲しいまでなのだ。……

A そのモオリアツクの小説つて、どんなの？ その何とかいふ……

B 「テレエズ・デケルウ」か。これはもう素晴らしい小説だ。數年前、僕がはじめて小説を書き出さう
としてゐた頃にコクトオやラジイゲの小説を讀んで非常に刺戟されたものだつたが、まるであの時分
みに僕はこの小説を讀んで昂奮してゐる位なのだ。この一二年といふもの、僕もなんか小説の上で
行きづまりかけてゐてひどく心細かつたが、モオリアツクを知つてからといふもの、急に行手が明るく
なつたやうな氣がしてゐるのだ。——が、かういつたモオリアツクのやうな行き方は、仕事としては一
番難かしさうだが……

A 一體どんな行き方をしてゐるのだい？

B どんな行き方つて、さう、ごく大ざつばに云ふと、ドストエフスキイやブルウストみたいな掘り下
げ方をしてゐる。恐らく彼等から随分影響を受けてゐるのだらう。そしてかなり深くまで行つてゐ
る。が、ああいふ龐大なものぢやない。みんな二三百頁位の作品で、ごく濃い、クラシカルな額縁の中
にちやんと嵌まつてゐる。そんなところは、その古典的な形式を僕の愛してやまないジイドの「窄き門」
を思ひ出させる。そんな一方では、モオリアツクは口を極めてラジイゲの「舞踏會」を賞めてゐるし、コ

クトオの小説も愛してゐるらしい。クトオの小説の中にある「夢のやうなものと悲痛なものとの混合」は珍重すべきだなどと云つてゐる。……ともかくも、今名前を挙げたやうな作家たちをまるで打つて一丸としたやうな作家なのだ。以上の作家たちは、いづれも僕のこれまで特に勉強してきた作家たちだ。

——さういつた要素が何もかもあるやうなこのモオリアックを、僕が好きにならざるを得ないぢやないか。ただ、すこし困ることがあるんだ。それはモオリアックがカトリック作家であることだ。それのために僕はいまままでつい彼を敬遠してゐたのだが、それがまたいつか僕を彼から引き離すやうなことになるかも知れんね。どうも僕は一生カトリックにだけはなれさうもないからなあ。だが、僕のこれまで讀んだ彼の作品——ことに「テレエズ・デケルウ」なんかちや、そんな宗教臭いところは何處にもないね。モオリアックがカトリックであることを知らなかつたら、全然そんな要素には氣がつかずにしまふのぢやないか知らん？

A でも、作家がカトリックである以上は、全然そんな要素のないわけではあるまい。

B うん、それが一番モオリアックを苦しめてゐる問題でもあるのだらうね。こんなことを云つてゐる。「私は作家だ、私はカトリックだ、そこに争闘があるのだ。」「カトリックであることは作家にとつては幸福だが、作家であることはカトリックにとつては甚だ危険なことだ」と。——ところで、そのカトリシズムなるものが、僕等にはなかなか解らないのだよ。ポオドレエルにしる、ランボオにしる、又、コク

トオのやうなものまでが、最後にはカトリックになるね。あの氣持だな、あれがちよつと解るやうな解らないやうな氣がするのだ。恐らく誰に訊いてもはつきりとは答へられまい。ちやうど東洋の詩人が最後にはすべて虚無のやうなものに還つてゆく、ああいつた氣持にそれが何處か似てゐるやうでゐて、まるで正反對なのではないかと思ふ。たとへば、モオリアックだな、その「テレエズ・デケルウ」と云ふのは、夫を毒殺しようとして未遂に終る女のことを書いてゐるのだ。さういふ恐ろしい女主人公を、モオリアックは少しも憎まうとしてゐない。それどころか非常に優しい愛情でもつて包んでやつてゐる、自分の惨めなことを知つてゐるこの女が好きで好きでたまらないやうなところが僕等にも感ぜられる、そしてさういつたものがこの小説の調子をリリカルなものにさへしてゐる位だ。が、それに引きかへ、彼女の周囲の者は、ことにその俗人ではあるが善良な夫などは徹底的に冷酷に取り扱はれてゐる。むしろ戲畫化さへされてゐる。——恐らくモオリアックの愛してゐるのは、テレエズの痛々しいまでな不安なのであらうし、はげしく憎んでゐるのは、夫やその他の人々の世俗的な自己満足なのであらうと思はれる。——そしてそれだけが僅かにカトリック的と云へば云へないこともないだらう。

A それがどうしてカトリック的だと云ふのだい？

B 僕にも相變らず解つたやうな解らないやうな始末なのだが、まあ、さういつたものがカトリック的なのだと置いて置いて貰はうぢやないか。この問題は、もうすこしお預けだ。そのうちだんだん解るかも

知れん。——ともかくも、さういふ問題は抜きにしても、この小説は素晴らしいものだ。この可哀さうな毒殺女の氣持のよく描けてゐることと云つたら！ 恐らく讀者には、テレエズ自身よりも、彼女の夫を毒殺するに至るまでの心理が、はつきりと辿れるのだ。何故ならテレエズには、彼女自身のしてゐることを殆ど意識してゐないやうな瞬間があるのだが、さういふ瞬間でさへ、讀者は、彼女がうつろな氣持で見つある風景や、彼女の無意識的な動作などによつて、彼女がその心の闇のなかでどんなことを考へ、感じてゐるかを知り、感ずることが出来るのだ。——こんな工合に讀者を作中人物の氣持のなかへ完全に立ち入らせてしまふなんて云ふのは、君、大した腕だよ。それがこれほどまでに成功してゐる例は滅多にあるものぢやない。

A ラジイゲの「舞踏會」はさう云つたところがあるんぢやない？ 僕などはあの女主人公の心理にぐんぐん引つぱられて行つたものだがなあ。

B さうだ、あれも大したものだった。誰かが云つてゐたが、「この女は自分ではかうなのだと信じてゐる……が、實際はかうなんだ……」なんて云つた調子で、知らず識らずに自分の感情を間違へてしまつてゐる、それほど豊富で複雑な感情をもつた人々が實に微妙に描き分けられてゐたが、いま考へると、あの小説の唯一の缺點は、あまりにラジイゲが自分の作中人物を支配しすぎてゐたことだ。モオリアックを讀んだあとなどではそれが特に目立つ。モオリアックはむしろ反對に自分がその作中人物に支

配されることを好む。いつのまにか作中人物が彼等の裡にある運命曲線を一人ですんすん辿り出す。作家はただそれについて行くだけになる。作中人物が生々としてくれればくるほど、ますます彼等は作家の云ふことをきかなくなるものだ。しまひには作家をまるで思ひがけないやうなところまで引つぱつて行つてしまふ。それは作家にとつては大成功だ。——だが、モオリアックなどには、カトリックとしての立場から、それがまた随分苦しい争闘になつてくるのだらうね。

A ぢや、さつき君の非難してゐた「フロオランス」などはどうなのだい？

B さう、あれはまるでちつとしてゐる肖像畫みたいなのだよ。——才能の相違かな、作家としてのね。それが一番大きな問題だらう。——だが、それからもつと具體的な相違を抜き出して考へて見ると、例へばそれは兩者のモデルの扱ひ方にあるのだと思ふ。先づ、リヴィエルの「フロオランス」だが、これには實在のモデルがあるのださうだ。一つにはそのモデルへの顧慮からも、發表をひかへてゐたのだが、そのモデルになつた女性が亡くなつたので、漸くこの遺稿が上梓されるやうになつたといふ話も聞いてゐる。それほど、リヴィエルは、そのモデルを出来るだけそっくりそのまま生かさうとしたらしいのだね。生れつきさういふ性分であるらしい。批評の場合は、その對象に何處までも忠實について行かうとする、さういふ誠實さが誰にもましてリヴィエルの批評の強味であり、屢々それが見事な成功を收めてゐるが、小説の方はなかなかさうは行かないのだ。小説にあつては、リヴィエルに最も缺け

てゐるもの——想像といふものが大きな力だからだ。その力なくして、モデルをそっくりそのまま生かさうとすればするほど、モデルは靜物化する——モリアックは、小説の技術といふものは、さういふ現實の「再^{ルプロデュクション}現^{トランスポジション}」ではなくして、現實の「置き換え」であるとしてゐる。つまり現實は單なる出發點たるに止め、作家はその漠然たる可能性を實現さすべきであり、その結果人生がとつたのとは反對の方向をとるのも好いとしてゐる。「テレエズ・デケルウ」もその一例で、少年の頃、重罪裁判所で見かけた一人の瘦せた毒殺女がそのモデルになつてゐる。賈の處方箋で毒藥を手に入れることだけ、現實から直接に借りたが、現實はそこで打ち切られ、それから先きは、實際の女とは全然別な、すつと複雑な性格に仕上げたのだ。實際は、その女の動機は甚だ簡單で、他に情人があつたからなのだが、小説の「テレエズ」では、彼女自身は、何が彼女をそんな犯罪にまで驅りやつたのか全然意識してゐなかつたやうに、悲劇が仕組まれてゐるのだ。

A 何故その女は自分の夫を殺さうとしたか、作者も一切説明してゐないのか？

B 何處にも説明らしいものは見あたらない。ただ前にも云つたやうに、その女をそんな行爲にまで驅りやつた漠然とした動機は、我々にはその女自身によりもいくらかはつきりと感ぜられる位のもものだ。ただ、その小説の結末になつて、夫が遂にテレエズを許して、巴里に連れてゆき、其處に彼女を一人だけ残して再び田舎へ歸つて行かうとする際、夫ははじめて優しく妻に「どうしてあんなことをしたの

だ？」と問ひかけると、テレエズは「いましがたそれがやつと分りました。それは貴方のうちに不安を見出したかつたからかも知れません」と答へてゐるのだ。それからまた彼女に「私は私の手がためらふときしか自分を殘忍な女だとは思ひませんでした。……私は恐ろしい義務に負けたのです。さうです、それはまるで義務のやうでした」とも云はせてゐる。これらのテレエズの言葉が、見方によつては、小説全體の上に強い光を投げつけ、彼女のそれまでの憑かれたやうな行爲の一つひとつを異様に照らし出すやうに思へないことはない。さうしてテレエズの夫のやうな、自分に満足し切つて、いくぢのない平和を貪つてゐる人間の裡に、はげしい不安を呼び醒ますにはおかないやうな恐ろしい義務、テレエズをしてあんな惨めな行爲に驅りやつたもの、——さういつたやうなものが同時にまた、この「テレエズ・デケルウ」を書いたモリアックのカトリックとしての唯一の口實なのではないか。そんな氣がする。少くともいまの僕にはそれだけしか解らん。

昭和十一年四月

狐の手套

小序

昔からよく隨筆の題にはその筆者の好む花の名などが用ひられてゐる。あれは何んとかく氣もちの好いものである。いま、ここにすこし隨筆めいたものを集めたついでに、ひとつその眞似をしてやらうと思つてちよつと考へて見たが、どうも西洋の本の話ばかりが多くて、優しい花の名などは一向似つかはしくない。が、ふと昔、何でもない小品を書いてそれに氣まぐれに「狐の手套」と題したことがあるが、それが夏の日ざかりに紫いろの花を咲かせるヤギタリスの花の異名でもあつた事を思ひ出し、よし、こんなファンタスティックな名なら、どうにか似あはぬこともあるまいと思つて、それを採つてそのまま用ひることにした。

堀口大學氏が「三人女」と云ふ題名で譯されてゐるポオル・モオランの短篇集の原名は *Tenderes Stocks* と云ふのである。三人の女のことを描き分けたものだから「三人女」と云ふ題もなかなか悪くないが、私はこの「タンドル・ストック」と云ふ題には何かもつと洒落れた意味があるのではないかと思つてゐた。

ところがこの夏、私が輕井澤に行つてゐた時のことである。とりかかつてゐた仕事もやつとすんだので、私はほつと一息つきながら、ホテルの應接間へ何か軽い讀物はないかしらと探しに行つた。そのとき私の眼についたのは前田曙山の「草花の栽培」といふ本であつた。私はそれを手にして、そのの脇掛椅子に腰を下ろしながら、讀んでみるとそれは思つたよりも面白かつた。

そのうちに「あらせいとう」といふ章があつた。この西洋の詩によく出てくる草花のことを俗に *Stock* と呼んでゐると云ふ。そしてこの一種に *Sweet Stock* (にはひあらせいとう) といふがあるさうである。……ここまで來ると、この *Sweet Stock* といふ名前が私の頭のなかで閃いた。これを佛蘭西語に直すと、ひよつとしたら *Tendre Stock* になりはしないかしら? するとポオル・モオランの短篇集の題

は「にほひあらせいとう」と譯されなくつちやならん。……

丁度そこへ佐藤朔と阿比留信が遊びに来たので、私は兩君にラフィンズ・サイダアを御馳走しながら、だしぬけにかう云つたものだ。「ボオル・モオランに『タンドル・ストック』と云ふのがあるね、あれ、君、どういふ意味だかわかる？」

流石の兩君も、だしぬけに私にかう訊かれると、いささか自信のなささうな顔をしながら私の方を見た。

私はすこし得意になりながら、私のいましたばかりの小さな発見を話した。「だからね、『タンドル・ストック』は『にほひあらせいとう』さ。……こいつばかりは堀口さんも知るまいなあ。……」

私は早速、このチャアミングな発見を神西清に手紙で書いてやつた。

すると二三日後、彼から端書が来た。

「いかにも君が輕井澤で思ひつきさうな譯語で面白かつた。しかし Sweet と Tendre とはすこし異ふやうだな。矢張り Stock は普通の意味でのストックだらう。因みに英譯は (Green Shoots (嫩芽)) となつてゐる。」

なるほど、さう言はれて見るとそれに違ひないので、私は私の「にほひあらせいとう」説を棄てることにしたが、まだいくらかこの説に未練がないこともない。

「タンドル・ストック」はボオル・モオランの最初の短篇集である。堀口氏の譯本には多分ついてゐなかつたと思ふが、原書にはマルセル・ブルウストが序文を書いてゐるのである。その序文がちよつと面白い。その序文でブルウストはモオランの特異なスタイルを辯護するために、アナトオル・フランスの舊スタイル論を難じてゐる。つまり、スタイルからあらゆる特異性を棄てると云ふアナトオル・フランスの説を駁して、ブルウストは、感受性が特異である以上、スタイルの統一を期することは難しいと言ふのである。その序文の一節を引用して見ると、

「十八世紀末から誰ももう書くことを知らん、とアナトオル・フランス氏は仰言るが、その反対もまた眞實ではなからうか？ すべての藝術において、藝術家の才能なるものは表現すべき對象へどれだけ接近し得るかにあると言つてよい。その間に隔りがあればあるほど、仕事は未完成なのだ。……他の世紀においては、作家とその對象との間にはいつも或る距離があつた。ところが、例へばフロオベルになると、彼はみづから川蒸氣の顫動にならうとする。そして遂に作家が姿を消し、我々の前にはただ走つてゐる川蒸氣があるばかりになる。……かかるエネルギーの變化こそ、作家がそのスタイルに對して最も意を注ぐべきものではなからうか？」

ブルウストがモオランの最初の短篇集にかういふ序文を書いてやつてゐるやうに、嘗つてブルウストの最初の短篇集 (Les Plaisirs et Les Jours) に序文を書いてやつたのがアナトオル・フランスであることを知れば、この序文はますます面白い。そこに時代の推移がうかがはれないこともない。レオン・ビエル・カン等の著書によると、ブルウストは若い頃しばしばアナトオル・フランスのところへ訪ねて行つたらしい。さうしてアナトオル・フランスは若いブルウストのために書いてやつた序文の中に、

「ブルウスト氏は優雅な悲哀、自然の苦痛に少しも劣らぬ人工の苦痛を物語るのに秀でてゐる。この人間の天才によつて發明された苦痛、發見された悲哀は私には限りなく興味ぶかく、貴重なものにさへ思はれる。……突然、獨逸の醫者の光線が肉體をよぎるやうに、電光が一過する。詩人はたちまち、祕かな思ひ、人しれぬ欲望を見ぬいてしまふ。……」

などと書いてゐる。数年後のブルウストの仕事を思へば、アナトオル・フランスはかなりこの若い詩人の本質を見ぬいてゐたやうでもある。が、まあ半分はお世辭だつたのであらう。何故なら、数年後ブルウストが「失はれた時を求めて」を徐々に發表し出したとき、アナトオル・フランスのそれに對する態度はきはめて冷淡なものだつたらしいからである。それを讀んでゐるのかどうかも疑はしい。たとへ

手にとつたにしても、恐らく數頁ではふり出してしまつてゐたのかも知れない。

何時にかざらす老いたる時代はより若い時代を理解しようともせず、又、できないものだからである。私はいま、「アナトオル・フランスとの對話」の著者が晩年のアナトオル・フランスをツウルに訪れた時の話を思ひ出さずにはゐられない。

一九一九年のある夏の日の午後であつた。ニコラス・セギユルはツウルに住んでゐるアナトオル・フランスを訪れた。何かの本の序を乞ひに行つたのである。すつかり壁が繪で埋まつてゐる、小さなサロンに、老詩人は一人の客と元氣よく話してゐた。しかし、彼の健康はもう衰へかかつてゐるやうに見える。彼はすぐその序文を引受けてくれた。そして明日、それを渡すから、ツウルの或る小さな羅紗屋に來いと云ふことだつた。

翌日、二時頃、セギユルはその店へ行つた。アナトオル・フランスはその二階の小さなオフィスのやうなところで、その主人と話しながら、彼を待つてゐた。そこで二人はしばらく文學の話をした、それから下へ降りて行つて、店の前に待たしてあつた有名な赤い自動車に乗つた。その赤い自動車をツウルで知らないものはなかつた。それから二人は骨董店だの、家具店だのをひやかして歩いた。そして最

後にちよつと本屋へ立寄つた。

その本屋で一番目についたのはN・R・F社の数多い出版物だつた。それを見ながら、アナトオル・フランスはアンドレ・ジイド(この間その「狭き門」を読んだと言つてゐた)やボオル・クロオデル等の名前を口にした。

「C公爵夫人に——今でも詩を書いてゐる人だが——ある日、サン・クルウで、私はこれらの詩人のことをどうお考へになるかと訊かれた。私はその問をすこし無作法だと思つた。しかし私は勿論、彼等に非常に好意を持つてゐると答へて置いた。自分の隣人に、それが誰だらうと、好意を持たないものがあるか? しかし、實際を言ふと、私は彼等のことをちよつとも知つてゐないのだ。それに私はもう彼等を知つてそれをどうしようと思ふ氣にもなれない。……流行は來たり、流行は去る、いつも同じやうにね。……私たちの時代には、マラルメが大流行だつた。しかしマラルメは、今日の詩人の或るものみたには難解でもなければ、生眞面目でもなかつたやうだ。とにかく、詩は青年のものだ。われわれ老人は少くともかう云ふことを悟るがいいのだ、即ち、新しい詩はわれわれには閉ざされた本であることを!」

昭和七年九月

二

僕はこの頃、芥川龍之介書翰集(全集第七卷)を読みかへした。そしてちよつと氣のついたことがあるから、それを喋舌つて見たい。

芥川さんはbrilliantな座談家だつたさうである。さういふどこか才氣煥發といつたやうな風貌は大正七、八年頃の書翰の中にかがはれないことはない。しかし、さういふ芥川さんは僕のすこしも知らない芥川さんだ。

又、芥川さんは風流人だつたさうである。なるほどひと頃の書翰を見ると、終日俳句に凝つたり、なんといふ雅號をつけようかと苦心したりしてゐる。さういふ「澄江堂主人」もまた僕はあまり知らないのである。

それでは、僕の知つてゐる芥川さんはどういふ人かといへば、そのやうな談論風發といつた人でもなければ、又、風流な澄江堂主人でもない。その頃からもう神經衰弱であつたせゐか、むしろ話の下手くそな、無風流な人であつた。しかし、さういふものを通じたおかげで、僕はかへつて芥川さんの本當のbrillianceに接觸してゐたのである。

晩年の諸書翰は、さういふ吃りがちな芥川さんをかなり明瞭に語つてゐる。その中には、書くのがいやでいやで仕様がなかつた調子の手紙が少くない。さうでなければ、大抵は自分の病苦を友人に訴へた手紙だ。ことに齋藤茂吉氏宛の數通の書翰にはもう心身共に疲れ切つてゐたらしい芥川さんの姿が髣髴される。そしていかにも齋藤氏一人を頼りにされてゐたらしいやうである。それらの書翰を通じて、齋藤氏の芥川さんに對する温かな心使ひをしみじみと感じるのは僕一人だけであらうか。

**

漱石、鷗外の兩氏を除けば、芥川さんのもつとも私淑してゐた先輩は、齋藤茂吉氏と志賀直哉氏の二人であるといつてよい。就中、齋藤茂吉氏については、その歌をいかに愛してゐるかを芥川さん自ら「僻見」(全集第五卷)の中で書いてゐる故、僕はここには書翰集の中から數行を引用して見よう。

昭和二年二月二日齋藤茂吉氏に與へた書翰の中に、「先夜來、一月や二月のおん歌をしみじみ拜見、變化の多きに敬服致し候。成程これでは唯今の歌つくりたちに *idea* の數が乏しいと仰せらるるはずと存候。(もちろんこれは小生をも憂ウツならしむるに足るものに候)……」と書いてある。

僕はこの頃作家には二つの型があるやうに思つてゐる。一方の作家は一つの作品から次の作品へと直線的に、或はスロオ・カアヅを描きながら、進んでゆく。もう一方の作家は、稻妻形に進むのである。

たとへば、歌人の場合もさうであつて、島木赤彦氏などは前者のよい例である。そして齋藤茂吉氏などが後者ではないかと思ふ。前者は深くはひることにのみ専心する。どうしても一本調子になる。*idea* の數が乏しいのだ。それに反して後者は作歌の變化をその生命としてゐる。*idea* を豊富にしようとする。一首ごとに別の *idea* を盛りとうとする。つまり仕事の上で慾張りなのだ。

**

短篇作家としての芥川さんもまた、齋藤茂吉氏のやうな稱妻型の作家であつた。この種の作家にあつては、仕事に活氣のあるときはどうもその稻妻のジグザグがはげしい。

晩年の芥川さんの仕事を見るがよい。ほとんど矢つぎ早に書かれた「玄鶴山房」「蜃氣樓」「河童」「三つの窓」「齒車」それから「西方の人」などを列擧すれば、いかにそれらの作品が變化に富んでゐるかが解るだらう。さういふ芥川さんや齋藤茂吉氏のやうな作家の諸作品を味ふには、先づ、今いつたやうな *idea* の數の多いことを楽しんでかかる方がいいと思ふ。勿論、それが唯一のものであつてはならない。が、そんなことは云ふだけ野暮であらう。

**

僕はもつと齋藤茂吉氏に宛てた芥川さんの書翰について書いて見たいのだが、それは又次の機会にしよう。そしてここにはこの書翰の一通（大正十五年十二月四日付）から少しく引用して置かう。

「……オビウム毎日服用致し居り更に便秘すれば下劑をも用ひ居り、なほ又そのためちが起れば座薬を用ひ居ります。中々樂ではありません。しかし毎日何か書いて居ります。小穴君（隆一氏のことなり）この頃神經衰弱が傳染して仕事が出来ない。僕曰く僕は仕事をしてゐる。小穴君曰そんな死にももの狂ひミタイなものとしよになるものか。但し僕のはろくなものは出来さうもありません。少くとも陰うつなものしか書けぬことは事實であります。おん歌毎度ありがたく存じます。僕の仕事は残らずとも、その歌だけ残ればとも思ふことあり。かかる事はお世辭にもいへぬ僕なりしを思へば自ら心弱れるのを憐まざる能はず。どうかこの参りさ加減を御笑ひ下さい。……」

昭和七年十月

附記 この一文を轉したのち、齋藤茂吉氏の芥川さんの死をともらふ歌を讀み、そのなかの「壁に来て草かげろふのすがり居り澄きとほりたる羽のかなしき」といふ一首に私は云ひやうもなく感動した。

三

又四五日前から寝込んでゐる。どうも春先きになるといけない。いつもきつと得體の知れない熱が出るのである。

僕は本箱から鷗外の「即興詩人」を引っぱり出して見た。病氣をするとこの本を手にとるのがいつの間にもやら習慣みたになつてゐる。もう何遍目だか知れない。それなのに又しても讀んで行くうちに、僕はこのロマネスクな物語の中に引きずり込まれてしまふ。このアンデルゼンの小説だとか、シェウピンの「埋木」のやうな味はひの小説を何とかして書きたいものだ、病氣をする度毎に思ふのである。アンデルゼンのものはこの外に中野重治の譯しかけた「わが一生のめえるへん」を讀んだことがある。これはアンデルゼンの自叙傳だ。「即興詩人」の譯のやうなわけには行かないが、中野の譯もまた獨得な美しさに富んでゐた。しかし彼がその譯を途中で放棄してしまつてゐるのは惜しい。その原稿は僕がいま預つてあるが、誰かアンデルゼンと中野重治とを愛するものがあつてこの譯を續けてくれるといいと

思ふ。

なんだか急に懐しくなつたので僕は手文庫の中からその中野の原稿を取り出して見た。中野の譯は丁度アンデルセンが「即興詩人」を書き上げたところで中絶してゐる。そのへんのところは、アムンチアタのモデルとなつた女性のことなんぞが語られたりしてゐて、なかなか面白い。此處にその一節を引用して見よう。

「私がまだ子供で、オオデンゼで芝居といふものに初めて行つたときのこと（そこでは前にも私が言つたやうにすべて獨逸語で演出されてゐたが）私は「ドナウの小婦」を見た。見物はその主役の女優を喝采した。彼女は女王のやうにもてなされた。彼女は崇拜された。そして、私は彼女はどんなに嬉しいことだらうとありありと心に描いた。それから幾年かの後、私が大學生になつてオオデンゼに歸省したときのこと、貧乏な寡婦たちの住んでゐる、そしてそこには寢臺が次から次へと並んでゐる、古い養老院の一室で、金色の額縁にはひつた一枚の婦人の肖像が、それらの寢臺の一つの上に懸つてゐるのを私は見た。それは薔薇の花を摘んでゐるレツシングのエミリア・ガロツチイにちがひなかつた。が、その畫は誰かの肖像であつた。そしてそれはそのまはりの見すばらしいすべてのものと變にそぐはないもので

あつた。私は訊いた。「あれは誰なんですか？」「はい」と一人のお婆さんが答へた。「あれはお氣の毒なドイツ人の奥さんのお顔です、昔は女優をしてゐられたんですけれど。」そのとき丁度そこへ、顔に皺のよつた、そして昔はそれでも黒い色だつたにちがひない見すばらしい絹布をまとつた、一人の小柄な美しい女が現はれた。それが、「ドナウの小婦」としてすべての人々から喝采されたところのある女優だつたのである。この事は私に消し難い印象を與へた。そして屢々私にはそれが思ひ出された。ナポリで私はマリブランを初めて聞いた。彼女の唄と演技は私がかつて聞き、かつて見たもののどれよりも優れてゐた。そしてそれにも拘らず、あのオオデンゼの養老院にゐた苦しい可哀さうな女優のことが、すぐ私には思ひ出された。この二つの姿がこの物語の中のアムンチアタのうちに溶けあつてゐるのである……」

ヴァレリイやジイドが若い時分にやつてゐた同人雑誌を一週間許り前に本郷の南陽堂で見つけて買つてきた。いま僕の枕許にある「サントオル」といふのがそれである。僕の手に入れたのは第二號だが、この號には「テスト氏との一夕」がP・V・といふ匿名で載つてゐる。その他にはビエル・ルイスがロンスアルの戀人の傳記を書いたり、ジイドが「エル・ハヂ」と云ふコント(?)を書いたりしてゐる。挿

繪も豊富にはひつてゐる。何となく英國でピアツレイイ等のやつてゐた「イエロウ・ブック」を思ひ出させるものがある。

もう一つ枕許にあるのは、「ルヴェ・ド・ラル」の古い號である。これにはJ・E・ブランシユの描いた現代作家の肖像が數枚載つてゐる。その中にレエモン・ラジイゲの肖像もある。髪の毛をくしやくしやにして細いステッキを握つて一ぱい散らかつたテーブルの上に無造作に腰かけてゐるところは、どう見ても放蕩息子といふ様子だ。黒いだぶだぶの外套をきてゐる。その顔はコクトオの描いた「わが手の蒼穹はなんちを守らん」と云ふ文句のあるデッサンに似てするどく瘦せてゐる。

附記 アンデルセンの自傳の一篇を上引用したが、あれは中野の譯そのままではない。僕が勝手に手を入れたところもある。それはあのへんのところになると中野の譯はまだ草稿のままデッサンなどがかなりあるからだ。勿論、訂正は僕のもつてゐる獨逸譯に依つた。

昭和八年三月

四

まだ發表しないでそのまま何處かへ藏ひ込んでしまつたアポリネールの翻譯が二三あつたのを思ひ出して、僕は數日前、ごちやごちやになつた手文庫の中を丹念に捜してゐたら、「贖救世主アンフィオン」などの譯稿と一しよに、そんなものあつたのを僕自身すつかり忘れてゐた、四枚ばかりの薄つべらな書簡箋に細かな字で書き込んである、或る一個の覺書が見つかった。それには「自殺に就いてのテスト氏の意見」といふ題がつけられてゐるが、それは僕が自分の心覺えのために勝手につけて置いたものである。そしてこれは數年前に佐藤朔君から借りた「LA REVOLUTION SURREALISTE」の一冊からの抜萃なのである。何でもその號にはブルトン一派が「人は夢みるごとくに自殺をする。果して自殺は解決なりや否や？」と云ふ質問を多數の學者や詩人等（その中には僕がその名を知らぬ人が澤山ゐたに「はゐたが」に發して彼等のアンケートを集めてゐたが、その中にムッシュ・テストなるものゝ回答が混つてゐるのを見つけたので、僕はすぐさまヴァレリーの小説中の同名の人物を思ひ出しながらそれを讀んだ。讀んで見ると、僕がそれまで讀んだいくつかの回答の中でそれが一番面白かつた。それにその言ひ草がいかにヴァレリーに酷似してゐるやうにも思へた。ヴァレリーの「テスト氏」が架空の人物な

ることはその序文でも分るが、他にテスト氏なる人物が實在してゐるといふことも聞いたことがないし、ことによるとこれはブルトン等がムッシュ・テストなるものの回答を勝手に捏造したのではないか？ さうすることによつてヴァレリーの「テスト氏」を揶揄したのではないか？ そんな疑ひも僕に起らぬではなかつた。眞面目と冗談とのけじめのなくなつてゐる彼等のことだから、こんなことも平氣でするのかも知れないと思つた。それにしてもそのムッシュ・テストの自殺に就いての意見は僕には甚だ面白く思へた。そしてそれだけを有り合はせの書簡箋に心覺えに譯して置いたのであつた。いま手許に原文がないのでその僕の譯には調べ直したら間違ひがどの位澤山あるか分らないが、その頃の僕（一九二八、九年）をかたみする意味でそれを此處にそのまま載せて置かうと思ふ。

「自殺する人々。ある者等は自己に克つ。他の者等は、反對に、自己に負けて、彼等の運命曲線（私はそれがどういふものであるか知らぬが）に従ふがごとくに見える。

前者は境遇によつて強ひられるのだ。後者は彼等の性質によるのだ。そして運命の上面の好意は彼等が一番の近道を通ることを妨げない。

自殺の第三の種類として次のものが考へられる。ある種の人々は人生を非常に冷靜に考へる、そして

非常に絶對的な、非常に野望的な考へをもつ、そのために彼等は彼等の死の處分を出來事や有機的變化の偶然に委ねたくないのである。彼等は老衰を、失格を、出來事を嫌惡する。我々は古人の中にさういふ人間離れした決斷のいくつかの實例といくつかの讚美とを見出す。

境遇によつて強ひられた自殺（私が第一に述べたところのもの）に關しては、その考へがその當人に抱懐されるにいたるのは、丁度或る一定の計畫どほりになさるべき行爲のやうにだ。それは或る災惡を確實に根絶せんとする無氣力から生ずる。あらゆるものを除去してしまふといふ迂路によつてしかその目的は達せられない。此事と現在とを除去するために全體と未來とを除去しようとする。あらゆる意識を除去しようとする。（さういふ一個の考へを除去し得ないから。）あらゆる感受性を除去しようとする。（さういふ手のつけやうのない、又絶えることのない、悲しみと絶縁し得ないから。）

ヘロデがすべての赤ん坊の首を斬らせたのは、その中の唯一人の死が彼には重要なのだが、その一人を見分け得なかつたからだ。ある男は、自分の家を荒らしてしやうがないが、どうしても捕らない鼠に夢中になつて、その鼠を追ひ出すことの出來ない建物全體を燃やしてしまふ。

かくのごとく一人間の手の届かない個所の惡化は一切のものを壊滅せしめるに至る。絶望せるものは、ほんやりと行爲すべく誘はれる。或は強ひられる。

その自殺は「不手際な解決」である。

それ許りではない。人間の歴史は不手際な解決のコレクションである。我々のあらゆる意見、我々の判断の大部分、我々の行為の最多数は、單なる窮策にすぎない。

第二種の自殺は、無限の陰鬱なる悲哀に、苦惱に、不吉な、そして特に祕されてゐた形象イデアツクによる眩暈に、なんらの抵抗もなし得ない人々の不可避的な行為である。

かかる種類の人々は、「死滅する」といふ一般的な意見或は觀念イデアに對して感じ易くなつてゐるやうに見受けられる。彼等は中毒者に比較すべきだ。死を追求する彼等の中に、藥品を捜す中毒者のところに認められるのと同じ根氣よさ、同じ不安、同じ詭計、同じ伴りを我々は觀察する。

或者は積極的に死を欲しないが、一種の本能の満足を欲するのだ。屢々彼等を魅するのは死の方法メソッドそのものである。首をくくらうと思ふものは、決して川に身を投げない、溺死は彼をすこしも鼓舞しない。指物師は、自分の首がすつぱりと快く切られるやうにと、よく工夫し修正した斷頭臺を作る。かかる自殺の中には美學がある。自分の最後の行為を注意深く構成せんとする氣遣ひがある。

不死身であるところのあらゆる存在物は、彼等の魂の影のなかに、人殺しの夢遊病者、執念ふかい夢想者、二重人格、曲げがたき旋の實行者がゐることくに見える。彼等はときどき空虚なそして神祕的な微笑それは彼等の單調な祕密のしるしであり、そして彼等の不在 (absence) の存在 (presence) を示すものだを洩らす。おそらく彼等は彼等の生を空しい或は辛い夢そのために彼等は何時も餘計に疲れ

たやうに、餘計に目ざめんと努めてゐるかのやうに、感じるのであるが)のやうに知覺するだらう。すべてのものが彼等には存在しないよりももつと悲しく、もつとつまらなく見えるのである。

私はこれらのいくつかの考察を、分析の正確に可能な場合によつて完結しよう。不注意による自殺といふものがあり得る。それは不意の出來事からは明らかに區別されるべきものである。一人の男がそれに彈丸の填つてゐるのを知つてゐるピストルをいぢつてゐる。彼には自殺したい欲望も考へもない。しかし彼は何かしら快感をおぼえつつその武器を握つてゐる。彼の掌が銃尾に結ばれる。彼の食指が引金にひつかけられる、一種のよろこびをもつて。彼は行為を想像する。彼はだんだん武器の奴隷になりはじめる。武器はその所有者を誘惑する。彼はぼんやりと自分の方へ銃口を向ける。彼はそれを自分の顚に、自分の齒に近づける。あゝ、危いかな！ 何故ならば人間機能の觀念が、肉體によつて下準備され、精神によつて完成されるところの行為の壓力が、彼を裏切るからである。壓力の循環が完了せんとする。神經組織はそれ自身充填されたピストルになる。そして指は突然しまらんとするのだ。……」

以上のところで僕の抄は終つてゐる。これからもつとあとがあつたのやら、ないのやら、僕はもうすつかり忘れてしまつてゐる。佐藤朔君にでも今度會つたら、それを調べて置いて貰はう。

テスト氏と云へば、僕はこの間本郷の古本屋で「テスト氏との一夕」の載つてゐる「サントオル」といふ雑誌を見つけて買つてきた。ヴァレリイがピエル・ルイスやレニエやジイド等と一しよにやつてゐた同人雑誌である。英國でピアツレイイ等のやつてゐた「イエロウ・ブック」と比較して見ると、非常に共通した點があつてなかなか興味が深い。

「テスト氏との一夕」はP・Vといふ筆名で發表されてゐるが、目次にはその表題の下にちやんとHoffmannと銘が打たれてゐる。「テスト氏」が小説であるかどうかにかんじて大ぶ議論もあるやうだが、ヴァレリイ自身はこれを小説として書いたものらしい。

言ひ忘れてゐたが、僕が手に入れたのは「サントオル」の第二號である。雑誌のうしろについてゐる附録で見ると、創刊號の要目に唯Pといふ署名で「詩二篇」とあるのがヴァレリイであらう。それから、第三號豫告にP::V::といふ署名で「ボオ、ニイチェ」とあるのもヴァレリイにちがひないが、そんな題のエッセイはとうとう書かれずじまつたものと見える。又、近刊豫告には「地の糧」などと並んでノヴァリスの「青い花」が出てゐる。譯者はアンドレ・ジイド。これは僕の夢ではない。但し、そんな本は世界中搜したつて見つからないだらう。

「サントオル」がそれから何號まで續いたか、それは僕は知らない。

昭和八年三月

五

「文藝林泉」は室生さんの最近の隨筆集である。が、讀後、何かしら一篇の長篇小説を讀んだやうな後味が残る。「京洛日記」や「馬込林泉記」や「いつを昔の記」などの小品風なものばかりではなく、「文藝雜記」などのやうなものさへ、さながら小説を讀んでゐるやうな氣持を起させるのだ。そこに室生さんの隨筆の妙味がある。そして私は讀後しばらくしてから、自分がそんな雜記のやうなものにまで小説らしいものを感じさせられたのは、この本そのものの影響であることに氣づいたのだ。室生さんは芭蕉や一茶の發句のやうなものからすら、いつも小説らしいものを嗅ぎだされてゐる。そしてさういふものを大層好まれてゐる。逆に小説そのものにかへつて小説らしくないものを求められる位にまで、さういふものを好まれてゐる。私自身はこの頃どちらかといふと、小説はやはり小説らしいものが好いものぢやないかといふ考へに傾き出してゐるが、そんな私までがこの本を讀んでゐるうちにいつか室生さん流になり、この隨筆集から小説らしいものを感じさせられてゐる。それほどこの本に親しめたことは、私にとつては何よりも氣持がよいのだ。

**

「京洛日記」は、この冬京都にラヂオの放送に行かれた折、寺院や庭を見てまはられた日記である。それらの庭々の冬ざれの様子が、巧みに配された人事と相俟つて、たいへん興味深く語られてゐる。蝕ばんでぼろぼろになつた板廊下だの、土塀の瓦や杉苔の色までがくつきりと目に浮んでくる。が、それと一緒に、明け方の京都の町を走つてゐる放送局の自動車のなかで、講演原稿を大きな聲で復習してゐる室生さんの寒さうな姿が、甚だ印象的である。

そのなかの「龍安寺」の章を読みながら、この庭が芥川さんの最も愛されてゐた庭だつたのを私は思ひ出した。室生さんも「ひよつとすると龍安寺などがこんど見て来た庭のうちで最も心に残つて澄み切つてゐるのではないかと思つた」と言はれて、その「京洛日記」を結ばれてゐる。

しかしその庭を見に行かれた折の日記によると、「……六十坪に十五の石が沈み切つてゐるだけである。併し無理に私どもに何かを考へさせようとする壓迫感があつて、それがこの庭の中にある間ぢゆう邪魔になつて仕方がなかつた。宿に歸つて燈下で考へるとこの石庭がよくこなれて頭にはいつて来るやうである。固い爺むさい號張つた感じがうすれて、十五の石のあたまでそれぞれに撫でてやりたいくらいに靜かさであつた。相阿彌の晩年の作であるといふ志賀直哉氏の説は正しい。只、爺むさく説法や謎を聞かされるのは厭であるが、相阿彌のこの行方は初めはもつと石をつかつてゐてそれを漸次に抜いて行つたものか、もつと少なくて石を置きそれに加へて行つたものか、盤景をあつかふやうな簡単な譯に行

かなかつたに違ひない。相阿彌が苦しんでゐるのが固苦しい感じになつて今も漂つてゐるのであらう。」恐らく芥川さんはその謎めいた魅力にいきなり飛びつかれて行かれたのだらう。が、室生さんは一應はそれに抵抗された。しかし最後にはその謎めいた魅力に打負かされてゐる。

藝術品の魅力は、結局、さういふ謎めいたものにある。謎のないものは、すぐ私達を倦きさせるのだ。

芥川さんのやうな作家は、さういふ謎をいつも作品の奥深くに秘めてゐる。それがその作品を解りにくくさせてゐる。が、室生さんの場合は、その謎をあんまり開けつ放しのところに置いてゐるので、反つて誰からも氣づかれずにゐるのだ。

例へば、非常に私の好奇心をそそられた一節がある。それは「文藝雜記」のなかで友人藤澤清造の餓死について書かれてゐる一節である。室生さんはのたれ死をした藤澤清造のことをかなり手きびしくやつつけられてゐるが、その數行のあひだ、室生さんは藤澤清造のことを「渠」と（それは明らかに印刷上の過誤ではなく、二箇所繰返して）書かれてゐる。私はいつも室生さんがさういふ場合に「彼」といふ字を用ひられることを知つてゐた。そして、その室生さんがいま不用意にその「彼」といふ字でなしに「渠」といふ字を用ひられてゐるのを見て（室生さんがその使ひつけない字をその時ことさらに用ひ

られたのだとはどうしても思へない) 私は妙に心を打たれた。そしてその思ひがけない打撃によつて、私は自分の知つてゐるかぎりの藤澤清造のことを、それから昔讀んだことのある彼の短篇のすつかり忘れてゐた筋までをまざまざと思ひ浮べたくらゐだつた。(藤澤清造はその短篇のなかでいつも「渠」といふ字を用ひてゐたのだ。)

室生さんの作品の魅力は、いつも、かういふところにあると言つてもよくはないか?

**

私なんぞは一人で考へごとに耽つてゐることは好きな性分なのだが、どうもそれをいざ書くとなると憶劫でならない。そんな折に、いつも室生さんはよく書くなあと思ふ。その眞似は出来さうでゐてなかなか出来ないのだ。思ふに、私達は頭のなかで一通りも二通りも考へて置いてから、それから言葉を捜しに出かける。氣に入つた言葉が見つからないと、いつまでも手間どつてゐる。が、室生さんはそんなことをしない。室生さんは手あたり次第の言葉そのもので直接にものを考へて行く、何かしら書いてゐるうちに考へのごんがらがりがはぐれ出して来る、さういつたところがある。つまり、室生さんには書くといふことと考へるといふことが同じことなのだ。

それが一方、さつきの藤澤清造のやうな場合には、見事な効果を生む。が、一方、どうかするとその

文章が大へん解りにくいやうなことになる。しかしその文章が解りにくいやうに見えるのは、決して室生さん自身でも口癖のやうに言はれるやうに頭が悪いからではなく、それは言葉の一步手前にゐる考へそのものを示してゐるからなのである。その文章がどうかした拍子に辻褄が合はなくなつてしまふのは、考へが思ひがけない飛躍をするので言葉の方でついでに行けなくなるからに過ぎない。——さういふ室生さんの文章を「悪文」だといふ人は、一種の偏見からさう言ふのか、それとも考へるといふことの面白さが全然解らない人達であるのに違ひない。さう私は思ふ。文章といふものは、それ自身が目的ではなく、單なる手段に過ぎないのだから。

**

悪文といへば、この集中の「感想小品集」のなかにも「悪文」といふ一篇がある。「このあひだ與謝野晶子さんの「冬柏」といふ雑誌に、森茉莉さんが室生犀星論を書かれてゐるなかに、室生犀星がもし發狂したらと書いてあつた。僕はその發狂といふ文字に久しぶりにかいごうしたやうな氣がして快く讀み過した。僕は度々犀星論を書かれたことがあるが、發狂したらといふ偶然にしろさう見て書いた評家が一人もゐなかつた。發狂する人間は大抵妄想からさうなり絶えず追つかけられるやうなセカセカした中に身も心も置かれるさうである。僕は發狂するなら酒からさうなるであらうが、茉莉さんは僕の書い

た隨筆などから何か感じだされて、それを見トドけて危ないところを統計的に考へあはせてさういはれたのであらう、もつと適切にいへば僕の書くちよつと意味の取りにくいところに意味を含んだ、さういふ悪文のなかに精神的異常をかざされたのかも知れない。」

その森茉莉さんの室生さん論を私はちよつと読んで見たいと思つてゐるが、まだその機會を得ない。そこで私はこの一節にあらはれた室生さんの考へだけを見るより他はないが、私はさういふ室生さんの發狂に對する不安のなかにいささかの不安も感じられなかつた。むしろ、これを讀んでいかにも室生さんらしいといつた一種微笑ましいやうな氣がした。私にはいつもの室生さんらしくさういふ恐ろしい空想をもつてさへも日常生活を豊かにされ樂しまれてゐるやうに思へるからだ。それにこの場合は、さういふことを森茉莉さんに言はれたことの多少の感慨もあつたからであらう。私はそれをあとで「駒込倫敦」といふ一篇を讀んで確めた。

その隨筆のなかで室生さんはまだ若くて貧乏暮らしをされてゐた頃のこと、よく本などを賣りに行く途中、森さんの家の前を通られ、その門の前に茉莉さんらしいお嬢さんの遊んでゐるのを見かけたことなどを書いてゐられるのだ。その次ぎの「本郷通り」といふ隨筆のなかでも、室生さんは當時の貧乏暮らしを回顧され、さういふ貧乏のなかでも、佛蘭西の廉タバコや西洋蠟燭などを購つて樂しまれてゐたことを書かれ、「そのころ生活といふものは生きることばかりが生活ではなくして、生活はそれを喜び

楽しむことも内容としてゐることを、學び得て初めて知つてゐたからであつた。」と言つてゐられる。

これくらゐ僅かな語でもつて室生さん獨得の生き方をはつきり示してゐるものは他にあり得まいと私には考へられる。室生さんは何か悲しいことでもあると、その悲しみそのものを樂しまれようとする——さういふ二つの相反した感情が絶えず室生さんの心のなかでは微妙な均衡をすこしも危なげなしに得てゐる。若し發狂したらといふやうなことでも、室生さんは眞面目で考へられてゐるのだが、同時にさういふ空想をも何處かで樂しまれてゐるやうなところがある。さういふ微妙な精神的均衡を、私は室生さんのなかに發見する時くらゐ、私達の生きることのよさをしみじみと感じることはないのだ。

此處に、「文藝林泉」讀後の慌しい感想を書き取つて置いた。

昭和九年六月九日

ボオル・クロオデルが日本に滞在中に書いた「日のもとの黒鳥」(L'Oiseau Noir dans le Soleil Levant)といふ本も、ときどき取り出して見てゐる本の一つである。この本の題名に使はれてゐる何か象徴的な感じの黒鳥といふのは、實はクロオデルの洒落なのださうだが、そんなところもなかなか好ましい。いろいろ好い論文や小品が集められてゐるが、僕が屢々この小さな本を手にすることのあるのは、大抵はそのなかの「能」といふ小論文を読みかへすためである。

「劇とは何事かが到来するものであり、能とは何びとかが到来するものである」といふ彼らしい莊重な定義をいきなり冒頭に置いてから、クロオデルは、先づ、橋懸りと本舞臺とからなる舞臺の説明から始め、それから能の音楽——囃子と地謡と——を紹介する。それらの囃子の中で、あの哀調に充ちた笛を「過^とゆく時間の我々の耳に對するときをりの轉調、演者の背後での時間と瞬間との對話」であると言つてゐるなどは面白い。又、地謡——これは、ギリシヤ式に合唱 (Le Chœur) と云ふ言葉を使つてゐるが——は筋には關與せず、單にそれに非人格的な註釋をつけ加へるものだと紹介してゐる。それは

過去を語り、風景を敘し、イデエを展開させ、登場人物を説明し、詩又は歌曲によつて應答する。「それは物語る彫像の傍らにうづくまつたまま、夢み、私語するのである。」

さて、次に登場人物が説明されてゐる。それは二人きりである、即ちワキとシテである。そのいづれも一人か數人のツレを伴つてゐることもあり、又、ゐないこともある。

ワキは凝視し、待ちうけてゐる者である。彼は決して面をかぶらない。彼は普通の人間なのである。舞臺はワキの出によつて、靜かに始まる。正面までしづしづと出てきたワキは、我々に向つて、名乗りを上げる。例へば、諸國行脚の僧などである。それから彼はワキ座につく。そして橋がかりの方へ目を据ゑて、彼は待つてゐる。

彼が待つてゐる、と何びとかが現はれてくるのである。

神、英雄、仙人、亡靈、鬼など——シテはいつも見知らぬものの使者である。そしてそれに準じて彼は面をつけるのである。それはワキに自分を發^はいて呉れるやうにと歎願する、覆^かひ隠れた、祕密な何物かである。その歩き方と所作は、それを引きつけそれを彼の想像地帯に囚へたままにしてをるところの、ワキの眼差しの幽^フ數^シである。例へばそれは、その亡靈がその殺害者に一步步近づかうとする、殺された女などである。——ワキは、長い間、彼女の上に目を据ゑてゐる、看客は彼を見守つてゐる、

彼は目ばたきさへしてはならない。……ワキは尋ねる、シテは答へる、地謡が註釋する。そしてこの面をかぶつた、悲愴なる來者は彼をそんな風に來らしめた者に、涅槃をもたらず。そして彼(シテ)は音楽でもつて、像イマージュと言葉との圍ひを組み立てる。

それから間になる。通行人がやつて来て、ワキに、對話の調子で低聲に問うたり、又説明したりする。さて、後の場になる。ワキはその役目を了へる。そしてもう傍觀者に過ぎなくなる。一瞬間引つ込んでゐたシテが再び現はれる。彼は死から、粗描から、忘却から出てくるのである。彼は着附を換へ、ときには變形する。いまや全場面は彼のものである。彼はその魔法の扇でもつて、現在を蒸氣のやうに追ひ拂ひ、そしてその不思議な衣のゆるやかな風でもつて、もはや存在して居らぬものに、彼のまはりには浮び上がるやうに命令する。他の者らがそれに續けるに従つて消え去つてゆく彼の詞ことばの魔術によつて、地下の光景が漸く灰の中からはつきりと浮んでくる。シテはもはや物語らぬ。彼は僅かの言葉、僅かの抑揚にみづからを制限する、そして地謡が一種の非人格的な歌唱で、シテの代りに、肉體的及び精神的風景を展開させる役目をする。シテは左右に走り、確かめ、證明し、展開させ、又所作をする。そして姿勢と方向との變化によつて、夢幻劇のすべての推移を示す。驚くべき逆説パラドクスによつて、それはもはや演者の内部にある感情ではなくして、演者が感情の内部に入つてしまつてゐるのである。……

かくのごとく能の構成を説明してきたクロオデルは、今度は、その全體としての印象を與へようとする。それが夢に似てゐること、演者が一種の催眠術的狀態の裡に動いてゐること、そして泣いたり殺したりするのには、唯、眠りに重たくなつた腕をもち上げさへすればよいことなど。そして光つてゐる面上を滑りながら足の指を上げたり下げたりなどしてゐる演者については、「その各々の動作は、大きな衣裳の重みと襲と共に、死に、打ち克たんがためのものであり、又その動作の一々は、失へる熱情の、永遠の中における緩やかなる摸寫であると言へよう。」「影の國から連れ出されて、それが我々の冥想的な眼差しの裡に、自ら描くところの生なのである。」「我々は我々のいかなる行爲をも、不動の狀態において見るのである。動きにはもはや意味しか残つてゐないのである。」「我々の目の前に一瞬間形づくられる彫像のごとくに、夫が、その妻を見つめようとしなないでその前を通り過ぎようとする刹那、その愛する者の肩の上に置いた手のなかの何といふ優美さ！そして繪入新聞の中に見かけらるるごときかかる悲哀の俗な動作も、それが緩やかに、注意ぶかく、演せられるとき、何んとそれは深い意味をもつことだらう！」

クロオデルはかくのごとく能の美しさを説きすすみながら、更らにかかる能の歴史、謠曲の文學的性質、さては能の衣裳、面、扇などにまで獨自の見解を加へてゐる。例へば、扇についてはかう書いてゐる。

「この彫像の上で、それは顫へてゐる唯一のものである。それはその彫像の腕の先にただ一つきりある人間的な葉むれである。そしていましたが私が言つたやうに、それは翅のやうに、思考のあらゆる態を真似る。それは色彩組織を變へ、心臓の上でゆるやかに打ち、又、不動の顔の代りに震へる、金と光との點である、それは手のなかに咲いてゐる花であり、炎であり、鋭い矢であり、思考の地平線であり、魂の顫動である。「蘆刈」の中で、長い別離のあとで、夫と妻とが再會するとき、二人の感動は、二人の息づかひを一瞬間ごつちやにしてしまふ、二箇の扇の顫動によつてのみ表現されるのである。」

昭和十二年六月

七

ハイネが何處かで、自分は獨逸人の頑固なのは大嫌ひだが、獨逸語は大好きだ、詩の言葉としては世界中で一番美しいだらうといふやうな意味の事を言つてゐたと記憶する。

この頃、僕も獨逸語がすっかり好きになつてしまつた。しかし僕の獨逸語ときたら、少年の頃、習つたきりなのでほとんど忘れてしまつてゐるが、それでも辭書を引きさへすれば、どうやら意味ぐらゐは通じる。そんな興味も手つたつてか、この頃獨逸語の本を讀む時ぐらゐ愉快なことはない。いま、リルケを讀んでゐる。そのうちヘルデルリン、ノヴァリス等も讀まうと思つてゐる。

リルケの「マルテ・デウリッツ・ブリッゲの手記」を最近讀み出してゐるが、いいものであると思ふ。獨逸語の勉強かたがた、モオリス・ベッツといふ人の佛蘭西語譯を傍に置いて、すこし譯して見てゐる。

そのベッツの譯が出た時、ジイドの「地の糧」と比較されてかなり問題にされたらしい。しかし、その比較されたのはどういふ點か。なるほど兩者とも、詩とも小説ともつかないものである。それにまたエドモン・ジャルウの言ふやうに、共に「遊離」の文學である點が似てゐないこともない。しかし、兩者の雰囲気はいちじろしく異ふのである。(ジイドもこの「マルテの手記」には甚だ興味をもつてゐる

らしく、一九一一年この原書が出版された當時、いちはやくその断片を若干「N・R・F」誌上に譯載してゐるとはいへ……この書は、丁抹の落魄した若い貴族マルテ・ラウリッツ・ブリッゲが巴里に漂着して、そこで貧困や病苦と戦ひながら、まったく一人きりで暮らしてゐるドキュメントである。巴里に滞在してゐた當時のリルケ自身の経験が骨子となつてゐることは疑へない。「巴里くらゐ人が容易に孤獨で暮らしてゐられる町はない。通行人がたいへん面白い。私は屢々、町のなかで非常に奇妙な顔立をした人に出會ふと、すぐそれに心を惹かれ、いつまでもそれに就いてあれやこれや考へた。或る夕方、私は一組の戀人たちとすれちがつた。非常にみづみづしく、若くて、幸福さうだつたので、私の方ですつかり面喰つてしまつたほどだつた。私は幸福の風に文字どほりに煽られた。それから私は、その戀人たちのことを何遍となく思ひ出した。數週間といふもの、私は彼等の幸福を生きてゐた。」晩年、リルケがさういふ話がある人にして聞かせたさうであるが、まあ、さういつた挿話でこの手記は満たされてゐるのだ。中にはすゝぶん氣味の悪い話もある。クリストフ・デトレエグ・ブリッゲの死の一節などは、いかにも「オペラ」の詩人コクトオの好きさうなものである。

コクトオと云へば、獨逸を追はれた文士たちがアムステルダムから出してゐる「ザンムルング」といふ雑誌の最近號に、コクトオ自ら獨逸語で書いた詩が載つてゐるのを読んだ。「三文オペラ」の作曲家クルト・ワイルに獻じてゐる。子供のときの獨逸語を覚えてゐるきりなので、たいへん幼稚なもので恐

れ入るが、君にはひどく氣に入つたらしいので、君に捧げるのだとことわつてある。讀んでみると、なるほど子供の使ふやうな無邪氣な獨逸語で書かれてゐて、僕なんぞにも樂にすらすると讀めるくらゐだ。それでゐて、とても面白い。六篇中、「空を飛ぶ子」は「オペラ」のなかの「人さらひ」と同巧異曲であるが、他の五篇はいづれも「ブラン・シャン」中の戀愛詩を思ひ出させる。さう云へば「ブラン・シャン」一巻は、コクトオの他の詩集に比べると、何處か獨逸的な味はひのある素朴な歌ひぶりであつた。僕は最近、この一巻を特に好んでゐる。さて、その獨逸語で書いた詩だが、例へば「お前には愛するといふことは愛されることに過ぎない。お前の夜は太陽の光を知らないのだ。お前はすべてを受け取るが、何物も與へることを知らない。お前の貧しい生活は何んと悲しさうなことよ！」「お前」だとか、「お前がひとりで寝てゐるとき、私はお前の夢が盜人のやうに逃げてゆくを見る。お前が嘘をつくとき、お前は何んと憎々しいのだ！ 眠りと戀とはお前を美しくする。眠りのなかの眞實が、お前の顔の上に暗い光線のうちに現はれるとき、私にはお前の顔が非常に若々しく見える。お前を見まもつてゐるのは私に課せられてゐる永遠の刑罰だ。」「刑罰」だとか、「私達は私達の考へてゐるよりもつと夥しい血をもつてゐる。戀もそんなに迅速にはそれを絶やさないと見える。戀は私達に多くの苦痛を與へるけれど、私達の血はいつまでだつてこのやうに赤いのだ。」「血」だとか、かういふ詩句は、何となく僕にハイネの抒情詩を思ひ出させる。かういふ風に日本語に譯してしまふと幾分だらしなくなるが、コク

トオの下手な獨逸語でも、聲を出して讀むとなかなか好いのである。「オペラ」のなかの「人さらひ」は、コクトオ自身の朗讀がコロンビア・レコードに吹き込まれてゐるので、諸君も御存知だらう。あれも大へん好い詩である。しかし、どうもあんまり洒落すぎてゐて、僕なんぞにはその微妙なところになると分らないのである。ところが、それと同じ主題による獨逸語の「空を飛ぶ子」の方は、何處か無骨で、そしてそれが一種のいい稚拙感を出してゐて、これなら安心して味つてゐられるといふ氣がする。日本語に譯したんでは、その感じもすつかりなくなるが、まあ、どんなものかぐらゐは分るだらうから、ちよつと譯して見よう。

人さらひは顔がない、風のやうに。

もう遠くへ行つてしまつた。ただ母親だけがまだ叫んでゐる、

「坊や！ 坊や！」と。

はじめは子供も叫んでゐた。自分の母親を捜してゐた。

お乳は葡萄酒よりもおいしい、パンにはバターもついてない。

空を飛ぶことは随分辛い仕事だつた……

しかし子供はそれをやつた、母親が遠くに離れてゐるので。

それから子供は殴られた。子供は泣いた。

一體どうして人間はいつも笑つてゐなくちやならないんだらう？

子供は遅く寢床に這入つた、さうして早く起きなければならなかつた。

子供の顔は看板に描かれてゐた。太鼓が金銭を求めてゐた。

子供の母親は死んだ。世界はいつまでたつても新しい。

人は澤山の人間を知つてゐる。が、彼等がどうなるかは知らないのだ……

白い馬のあとから車がごろごろ轉がつて行く。

ハイネのロマンツェロなどは、數ヶ月の間に病苦と闘ひながらも一氣に書き上げて、それをはじめから一卷として世に問うたものらしい。ああいふ働哭的な詩などは一篇々引きちぎつて讀まされるよりも、一卷として讀みとほすことによつて、我々の感動は別して強まるのである。その他、ヴェルレーンの「叢智」と云ひ、リルケの「時禱書」と云ひ、又コクトオの「ブラン・シャン」と云ひ、さういふ連作體の詩としては最高度のものであらう。さういふ一卷をなさずともいい、せめて十篇位でいいから、さういふ連作體の詩の試みも若い詩人たちにやつて貰ひたいと僕は思ふのである。現代詩人の複雑な心情はもはや十行やそこいらの詩の中にははひり切らぬのならば、一篇々々としてはいくら物足らぬところがあつてもいい、それら數篇が相寄つて互に補ひ合ひながら、はじめて一心情を形成する、——さういふのが連作體の詩の特色である以上、野心的な詩人たちには小説などに手を出すよりは、ときどきさういふ詩作をもつて貰ひたいのである。それは、海がその深みを加へれば加へるほどその青みを増すやうに、それらの詩を積み重ねれば重ねるほどその心情の凄みを増すやうなものであらしめたい。

又、野心のある詩人たちには時には長い詩も書いて貰ひたいものである。「四季」などでは、詩は大抵二頁位にきちんと収まつてゐる。ほとんど毎號々々さうなのである。清潔な感じはするが、少し几帳面すぎはしまいかと思ふ。ときどきは何頁めくつても、その詩がいつまでもいつまでも續いてゐる、——讀んでゆけばゆくほど、讀者の心は引き裂かれさうになり、或は云ひやうもなく靜まつてゆく、そんな詩が讀みたいものである。現代ではそんな詩をもつことはますます不可能に近くなつてゐる、——さういふ嘆きは誰もかも抱いてゐよう。それだけ、さういふ奇蹟のやうな詩の出現も、野心のある詩人たちには望みたいのである。

僕はゆうべ、この山の宿で、靴の中に入れてきたリルケの「鎮魂曲」^{レクイエム}の英譯本をとり出して、そのうちの「或女友達のために」の一篇を讀んだのである。これは二百七十行からもある長篇である。この春、その原文を辭書と首引きで讀んだときは、僕の例の氣まぐれな讀み方では、讀み了へるのに二三日もかかり、それでもまだ半分以上も解らないところを残したのであるが、——いま、比較的讀みやすい英譯で讀み直してみても、相變らず解つたやうな解らないやうなところが多い。が、ところどころ解し得た詩句からは何ともいへず清冽な光線が發せられてきて、それが依然として暗黒である前後の詩句の

上をもちかすかに明るませ、それがひよいと一瞬間解つたやうな、しかしまだ何となく腑に落ちないやうな氣もちに僕をさせる工合も、それもまたそれでなかなか愉しいのである。

「リルケがウォルプスウエデの繪かき村のなかで暮らしてゐる間に書いた日記の中には、後に彼の妻となつた女流彫刻家クララ・ウエストホフに對するばかりでなく、「ブロンドの閨秀畫家」パウラ・ベツカアに對する數多の仄めかしが見出される。その後者に對しても、彼が非常に深い愛情をもつてゐたことは、疑ふことが出来ない。これ等の二人の少女と共に、語り合つたり、音樂を聴いたり、自分の詩を自分で朗讀したりしながら過した夜々の、彼の記述は見事である。彼が「形象詩集」中の「少女の歌」を書いたのは、それらのうちの一夜の後だつた。パウラ・ベツカアは畫家オットオ・モオダアゾンと結婚したが、その後間もなく産褥中に死んだ」と、英譯者J・B・レイシユマンは、「レクキエム」の莊嚴なる一篇をもつてリルケがその死を哭した、その「或女友達」のことをノオトしてゐる。

詩人の微妙なる筆は、冒頭、若くして逝けるものが、生者のところに歸つてきて、何か忘れていつたものを捜し求めるかのやうに、おづおづとさまよひ歩いてゐる姿を描いてゐる。彼女の求めてゐるものは何であるか？

言ひなさい、私は旅に出ようか？

お前は何處かに、或物を残してきたのだが、

それがお前のところに來ようとして苦しんででもゐるといふのか？

お前の五官の他の半分のやうにお前に似てゐるけれど、

お前がまだ見たことのない田舎に、私は旅しようか？

その田舎で、私は園丁に多くの花の名前を暗誦させ、その美しい特有の名前の破片の中に入れて多くの香の残りを持ち歸らうか？ それともまた、その地方がその青空までもその中に存在してゐるやうな、果實を買つて來ようか？

何故ならお前は熟した果實といふものをよく理解してゐたから。

お前は自分の前の皿のなかにそれを置いておいたものだ、

そしてその重味を色彩でもつて測つたものだつた、

そして女たちも、子供たちも、お前には果物のやうに見えたものだつた、

兩者とも内部からさういふ生態の中に押しやられてゐるのだ。

そして遂にお前はお前自身を果實として見るやうになり、

お前自身をお前の着物から引き出して、鏡の前に運び、

それをお前の見るがままに委ねて置いたものだった、

するともはやそれは「あれは私だ」とは言はずに、「これが私だ」と言ふのだった。

それほどお前の凝視は好奇的ではなくなつてゐた。

無一物で、本當に貧しく、それはもはやお前自身をも欲せぬほどであつた、

それほどお前は神聖になつてゐた。……

そんな風に、——お前が鏡の中に深く、そしてすべてのものから遠くに、お前自身を置いてゐるとき
のやうに、私はお前を保つてゐたいのだ。それなのに、何故お前は異つた風に来るのか？ 何故お前は
お前自身を呼び戻すのか？——さういふ彼女は、死によつて中絶された仕事を仕上げたがつてゐるので
はないか？ 彼女が慎ましやかに、名聲には無頓着に、唯自分のうちに強くつて自由な魂を成熟せしめ
ようと努力してゐた時、外部から突然、他の勞役——「母になること」が現はれたのであつた。彼女は突
嗟に、彼女が自分のうちに養つてゐたものは死であることに氣づき、そして自分の血のすべてがそれに
本能的に反抗するにも拘らず、それを彼女は穩かに受け入れた。……そんな風に、彼女を母とならせて

死なしめたのは、彼女を所有して居り、彼女を意のままに出来ると思つてゐた彼女の夫であらうか？

いや、それよりむしろ、それは彼の中の男である。しかし、自分の愛するものを所有する権利などを持
つてゐる男など、何處にゐる？ 自分自身をさへ保つて居れず、ただ子供がボオルするやうに、とき
どき運よく自分自身を掴まへては、再びそれを投げるやうな者どもに、どうして愛人を所有など出来よ
う？

——さういふ重々しい慟哭的な、しかし嚴しく制御せられた調子が、全篇をも悲しげに流れてゐ
る。そしてこの者のやうな若くして純潔なる犠牲者の例から、いかに人生と偉大なる仕事との間には昔
ながらに大きな敵意があるか、といふ永遠の法則が抽き出され、それが高調されてゐる。

そして詩人は最後にかう結んでゐるのである。

歸つていらつしやるな。もしお前に我慢ができたなら、死者と俱に

死んでいらつしやい。死者にはたとと仕事がある。

が、私に助力して下さい、それがお前の氣を散らさない範圍で、

遠方のものが屢々私に助力して呉れるやうに、私の裡で。

きのふからギイ・ド・ブウルタレスの「伊太利に在りし日のニイチェ」といふ本を読み出してゐる。忠實な傳記ではないかも知れないけれど、なかなか面白い。いま読んでゐるところは、ニイチェが三十七六の時、獨逸を去つてはじめて伊太利に赴き、先づ最初ヴェネチアに滞在してゐた頃（一八八〇年三月—六月）の有様を敘した一章であるが、ここに描かれてゐるニイチェの姿には、これまであまりにも屢々ニイチェといふ名の下に描かれてきた狂暴なディオニソスの人間とはかなり相違した、すつと我我には親しみ深く思はれるものがある。私はさういふヴェネチアにおけるニイチェの姿をブウルタレスから少し抄して見よう。

ヴェネチアでは、ニイチェは、あるバロック式の古い館の、大理石を敷きつめた大きな室の中に住んでゐた。そこから聖マルコ寺院までは、埃のない、日蔭の多い、もの靜かな通りを、三十分位で散歩して來られた。ニイチェの大好きであつたヴェネチアの日蔭、——それは彼のその時書いてゐた本（即ち「曙光」^{モルグンレエチ}が長いこと「ヴェネチアの日蔭」(Ombra di Venezia)といふ題をつけられてゐたほどであつた。彼の生活は細心に規則的であつた。毎朝七時か八時頃から仕事にとりかかる、それから散歩と粗末な食

事。二時過ぎになると、友人のベエタア・ガストがやつて來る。このベエタア・ガストといふ男は、バゼル大學時代からのニイチェの教へ子で、いまは作曲家を志してゐる。ニイチェをヴェネチアに招んだのはこのガストであるが、いまはもうこの男だけがニイチェの忠實な友人であり、原稿の淨書やら、口授筆記やら、病氣の世話やら、何から何まで面倒を見てやつてゐる。そのガストが暫らく一緒にゐてから歸ると、又改めて七時半まで仕事をする。すると再びガストがやつて來て、夕食を共にする。ときには半熟の卵と水だけですましてしまふこともある。それから大概、一緒にガストの家に行つて、代るピアノを弾き合ふ。ニイチェは自分で作曲したものを弾いたり、即興曲をやつたりする。ガストはシヨパンに私淑してゐて、彼の曲ばかり弾いてゐる。このヴェネチア滞在中くらゐ、ニイチェは音樂に親しんだことはなく、そして彼はもはやシヨパンのみしか愛さなくなつてゐた。

シヨパンとニイチェ。——この二人の病人、この二人の純潔な情熱家、この二人のいたるところを漂泊する孤獨者の間には、魂の血縁といふやうなものがありさうである。この二人の中で和音をして顫動してゐるものは、先づ、生きんとする劇的な悦びであらう。それから更らに附け加へたいものは、懷疑の裡に仕事をすることの愉しさ、——恐らくそれは、氣高い方法で苦しむこと、そしてそれを意識してゐること、それからまた、ありふれた光榮を約束させるやうな愚鈍な誠實さよりも寧ろちよつとした短い叫びの方を選ぶことの楽しみ、とでも云ふべきであらうか？ とブウルタレスは穿鑿してゐる。

ワグネルが「トリスタン」を作曲したのは矢張りこのヴェネチアであり、後年自らその作品は、「あの素ばらしいヴェネチアを音楽化したもの」であると言つてゐるが、ニイチエもまた、その「曙光」の中で彼のヴェネチアを音楽化してゐると言へよう。その内的なヴェネチアは、彼が散歩をしながら、カッフェに休んでゐる間だのに取つたさまざまなノオトの間から、まるで新しい歌のやうに聴えてくるのである。

後年、ニイチエは「この人を見よ」のなかに當時を回想しながら、かう書いてゐる。「一體私は音楽にいかなるものを欲してゐるかに就いて、最も選ばれたる讀者諸君のために一言したい。音楽は、十月の午後のやうに快活にして深いものであること。それは獨得で、奔放で、そして柔軟であり、可憐なる少女のごとく狡くてしかも優雅であること。……由來、獨逸人のごときものに音楽の何たるかが解せられようとは私は思ひも及ばぬ。獨逸音楽家と稱せられてゐるものは、ことにそのうちの最も偉大なるものは、外國人である。スラヴ人か、埃太利人か、伊太利人か、和蘭人か、——或は猶太人である。さもないば、ハインリヒ・シュッツやバッハやヘンデルのごとき優秀なる種族、今日では既に亡びたる種族の獨逸人である。私自身は、シヨパンのためになら他のあらゆる音楽を犠牲にしてもいいと思ふほど、自分が充分に波蘭土人であることを感じてゐる。私は三つの理由からワグネルの「ジイグフリード牧歌」を例外としたい。又、そのオオケストレーションの崇高な抑揚によつて他のすべての音楽を凌駕してゐるリストの或物、それから又、アルプスのあちら側で——今ではこちら側だが——生れたところのすべてのものも例外としたい。……私はロツシニなしにはすまされない、又それと同じ位、音楽における私の南方、わがヴェネチアの大作作曲家ベエター・ガストなしにもすまされない。そして實は私がアルプスのこちら側といふのは、ただヴェネチアだけを指してゐるのである。もし私が音楽をそれで代用させるやうな一語を求めるとしたら、私はヴェネチアといふ一語をしか見出さないであらう。私には涙と音楽との區別をつけることは出来ないのである。……」

昭和十一年五月三日

ゲエテの「冬のハルツに旅す」の斷章にブラアムスが附曲したアルト・ラブソデイを、一週間ばかり前からレコオドでをりをり聴いてゐるが、どうもそれを唱つたオネエギンといふ女のひとの、すこし北歐訛りのある陰影に富んだ、底光りのする歌ごゑがすつかり耳についてしまつてゐる。夜など、ふと目をさますと、その歌が耳の底から蘇つてくるやうである。……しかし、すつと病牀にゐる私は、ついおつくうにしてそのドイツ語の歌詞を分からないままにしておいたが、けさ漸く小康を得たやうなので、ゲエテの詩集をもつて來させて、それを讀んでみた。かなり難解な詩であつて、二度三度と讀みかへして、漸くその詩の意味が分かるやうになつた。手もとにある鷗外の「ギョオテ傳」をみると、一七七七年十一月末、カルル・アウグスト公が昵近の士を連れて獵に出たとき、ゲエテは獨りハルツに旅した、そのときの詩のやうである。病牀にあつて、私はかういふ旅するゲエテの姿を描き出してゐた……

重くろしき雲の上に
輕ろやかに翼をさめて

獲物ねらふ秃鷹のごと
わが歌を翔りやらん

旅人はさう氣負ひながら、冬の朝まだき、獵に出る友人らと袂を別つて、獨り、北に向いてハルツを目ざしてゆく。雪をはらんだ雲は、さういふ彼に抗ふやうに、低くおもく、垂れこめてゐるのである……

旅人はをりをり二三日前に會つた一人の青年の不幸な姿をおもひうかべる。その厭世的になつてゐる青年がそれまで何度も手紙を寄こして彼に救ひを求めてゐたので、彼はこの度の旅行の途中、わざわざその青年に會つていろいろ意見をしてやつたが、その甲斐もなかつたのである……

旅人の胸は、人皆にはそれぞれの道が神によつて豫示せられてゐて、或者は幸福への道に、また或者は苦難への道に向はざるを得ないといふ事で、いふべからざる苦惱をおぼえる。さういふ人生のすがたが、いま彼の直面してゐる自然の中にもさながら見える。この山中の荒涼とした様子はどうかだらう。何物も目には入らず、只をりをり餓ゑ切つたやうな小動物だけがそのみじめな姿をさらすばかりである。

——いま、旅人の目には、はるか彼方、氷つた湖の向ふに、一つの町が見え出してゐる。ああ、おそらく彼處には幸福なる人々が、蘆の間にかくれてゐる雀たちと共に、憩うてゐることだらう。「己もきのふまでは彼處で彼等と共に無事な日を過ごしてゐたのだ……」

それと同時に、彼には再び、あのかはいさうな、無益に人生に抗してゐるやうな青年のすがたが、こんな心象でまざまざと泛んでくる。

されどかしこに孤り立てるは誰ぞ。

彼れが掻き分けゆくは藪ならずや。

その過ぎし跡に灌木は、ふたたび枝さしかはし、

踏まれし草も身を起こせり。

何たる荒蕪の彼れを呑まんとする！

ブラアムスのアルト・ラブソデイのはじまるのは此處だ。詩の氣分の高まりと共に、オネエギンの力強い獨唱は、かくして道にはぐれていつた不幸な若者に對する如何ともしがたい憐憫でいよいよ沈痛を加へる。いまは香料すら毒のやうにおもひこんでゐるもの、人を愛しすぎたがために却つて厭人的になつてしまつたもの、はじめ人から侮どられて遂に人を侮るやうになつたもの、充たされぬ自己の欲望のためにいつか自分自身をも知らず識らずの裡に蠶食してゐるそのやうな不幸なものを、一體誰が慰め得ようか？

愛の父よ、おんみの豎琴の上に

彼れの耳にも入りうべき

調べのひとつだにあらば

かれが心を慰めたまへ

此處から徐かに男聲合唱がアルトに絡みはじめ、低いオオケストラを伴奏にしながら、旅人の同情は遂に一つの大きい祈りにまで高まつてゆく。……かかる不幸な若者のための莊重な祈りのうちにブラアムスのラブソデイは終るが、詩人の同情はさらに、いま何處かの雪のなかに獵をしてゐる友人たちの上に向けられ出す。彼は山林や畑を荒す野獸どもを勇ましく獵してゐる彼等の上にも神に祝福を乞ふのである。それから、最後に彼は彼自身——それらの友人から離れて只一人、かうして魂の安靜を求めつつ雪のなかに道を尋ねてゐる自分自身の上に立ち歸つてゆく。

お、愛よ、おんみの詩人の

このしとどに濡れし髪を

常緑の葉もて覆ひたまへ

さう祈りつつ、詩人はその愈々困難なるハルツ登攀を続ける。そして自分が何物かから加護せられてゐるといふ信念を得つつ、幾多の艱難に耐へゆくのであつた。

数日後、旅人は遂に前人未踏のブロッケン山の絶頂を極める。きり立つた花崗石の頂きに秃鷹のやうに立つた詩人——彼の上方には明るい明るい空がある、そこからは太陽が烈しく灼きついて、外套の裏からは焦げ臭い匂ひが立つ程だ。そして足下にはちつと動かない雲が一面に立ちこめてゐる。僅かにその隙間からすつかり雪に掩はれた山や谷がかいま見えてゐるばかり。然し詩人の心にはそのかいま見えてゐる雪に掩はれた山肌の光りの變化をみまもつてゐるだけで、色彩學に對する新しい想念を呼びさますには十分だつた。……

さらに見廻せば、彼の立つてゐるブロッケン山をとりまいてゐる山々、地上の富をもたらず幾多の鑛脈を潜めてゐるにちがひないそれらの山々、——詩人の飽くことを知らない自然探究の心は、かくして地質の構造、鑛物學などの上にもまで擴げられて行くのである。いまこそ、彼の大いなる使命の自覺が彼の裡に目ざめつつあるのである。——

そこでゲエテの詩は終る。——「ギョオテ傳」に據ると、詩人はブロッケン登攀後、さらに二日間ハルツを歩き廻つてから、狩獵の一行と落ち合つて、一しよにワイマルに歸つた。そしてこの旅から歸つた頃から、ゲエテは著しく眞面目になり、一種の超然たる内生活に入つたといはれる。

私は病牀にあつて、この僅か十一節よりなる詩を讀了するのに殆ど半日を費してしまつた。しかし、けふはこの日頃になくいかにも赫かしい、充實したやうな日のやうにおもへる。もう一度、ブラアムスのアルト・ラブソデイを聴きたいのも我慢しなければならぬほど疲れてゐるが、それすら生の充足からくる疲れのやうに心愉しいものがある。

昭和十三年十二月十九日

ユウジエニイ・ド・ゲランの日記

* 此處に載せたのは EUGÉNIE DE GUÉRIN. Journal et fragments の最初の手帳からの抄譯である。

* 筆者ユウジエニイ・ド・グラン及びこの「日記」については
巻末に譯者の附したノオトを参照せられたい。

十一月十八日

私はあの灰色の猫にすつかり腹を立ててゐます。あの悪い猫は私が火の傍で温めてやつてゐた一羽の凍えかけてゐた小鳩を、私から奪つていつてしまひました。そのかはいさうな小鳩はやつと元氣づき出してゐたのに。私はそれを飼ひ馴らすつもりでゐましたし、鳩の方でも私が好きになつたでせうに。が、何もかも猫の奴に噛みつかれてめちやめちやになつてしまひました。まあ人生には何んといふ失望があるのでせう！ この出来事をはじめ、この日のすべてのことは臺所で起りました。ミミイがゐなくなつてから、私が朝の時間と夕方ひごきの一刻を過ごすのは、その臺所なのです。料理女を監督する必要がありませんから。パパもまたときどき降りて來ます。私はパパにストオプの傍だの、或は爐邊でもつて、「古代アングロサクソン教會史」を拾ひ讀みしてあげてゐます。この大きな本はビエリルを「*Qui de nous a qui dedins !*」(こんなかにはなんてどつさり言葉があるんだい)といつて吃驚させました。この子は本當に變りものです。ある晩この子は私に魂は不滅であるかどうか、それからまた哲學者とはどういふ人のことをいふのかと尋ねました。私達がまあどんなに澤山の問題について語り合つたか、それでもお

分かりませう。哲學者といふのは、學問のある、賢い人のことだと私が答へると、その少年のいふには「それでは、お嬢さん、あなたは哲學者なのですね。」その言葉は、ソクラテスをも得意にさせたかも知れないやうな、無邪氣さと眞面目さをもつて言はれました。けれども、その言葉はとても私を笑はせましたので、私の傳道師としての威嚴はその晩はめちやめちやになつてしまひました。二三日前、その子は非常に残念がりながら、私たちのもとを去つて往きました。その子との契約は聖ブライス祭の日まででしたので。さうして彼はいまは、何處かあちらで、小さい豚を連れて群狩りでもしてゐるのでせう。もしもその少年がこちらの方へやつて來たら、私は彼を捜しに往きませう、まだ彼は私のことを哲學者のやうだと考へてゐるかどうか訊くために。……

十一月二十日

私は雪が大好きです、この白い擴がりには何か神々しいものがありますもの。いつもは泥や裸土が、私を不快にさせ、氣をめいらせてしまふのに、今日は道の上の轍と小鳥の足跡のほかは何んにも見えません。小鳥たちはいくらか軽く下りても、雪の上いろいろな模様を印する、小さい足跡を残して行きます。その小さい赤い脚が、まるで珊瑚朱の鉛筆がそれ自身で描いてゐるとでもいつた工合に動いてゐるのを

見守つてゐるのは本當に可憐です。こんなふうに冬にだつて獨得の魅力も愛らしさもあるものです。神様はいたるところに恩寵と美とをお顯はしなさいませう。……

十一月二十四日

三日ほど抜かしてしまつた。何も書かすにおくのをあまり好まない私としては、すのぶん長いこと抜かしたものです。けれど、私は本當に坐る間もなかつたのですもの。土曜日からすつと自分の小部屋はただ素通りしてをりました。やうやつとのことで、此處に腰を下ろしました。ミミイに長い長い手紙を書き、それからこれにも二三言書かうと思つて。たぶん晩にでもなつたら、又、何か書き足すかも知れません。もしも何かあつたらばね。いま一とき、すべてのものが——内も外も、魂も家も、——静かです。本當に幸福な状態です、けれども語るべきことは何ひとつありません、ちやうど泰平の御代がさうであるやうに。今日はポオルからの手紙でもつて始めました。彼は私にアルピに來ないかと招んでくれました。それは私には約束が出来ませんでした。私はそのためには家を離れなければならいませう、が、私はこの頃すつかり出不精になつてしまひました。私は此處、——ケエラにならば、よろこんで獨居の誓ひもさせうものを。この世にはわが家くらの私の氣に入つてゐるところは他にありま

せぬ。まあ、何んてわが家といふものは好いものなのでせうか。まあ、どんなにか私はお前の事を不憫に思つてゐるでせう、わが家から遠く離れてゐる、可哀さうな放浪者のお前。自分の家族の者たちをただ頭の中に描くだけで、「お早う」とも「お寝すみなさい」とも私達には言へないで、——まるでこの世に自分の身うちのものなんぞないやうな宿なしのやうな暮らしをしてゐるお前。——かうして父も兄も姉もちやんと此處にゐるのに。さういふすべては悲しい事です。けれどもお前のためにはさうより外はしかたがないのでせう。私達はお前を私達の傍に置いておくわけに行かないのです、けれど私にはお前と再會できるといふ希望があります、そしてそれが私を慰めてくれるのです。私はいつもお前の歸つて来る日のことを考へ、そのときはまあ私達はどんなに幸福だらうかと楽しみにしてゐます。

私が水車のほとりに立つてゐたら、アンディヤックの貧しい少女が私にミミイの手紙を持つて来てくれました。「難有うよ、これはほの少しだけけれど……」その女の子はお駄賃を貰つても、まだ行かうとはしません。「もつと欲しいのかい」「いゝえ、それでは、お手紙は……」「あゝ、これはたしかに私宛の手紙だよ」「ええ、ですけれど、それを私にお返しにならなくては。さあ……」「女の子は、その封を指さしながら、「封を切つて早く読んで頂戴」と私にいふのだつた。漸つとそのいきさつが分かつて私が笑ひ出してゐるのを、女の子はびつくりしたやうに、見詰めてゐました。そのうちにとうとう私がどうしても彼女の持つてきた手紙を返しさうもないことを知つて、彼女は私に「さよなら」を言ひました。それか

ら私は横木の上に腰を下ろして、本當になつかしい妹からの便りを讀み出しました。ミミイの情愛のある心ほど明るくつて、伶俐なものはありません。ミミイは全く倦き倦きしてしまつてゐて、私達に逢ひたがつてゐます。陽氣なことは彼女にはあまり楽しみを與へません。彼女は金曜日には私達のところへ歸つて来るでせう。これからユトオ家へ行くエランに托さうと思つて、私は彼女に手紙を書かうとしてゐるところです。私自身はといへば、私はたつた一人きりで、相變らずの孤獨です、さうして半分しか生きてゐないみたいです、まるで私にはたつた半分しか魂がないかのやう。いまもいとまで、これまで自分の書いて來た事は残らず時間の空費に過ぎなかつたのではないかといつた事だの、又日記の中には、それを最後の頁まで開いてゆかせるほどの魅力はお前に對してだつてないのではないかといつた事が、胸に浮んでゐます。これらの日記には一たい何かがあるのでせう？ 一日が他の日に似て、語るべき何物もないといつたやうな、或る小さい生涯。そんなものなど書いたりしてゐるよりか、縫ひ仕事にでも歸る方がすつといいのかも知れない。ままよ、わがいとしいペンよ、私はしばらくお前にお別れませう。

天のうちの天は、まあどんなにか美しいことだらう！ そんな事を、私は本當にすばらしい冬の空の下で沈思に耽りながら、考へてゐました。私はベットにはひる前に窓を開けて、どんなお天気か見てみて、もしお天気がいいと、それをしばらく楽しむやうな習慣があります。今夜は私はいつともよりか長いことそれを見てゐました。空が魂を奪ふやうに美しかつたので。もし風邪を引く心配さへなくば、私は

もつと其處にゐた事でせう。私は私達の牢獄をこんなにも赫やかしくおつくり下すつた神様の事を考へてゐました。それから、彼等の足もとにこれらの無数の美しい星をおもちになつてゐる、聖人たちの事を考へました。それから私はまた、恐らく私と同様にそれらを見上げてゐるのにちがひないお前の事を考へました。そんな事を考へてゐれば、私は夜ぢゆうでも平氣で起きてゐるでせう。けれど人人は、さういふ偉大なる外界の上に窓を締め、そして窓掛けのかけに自分たちの目を閉ぢなければならぬのです。エランは今夜ルイズからの二通の手紙を持つて来てくれました。その手紙は素敵でした。うつとりとするやうな書き方で、機智も心情も一ぱいに溢れてゐました。そしてそれがみんな私に向けられたものなのですからね。それでゐて私は、自分がどうしてさういふ友情に夢中になつたり、それに陶醉できないのかさつぱり分かりません。けれども、神様は、私がルイズを愛してゐることはよく御存知の筈。さあ、もう私の一日の最後の時間になりました。いま、私に残つてゐるのは、夕べの祈りと、睡りを待つことだけ。しかし睡れるかどうかは、自分には分かりません、まだ少しも睡くないので。たぶんミミイは明日歸つて来るでせう。明日のちやうど今頃私は彼女と一緒にゐるでせう。彼女は此處にゐるか、それとも同じ枕に二人の頭を並べてゐる事でせう。彼女は私にガイヤツクの事を、又、私は彼女にケエラの事を話してきかせながら。

十一月二十八日

けさ、まだ暗いうちに、私は蠟燭に火をつけようとして、灰の中に火箸を突込んで、燂あきを捜しました。何んにも無かつたので、やむを得ず床に戻らうとしかけたとき、偶然火箸の先きに觸れた小さな炭がまだ燂あききてゐるのを見つけました。そこで、私はランプに火をともしました。それから大いそぎで着換へをしお祈りをして、それから私はミミイと一緒にカユザツクへの道を行いました。ふしあはせなこの道、長いこと私が一人きりで歩いたこの道、それを今日はかうして二人で歩いて、まあ何んて嬉しいこと。お天氣はそんなに好くはなかつた。さうしてあの山の方——お天氣の好いときにはとてもよく見えるあの懐しい地方も、ちつとも見えなかつた。禮拜堂はまだ締まつてゐましたが、それは反つて私には仕合せでした。私は急いそがせられずに、さうして禮拜堂にはひる先に、神様の前で自分の心をすつかり調べるだけの餘裕のあるのが好きなのですもの。私の考へといつたら、それこそ木の葉のやうに散らばつてゐるので、それを掻き集めるだけでもいい加減に時間がかかるのです。やつと十時頃、世にも立派なお説教に耳を傾けながら、私は一心に跪いてをりました、それから私は自分がより善くなりし事を感じて、其處から出て參りました。すべての負擔を取卸す效力は私達をして身輕にせしめる事にありませう、さうして魂が神様の御許にその罪の負擔を取卸すときこそ、魂はあたかも羽根でも生えたかのやうに輕々

と感ずるのです。私は懺悔の素ばらしさを讃歎いたします。「私が悪うございました」と言ふ度毎に、まあ何んといふ慰藉、何んといふ光明、何んといふ力を私は意識したことせう。

十一月二十九日

外套、木靴、傘、——さういつた冬の用意のものが——けさはアンディヤックまで私達のお供をして來ました。其處では、私達は牧師館に行つたり、教會に行つたりして、夕方まで居りました。かういふ活動的な、忙しい、變化のある日曜日の生活を、私はどんなに好きだか知れませんが、途すがらも、いろんな人に出逢ひます、さうして、お互に挨拶を交はして、一しよに歩きながら、鶏だの、家畜だの、夫だの、子供だのの事を話し合つたりします。私の一番楽しいことは、子供達にキスをしてやつたり、又彼等が顔を眞赤にしてお母さんのスカートの中にそれを隠したりするのを見ることです。子供達は見知らないものは何んでも怖がるやうに、私のやうな *las dominicolas* (お嬢さん) も怖さうにしますの。いつだつたか、そんな小さな子供の一人が、私達のところを訪ねる約束などしてゐるその祖母に向つて、「おばあちゃん、あのお城に行くのは、およし。あそこには眞つくらな洞穴があるのよ。」としきりに云ひつけてゐました。城といふものが、いつになつても、恐怖を喚び起すといふのは一體どうしてせう

か？ 昔、そこで犯されたことのある惨事のためなのでせうかしら？ 私にはさう思はれますが。

まあ、雨音を聞きながら、爐の一隅に腰かけて、火挟みを手にしたまま、火花を散らさせてゐるのは何んて楽しい事せうか。今も今とて、私はそれを楽しんでゐたところですよ。私はそれがとても好き。まあ、その火花の美しいことつたら。いかにも燂爐に咲く花といふ感じ。ほんたうに灰の上になつていくらも面白い事が起る。忙しくないときなんぞ、爐の中にいろんな幻を見てゐるのは本當に楽しみなものの。無数の小妖精があつちへ行つたり、こつちへ來たり、大きくなつたり、形が變つたり、消えたり、いま天使かと思つたら、こんどは角の生えた悪魔、それから子供になり、老人になり、蝶々になり、犬になり、雀になる。燃えてゐる薪の下では、そんなものが何もかも見られるのです。私は、神々しいほど苦しんでゐるやうに見える、一つの顔——それは私に煉獄にある或靈を思ひ出させましたが——を覺えてゐます。そのとき、私はそれにいたく打たれ、自分の傍に畫家がゐてくれたらとさへ思つたものでした。それほど完全な幻像はしかし二度とは見られませんでした。薪の燃えてゐるのを氣をつけてゐて御覽なさい、さうしたら、盲目でさへなくば、爐のそばでは決して退屈なんぞしよう筈がないといふ事に同意なさるでせう。とりわけ、燃えつつある薪の下からときをり聞えて來る、なにかを歌つてゐる聲のやうな、あの小さい鳴りに耳をおすまじなさい。それ以上優しい、それ以上純粹なものはないでせうか。何か小妖精が歌でも歌つてゐるやうだと、言へば言へませう。私の夜々、その夜々の楽しみ、とい

つたらまあさういつたやうなもの。それに睡りを付け加へませう。決してそれらの楽しみの小なるものではない睡りをね。

十二月二日

おまへが私達や私に冷淡なのかと思ふほど弱氣になつてゐる自分が腹立たしくてなりませぬ。こんな考へは本當に莫迦々々しいのに、それがきのふ終日私の心を占め、私を悲しませてゐました。私がきのふの手紙に、殆ど何んにも書かなかつたのがそれでお分かりになるでせう。悲しみは私を啜のやうにさせてしまふのだから、免して頂戴ね。私は愚痴なんぞを言つたりするよりか、いつそ黙つてゐる方が好き。すべての原因はと言へば、おまへがミミイのところ^{ミミイ}に寄こした手紙です。何故だかお前に言ひませうか。お前が私の手紙を讀むとき、それが十二月一日に書かれたと云ふ事を覺えていらつしやい、——その日は、雨のふつてゐる、陰氣な、どうにもしやうのない日で、一日ちゆう日も射さなければ鴉の群のほかには何んにも見えす、そして讀んだものはお前から來たその手紙一通だつたのに、それが又ほんの申し譯のやうなものだつたのだから。

十二月八日

私はどういふ信仰書を讀んでも、その裡から何か肝に銘するやうな、そして、云はば私自身のためになるやうな事柄を見出さずには措きませぬ。例へば、「神を信するものらはおのが力の日ごとによみがへを知らん。弱り果て力竭きしと思ふとき、たちまち彼らに驚のごとき翼生すべし。然る時は走りても疲れず、歩み往くも弱ることなし。さらば歩み往け、敬虔なる魂よ、歩み往きて、もはや力竭きたりと思はば、なんちの熱と勇とを倍せよ、神なんちを支へ給はん。」ああ、私達はいくたびその支へを必要としたことぞ！ ああ、疲れた、無氣力な、うつけたやうな魂！ 神の助けなくば、私達は一體どうなつてゐることか、お言ひ。上の言葉はボツシユエ。私はけふは殆ど他の本はなんにも開かなかつた。時間は讀書以外の事のために過ぎてしまつたのです。つまらない、取るにも足らないやうな、それでゐて私達の時間をみんな取り上げてしまふもののために。さあ、もう寝ませうね。

十二月九日

私は村の方々の爐傍で暖まつて來ました。私がときどきミミイと一しよにする巡回なのです。それは

決して興味のないことではありません。けふは病人達を訪れました。そこで、私達はお薬だの注射だの事を話しました。「これをお飲みなさい」とか、「左様になさい」とか、——さうすると皆はお醫者様と同じやうに私達の言ふことを聞きます。裸足で歩いてゐたため病氣になつた小さな子供に木靴をはくやうに命じたり、ひどい頭痛で押しつぶれたやうになつて寝てゐるその兄に枕をするやうに言ひつけたりました。枕は頭痛をやはらげました、けれどもそれを癒しはしないでせう。その子は肺炎にかかりかけてゐるやうに見えます。全くこれ等のかはいさうな人達つたら、まるで家畜達が家畜小屋にゐるやうに、自分達の小屋に住んでゐるのです。悪い空氣が彼等を害するのです。ケイラに歸つて見て、私は自分が、それ等の小屋に比べると、まるでお邸に住んでゐるやうな氣がしました。そんな風に、私はいつも自分より下のものを見ては、自分が結構な身分だと思ひます。

十二月十日

霜、霧、氷つた空氣、——かう云つたものがけふ私の見るすべてです。それ故、私は外へは往かずに、仕事と本とを持つて爐の隅にうづくまつてゐるつもりです。あつちをしたり、こつちをしたり、——さういふ變化が私を紛らかせてくれます。ならうことなら、私は一日中讀書をしてゐたい、が、他にも爲

なければならぬ事があります。務は快樂より先きにしなければなりません。私は自分にとつて少しも肝要でない讀書を快樂と呼んでゐるのです。蚤がある……まあ、冬の蚤……これはトリルビの贈物でせう。ほんたうに蟲つたら私達を、死んでゐようが、生きてゐようが一年中食べてゐる見たいです。私達の目に見える蟲は、その中のほんの少數なのです。なにしろ私達の齒だの、皮膚だの、身體全部がさういつた蟲で一杯なのださうですから。可哀さうな人間の身體！　こんな中に私達の魂が住んでゐるなんて！　一體自分が何處にゐるのか考へ出したら最後、魂がもはや快々として樂しまないのも無理はありません。ああ、魂が其處から抜け出して、人生を、天國を、神を、來世を樂しむ、あの素ばらしい刹那！　その驚きは、もし雖にも魂があつたら、それが殻を破つて出て來るときの驚きにも似てゐようかと思はれます。

十二月十二日

日付を先づ書いて置いて、それから私の日記にどんな事が起るかを見てみませう。何か思ひもかけないやうな出來事が起らぬかぎりは、——いつも私に幸福を持つてきてくれる、お前だの、山からの手紙のほかには、殆どそんなものは私は望んでゐないのだけれど、——勿論大した事はありますまい。

話すことも、書くことも、考へることも、何んにもない。寒さが魂まで凍みつかせてしまった。冬になると人の考へはもはや循環しなくなり、頭の中で氷塊のやうに氷つてしまふやうな気がする。そんな事を私は屢々、——いまもいとて、感じてゐるところなのです。けれども、何か楽しい事が——手紙とか、本とか、私を元気づけるやうな感情とかが——私にやつてくると、忽ち解氷して、水が流れ出すのです。

二人の托鉢僧が通つて往きました。お氣の毒にも凍えさうなその人達は、私に自分がかうして爐の側にゐて、彼等に與へるものを持つてゐるといふ事を幸福に思はせました。お前はいまはお金持なのだから、ときどきは施しをしなければなりません。お前はさうした事をするのが好きだといふ事をよく知つてゐます。お前は可哀さうな人を見ると、小錢を一つでも持つてゐたらばそれを與へないではゐられないと言つてゐたのを、私は覚えてゐますよ。その小錢がお前に幸運をもたらしたのです。ときどき私にもその一つを施して下さい。私が此處で與へることの出来るものは物の數にも入りませぬ、何故つて私は自分のものとしては何一つ持つてゐないのですから。それは共有物なものですもの。その中には私の分も入つてゐますが、ごく少ないのです。どうぞ私を助けて下さい。もし私が巴里にゐるのだつたら、私はときどきお前のポケットに手を突込むでせうね。……

十二月最後の日

十五日といふもの、此處に何んにも書かすにしまつた。何故かつて訊かないで。それは誰にだつて、なんにも話したくないやうな時だの、なんにも言ひたくないやうな事なんぞがあるもんですよ。とうとうクリスマスになりました。私の大好きな、その美しいお祭り、——それはベツレヘムの羊飼ひたちと同じほどの喜びを私に持つて来てくれるのです。いよいよそれが近づいて、讚美歌だの、楽しいナダアレツト(註)だの四方八方から告げ知らされる、神様の御到來を、私は眞心をこめて歌ひ上げます。巴里なんぞには、クリスマスがどういふものであるかといふ觀念を人に與へるやうな何物もないのでせうね。お前は深夜の彌撒だつてしないのでせう。私達はみんな打揃つてそれに出かけました、恍惚とするやうな夜の中を、ババを先頭に立てて。深夜の空くらゐ美しい空はありません。ババなんぞは空を見上げるために、ときどき外套から首を出したりしてゐました。地面は霜で眞白だつたけれど、私達は寒くはありませんでした。それに下男共が松明を何本も手にして私達を照らしてゐてくれましたが、その火のおかげで丁度私達の歩いてゆく先き先きの空氣が暖められてゐました。ほんたうに愉快つたらありませんでした。私はお前も私達と一しよに、その教會に向つて、まるで花をつけてゐるやうに眞白な、小さい灌木で縁かぢどられたこれらの徑を、歩いてゐるのだつたら、と思ひました。霜は見事な花を造ります。私

達は一本の小枝がとても綺麗に見えたので、それを聖餐の時の花束にしようと思いました、が、それは私達の手の中ですぐ解けてしまひました。花といふ花は長もちがしない。私はその花束が惜しくてしやうがありませんでした。それがだんだん解けてきて、一滴ごとに無くなつて来るのを見てゐるのは、とても悲しかつた。私は牧師館に行き着くと、すぐ横にさせて貰ひました。司祭様のお妹さんが親切に私をお引き止めになつて、私に温い牛乳の上等なレヴヱイ^(註二)を拵へて下さいました。そのうちパパとミミイも此處のスクク・ド・ナダアル^(註三)の大きな篝火のそばに暖まりに來ました。その日以来、寒氣と、霧と、空も魂も暗くするやうなすべての物が、やつて來ました。けふは久しぶりに、日があたつてゐます。私はすつかり甦つて、日のあたつてゐるところでなければ開かないあの美しい小さなルリハコベの花のやうに、元氣になつてゐます。……

註一。クリスマス祭に先だつ十五日間鐘を鳴らす特別な方法の名稱である。ラングドック州の方言ではナダアル (nadaal) と呼ばれて居る。

註二。クリスマス・イヴに於ける深夜の彌撒より歸りてのち、加特力教徒のする食事。

註三。クリスマスの篝火に用ひる薪。

一八三五年一月三日

けさブルタア^(註一)ニユから一通の手紙が、まるですばらしいお年玉のやうに私に届きました。私は一日ちゆうマダム・ド・ラ・モルヴァ^(註二)オネエのことを考へたり、又彼女の夫のあまり讀みよくない筆跡を判讀したりしながら過してしまひました。漸つといま、それがみんな讀め、あの方のお考へも完全に了解されました。が、私にはなんの御返事のしやうもありません。あの方が私の事をさう思つていらつしやるやうな女流詩人なんぞといふものは、私のいま送つてゐるやうなこんな生活、私のすべての時間をそれに奪はれてゐるやうなかういつた針仕事や家事などからは全くかけ離れた、理想的存在なんですもの。まあ私に他にどういたしやうがあるでせう？ 私はそれを知りませぬ。それに、かうして居るのが私の義務なのです、私はそれから出て往きたくはありません。私がかうして此處に住むべく餘儀なくされてゐるこの狭い世界から私の考へや魂の永久に飛び去らぬ事が神様のお氣には召すでせう^(註三)。ですから、私には何を言つたつて無駄なのです、私はどんな事があらうとも自分の針だの糸卷だのから超越することは出来さうもない。私はそんな氣がします。さう信じてさへをります。それ故、人から何んと言はれても、私は自分の居るところに居りませう。私の魂はただ天國においてのみ高い位置を占めるのでせう。

註一。この一行は抹殺せられてゐる。(原)

一月八日

けふはお前に話すやうな事はなんにもなかつた。私達の孤獨の中に、何物も来ず、何物も動かす、何物も爲されなかつた。私の小鳥だけ、鳥籠の中の日あたりの好いところで、しきりに囀りながら跳ねまはつてゐた。私はときどきそれへ目をやつてゐました、自分の部屋の中にはそれより他に何んの目の足しになるやうなものはなかつたので。私は終日其處を離れませんでした、そして少しばかり針仕事をしたり、讀書をしたり、それから反省したりしてゐるうちに一日が立つてしまひました。ものを考へるといふ事はまあ何んと好い事なのでせう。そして私達の考へが天翔けるととき、それはまあ何んといふ樂しさを私達に與へてくれるのでせう。さうやつて考へが天を目蒐けるのは、地上の事物から釋放せられるや否や、それが再び取る極めて自然な方向なのです。天と私達との間にはほんたうに不思議な牽引がある。神は私達を欲し、又私達は私達で神を欲するのです。

三月一日

まあずるぶん長い事私の日記は放つて置かれたこと。机を明けたとき、私はそれを見付けました、さ

うするとそれに何か一言書いて置きたいやうな考へが急に私を促へました。私はお前に、どうして自分がそれを止めてしまつたのか、お話ししませうか。それは私が日記を書くのに使ふ時間をなんだか無駄なやうに思つたからなの。どんな僅かな時間だつて、私たちはそれを神様に負うてゐるのでせう、とすると過ぎてゆく日々を此處に書き残さうなどとするのはそんな大事な時間を無意義に過ごすことになりはしますまいか。ですけれど、私はそれに加ひな魅力を感じる、さうして後になつてから自分の孤獨のうち自分の辿つた人生の徑を再び見出すのがとても好きなのです。いまでも、この手帳をあげてその數頁を読み返したとき、私はひよいとこんな事を考へました、いまから二十年も立つて（それまで私が生きてゐるとしたら）この日記を読み返して、恰も自分の若い姿をとどめてゐる鏡の中のやうに、その中に私自身を再び見出せたら、それはまあどんなに素ばらしい樂しみになるだらうかと。私はもう若くはないけれど、自分が五十にもなつたら、現在の私を若かつたと考へるでせう。ですから、さういふ樂しみぐらゐは、私は自分にも與へてやりたい。私はそれがごく罪のないものだと思ひます。もしや懸念が來たら、私はすぐにもこの手帳を手放しませう。しかし神様は私の良心ほどにはお厳しくありません、さうして私にこの小さな慰みをお赦し下さいませう。それ故私はまた明日から日記を續けませう。私は昨日の幸福——とてもうれしい、とても純な幸福——を書きつけて置かなければなりません。私が施與をして上げた、一人の貧者から受けた接吻。その接吻は私の心にはまるで神様のして下さつた接吻

のやうに思へました。

三月四日

けさ私はババの寢臺の傍に、きのふ一人の少女が修道院に入れて貰へたお禮にババに贈つた小さな十字架を吊しました。それはクリステイヌ・ロキエといふ娘でした。その信心深い贈り物は私たちに大へん氣に入りました。さうして私たちはそれを聖遺物として置くことにしました。その十字架と基督磔刑の繪との間にババの聖水盤は置かれるでせう。此基督磔刑の繪はもうすつかり破けてゐますけれど、私にはこの上なく貴重なものです。何故つて、私はいつも、その繪を其處に見つけてをりますもの。それに子供るときには、私はその繪の前に行つてはよくお祈りをしたものでした。自分が此聖像に對してどんなに澤山の恩恵を乞うたか、よく覚えてをりますわ。私はこの垂死のイエス様のお傷ましい御姿に向つて自分の小さな惱みのすべてを打ち明けるのが常でした。さうしていつも私は慰められました。一度、私は着物を汚してしまつて、それを叱られるすまいかと大へん苦に病んだ時なんぞ、私はその像に向つてどうぞその汚れを消して下さいますやうにと一心にお祈りしました。するとその汚れは消えてしまひました。まあどんなにかこの素ばらしい奇蹟は私をして神様を愛せしめた事でせうか。そ

の日からといふもの、私はお祈りとこの像とは何ひとつ出来なことはないと信ずるやうになりました。さうして私は、何はあれ、この像にお願ひいたしました。一度、私は自分の人形が魂をもちますやうにとお祈りしました、が、そのときだけは何んの效目ききめもありませんでした。恐らくそんな事はそのとき一度きりでしたらう。

三月十五日

泥、雨、冬の空、——日曜日には似つかはしくないお天氣。だが、私には日があつてゐるやうが、雨が、どちらでもおなじです。といつても無頓着なのではありません。そりあ私だつていいお天氣のうが好きですとも。けれども、どんなお天氣でも結構。心のうちさへ晴れ晴れとしてをれば、それ以外のことは何んでもないではありませんか？ 私はランタンに往つて、どうも自分の考へではたいへん悪いと思へるやうなお説教を聞いて來ました。神様のああいふ美しいお言葉も、それが或種の人々の唇を通ると、どんなに變つてしまふこととせう。私達はそれが天から來たお言葉であるのを知つて置かなければなりません。私は、お天氣が悪かつたけれど、夕拜にも出かけました。私はアンディヤックから一つの花を、今年はじめて見つけたのを探つて來ました。それと同じやうな花がマリア様の祭壇の上にもあ

つて、そのおみ足を薫らせておきました。自分の庭のなかで見つけた最初の花をマリア様にお供へするのは、私達の村の少女らの慣はしなのです。私は此處に、春にちかい日曜日のおもひでに、この花を挿んでおきます。

三月十七日

……私は谷間で羊飼ひが口笛をふいてゐるのに耳を傾けてゐる。それは人間の唇から出てくる一番優しい音ではないのかしら。その口笛は、いかにも快い、呑氣さとか、上機嫌とか、「私は満足です」といつた心のしるしなのでせう。それらの貧しい人達には、何かさういつたものがなければやつて行けないのです、それであんなに愉しさをしているのです。二人の小さな子供が、羊たちの間で、柴刈りをしてながら歌をうたつてゐます。さうしてときどき笑つたりふざけたりしては、その手を休めてゐますが責任感などといふものは彼等にはないのでせう。私は彼等のしてゐることを見たり、鴨が小川のほとりの籬のなかで囀るのを聞いたりしてゐるのが大好き。だが、私は讀書がたくなりました。四旬節になつてから、私の讀んでゐるのはマシヨンです。「祈禱について」といふ金曜日のお説教のすばらしさ。これこそ本當の讚美歌だとおもひます。

四月八日

なんといふこともなしに、私は四日ばかり此處にはなんにも書かすにしまつた。やつといま自分の小部屋に一人きりになれたので、私はそれに戻りませう。孤獨がものを書かせます、それがものを考へさせるから。人は自分の魂と對話をしはじめます。私は自分の魂に向かつて、けふは何を見たか、何を學んだか、何を愛したか——なせつて魂は毎日何かしらを愛するものでも、——と訊ねます。けさ、私は美しい空と、やつと芽ばえだしたマロニエの木を見、小鳥のさへづるのを聞きました。ちやうど水盤を掃除してゐた、テウレの泉のかたはらの、大きな樅の木の下で、その囀りを聞いたのです。その美しい囀りと、その泉の掃除とは、私にさまざまのことを考へさせました。小鳥たちは私を愉しくさせてくれました。が、ついさつきまであんなに綺麗だつた水がいま泥だらけになつて流れてゆくを見て、私はそれがさうやつて濁らされたことを惜しみながら、私達の魂が何物かに揺すぶられるときのことを思ひ返りました。最も美しい魂でさへも、それを底から揺すぶられるときには、濁つてみえるでせう。なせといつて、いかなる人間の魂の底にもいくらかの泥はあるのですから。ああ、こんなくだらないことを書くのにインクを使ふのは本當にもつたない！ こんなことよりか、あの玄關の側に腰かけて、

村から村と歩いてゐるうちに、出逢つた事などを聞かしてくれ、あのかはいさうなタミジエルの事でも話した方がましでせう。私がお禮に葡萄酒を一杯飲ませてやりますと、彼は元氣づいてまたくさりお喋りをし、それから足をびんとさせてその夜の幄へ引き上げてゆきました。それから私は一つの説教を読みました。それを聴きに往かれないので、私は自分の小部屋を教會にします。そこに神様がいらつしやるやうなつもりで、一心になつて。さうしてお祈りのときには、私は反省します。冥想のときには、私は讀書をし、ときをりものを書くこともあります。そしてさういふやうな事は、机の上の小さな十字架の前で、ちやうど祭壇の前でするやうにします。——その下のはうは私の手紙だの大事なもののひつてゐる抽出しです。

四月十三日

パパが歸つていらしつてから、私は自分の日記も、本も、何もかも手離してをりました。さうしてゐたら、魂がすっかり意氣地がなくなつてしまつて、まるで疲れ果てたやうに自分自身の上になうづくまつてゐるきりの、無爲の日が續き出しました。こんな無氣力な疲労は、惨めさ以外の何物でありませう？ 私達の貧しい魂を襲ふ他の惨めさと同様に、私達はそれに打ち克たなければなりません。もしそれを一

つ一つ殺しておかないと、それらのものは着物につく蟲のやうに、私たちをすつかり蝕んでしまふでせう。私はどうも悲しみから喜びへの變り方があんまり急なやうです。さう、喜びといつても、私のいふのは、外見はただ朗らかに見えるきりの、あの靜かな、安らかな魂の幸福のことなのですが。一つの手紙だの、神様や自分の愛するものたちのちよつとした思ひ出が、私の上には、そのやうな効果を與へます。けれども、ときにはそれと全く反對になることもある。それはわれとわが心を痛ましむるやうに物事を悪くつた場合です。神様は私に御自身の與へられる恐怖も、法悦も、よく知つていらつしやる。しかし、お前は知つてゐないので、どんなにお前が私にやさしかつたり、辛かつたりするかを。モリス、お前はもう二週間も私を苦しめてゐるあの短い手紙を覚えてゐないの？ お前はまあ私にはどんなに冷淡で、無關心で不親切におもへることか！

私はいま私の聖水にお祝ひの枝を供へて來ました。きのふは枝の主日。教會では、お菓子で飾つた、お祝ひの枝を手ん手にもつて、いかにも幸福さうな子供たちのお祭りがありました。かういふ嬉しい行列は、お宮入りをなされるイエス様を子供たちが讚美したホザンナの記念として彼等に與へられたものにちがひありません。神様は何に對してもお報ひなさいます。私の手帳はこれでもうお終ひ。また別の手帳に書いて行つたものだらうか？ どうしようかしら。とにかく、この手帳とお前にお別れしませう。

佛蘭西の十九世紀の初葉にユウジエニイ・ド・グランといふ女のひとの書き残した日記があつて、フランシス・ジャムやリルケのやうな詩人にも愛讀されてゐるといふことを私が知りはじめたのは、數年前「かげろふの日記」を構想してゐる頃のことであつた。私は、此の世のものではもはや何物をもつても心を滿されぬことを知つた傷心の女がいつしか物を書くことに唯一の慰めを見出してゆく心理の過程を見つめてみようとしてゐたときだつたので、一度そのユウジエニイ・ド・グランの日記も讀んでおきたいと思つてゐた。そのとき私は、芥川さんの書庫の一隅に、何かさういつたやうな表題の小さな本を見かけたやうな気がしてきて、もしかしたらその本の英譯か何かだつたのではないかと思つたが、つと山のなかにゐた折だつたので、とうとう葛卷君に手紙を書いてそれを捜して貰ふことにした。やはり、それはさうだつた。さうして葛卷君はそれをすぐ私に送つてくれた。それは一八九三年に譯者の名を公にせず刊行された英譯本である。

私はその本を非常なよろこびをもつて受けとつたが、そのときはもうそれをゆつくり披いて見てゐる

餘裕がなくなつてゐた。私は既に「かげろふの日記」の仕事に向ひ出してゐたのである。……

私とそのユウジエニイの日記に次第に親しむやうになつたのは、その翌年の秋のことである。私達の山の家には、さすがにもう客も殆ど訪れて來なくなつて、まつたく二人きりの靜かな日が続き出してゐた。さうして私も私で、自分の新しい仕事に漸く没頭したものだから、妻はいよいよ話し相手もなくなり、ときどき何をしたらいいのか分らないやうにしてゐるので、私はユウジエニイの日記を日課として讀ませることにした。さうして私は仕事の合間々に、一しよに庭に出ていつたり、或は爐傍でもつて、二三百頁ぐらゐづつ、妻がそれを譯しながら讀んでゆくを聞いてゐた。

そのうちに、日々の讀書がだんだん私達に愉しいものになつて來て、一そのこと、すこしづつでもいから、それを譯していつて見ようではないかといふ事になつた。さうして私達はそれを或小さな雜誌に載せていつて貰ふことにした。當分原書のはうは手にはひりさうもなかつたので、私達はその英譯をさうやつて二人で讀み合つたのち、妻にひととほり譯させて、それに私が思ふままに手を入れたのである。——さうやつてユウジエニイの日記が私達の手でぼつぼつ譯され出した。すると、そんなものも二三の人々の目に止つたと見え、その頃はまだ面識のなかつた河盛好藏君などはわざわざその原書を送つて下さつたりした。(そのとき弟のモオリス・ド・グランのはうの日記も一しよに送つて下さつたが、この二冊はいまだに拜借してゐるのである。)

そこで、私達はこれまでとは少しやり方を變へることにしたが、このユウジエニイの日記の翻譯はできるだけ妻の仕事として残しておきたかつたので、前と同様に妻が英譯本によつて讀みながら譯してゆくのを、私はこんどは原書を見ながら絶えず注意を與へ、そしてその讀み合はせがすんでから、妻がまづノオトに譯し、私がそれへ相變らず思ふ存分に手を入れたのである。

さういつた手の込んだやり方で、私達はたいへん遅々として、それでも半年ほどその翻譯を續けてゐたが、その翌年その小さな雑誌の廢刊と共に、それもそのまま中絶のかたちになつた。

このユウジエニイの日記は、殆ど八年間にわたつて、十二冊の手帳に書かれてゐる大ぶの日記なので、もとよりそれを全譯しよなどとははじめから考へずに、まあ何處まで私達の手で譯せるかやつて見ようと思つてゐたまでの事だつたが、遂にその一冊をさへ譯しおへすにしまつたのは、どうも残念な氣がしてゐた。そこで、その後も二三度、他の雑誌などにそのあとを譯して行かうとして見たりしたが、どうもうまい工合にゆかなくて、長續きがしなかつた。——が、こんど此處に、せめてけふまでの私達の仕事だけでも、ひと先づ纏めておかうと思ひ立つて、いろいろ考へた末これまで譯したものからその半分ばかりを選び、それに新しく數節を譯し足して、ともかくも、ユウジエニイの日記の第一冊の面目をいくぶんでも傳へておかうと試みたのである。

そのうちまた私達にあの昔のやうな閑寂な日が返つて來たら、再びこの仕事を續けたいとおもつてゐる。そのときには、もつとうまい工合に譯して、一冊の小さな本にでもして出したいものだ。

そんな折には、私はもう少しはましなユウジエニイ・ド・グランの傳記を書きたいものだが、いま手もとにある二三の本に據つて、ごくざあつと彼女の一生を敘し、その「日記」を紹介して置くにとどめる。

ユウジエニイは一八〇五年南佛の古都アルビにちかい片田舎のル・ケエラに生れた。もとグラン家は南佛でも有數な貴族の一つであつたが（十三四世紀頃）、その頃はもうすつかり衰微してゐて、ただその館が一つ彼等には残つてゐるきりであつた。彼女が十三になつたとき、母はほかに三人の子を残して死んだ。末子のモオリスはまだ五つで、ユウジエニイが母に代つてその小さな弟を育てなければならなかつた。

ル・ケエラは麥畑や葡萄畑に取り圍まれながら、柵や楡の木などの多い、高臺の上の一つだけ立つてゐる古い館で、遠くには溪谷が見えたり、牧場が望まれたりして、いかにも美しい眺めをもつてゐるが、どうかすると何日も羊たちのほかは何も目にしなかつたり、ただ群鴉の空を過ぎるのを見てばかり暮らすこともあるやうな寂しい場所でもあつた。

父は篤實な人で、小作人等を相手に農事にいそしみ、長男のエランベエル（エランと呼ばれる）は近所の町々に父の用事で出かけたり、好きな狩獵などをして暮らしてゐる。ユウジエニとその妹のマリエ（ミミイと呼ばれる）は家事を托せられて、毎日せはしげに立ち働いてゐる。

そんな一家のうちで、末子のモオリスだけは幼い頃からル・ケエラを離れてゐた。はじめトウルウズの神學校に入り、それから巴里のスタニスラス大學に入つて古典を究めた。その後、しばらくル・ケエラに歸省してゐたが、當時ラムネエが宗教改革を唱へてブルタアニユのラ・シェネエに立て籠ると、若いモオリスはそれに共鳴してはるばるその門を叩いた。一八三二年の秋のことである。が、ほどなくその一門の解散とともに、再び巴里に出て、舊友のバルベイ・ドゥヴルビイに逢ひ、それから彼等の仲間にはひつて文學に専心するやうになつた。

その頃ル・ケエラにあつて弟思ひのユウジエニは、そんなモオリスの行末を氣づかひながら、ときどきの文通だけではもう我慢し切れなくなり、弟に宛てて日記を書き出してゐたのである。

その第一冊目の日記は、いまは失はれてゐて、それがいつから書きはじめられたか（恐らく一八三四年九月頃とおもはれる）、又、どういふものであつたかは知り得ないけれど、巴里でモオリスがそれを受けとつて、ひどく心を打たれ、もつとそれを書き續けてくれるやうにと言つてよこしたので、ユウジエニは又、一八三五年十一月半ばから第二冊目を書きはじめた。そのとき手もとに紙がなかつたので、

詩を書くつもりで綴ちて、只その題だけ書いてあつた手帳を使ふことにしたなどと、その日記のはじめに書いてある。その第二冊目の手帳が、此處に私達の抄したものである。

ちやうどユウジエニが二十九のときで、ル・ケエラにおける怪びしい冬から春にかけての自然の變化、彼女がその一日のうちの多くの時間を過ごす臺所での毎日の小さな出来事、自分の小部屋での祈りと讀書、又は日曜日ごとに皆して彌撒に行くガイヤックやアンディヤックの教會などのことが、それからそれへといかにも自然で、可憐といつていいやうな筆で描かれてゐる。家から遠く離れて、一人きりで巴里に暮らしてゐなければならぬ、そのかはいさうな弟の心を引き立てようとして、彼の氣に入るやうなことなら、ル・ケエラのどんな小さな出来事でも書きとめておかうとするやうに見える。さういつた氣もちのいい *naïve* な記述に富んだ此の二冊目などは、いかにもフランス・ジャムの好きさうなものだと思ふ。

それが第三冊目（一八三五年四月—十二月）になつて來ると、いよいよ自分達からばかりでなく、神からも離れてゆくやうに見える、不しあはせなモオリスのことで、いよいよ不安になりまさつてゆくユウジエニの心の動搖が、日記の間にまざまざと感ぜられてくる。さうしてそのあたりからは此の不しあはせな魂を救はうとする彼女の苦闘史であるとも云へよう。——この第三冊目の手帳は、ユウジエニも心を挫いて書いたものと見え、彼女自身も一番大事にしてゐたらしい。

第四冊（一八三六年三月―五月）と第五冊（一八三七年五月―七月）の間でしばらく日記が途絶えるが、その一年間は彼女はモオリスにちかに手紙を書くことの方に熱心になつてゐたらしい。一八三七年の夏、モオリスは肺患に襲はれて、巴里からル・ケエラに五年ぶりで歸郷し、そのままずつと冬まで、父や姉の手厚い看護を受けながら暮らしてゐた。その間、ユウジエニイの日記もまたしばらく途絶える。やがてモオリスは恢復して、翌年の一月、再び巴里に立つた。さうしてユウジエニイはその弟の出立の翌日から、また彼女の日記（第六冊）に向ひ出す。

その年の秋、モオリスは、巴里で知合ひになつたカロリース・ド・ジェルヴァンといふ印度生れの若い女と結婚することによいよ話がきまり、ユウジエニイもその弟の結婚式に列するために、九月の末、生れてはじめて巴里に往くことになつた。彼女は巴里に立つ日まで日記に向つてゐる。

その巴里滞在中も彼女は日記を書くことを止めずにゐた。結婚を前にして、再び病床の人となつたモオリスから、紙を渡され、日記をずつと書いてゐてくれるやうにと乞はれてから、彼女は折さへあればそれに向つてゐたのである。第九冊目にあたるものだが、その手帳はどうしてか第一冊目と同様にながいがいこと見つからないでゐた。――その手帳が、モオリスの意中の人で、のちにユウジエニイの親友となつたド・メートル男爵夫人の手に保管せられてゐたといふことの分かつたのは、かなり最近のことである。（その未刊の日記は一九一一年コルヴィユ伯に依つてはじめて公にせられた。）

この巴里滞在中の記事には、就中、讀む者の心をも痛ましめるものがある。病める弟が結婚によつても幸福になれさうもないことがユウジエニイには漸く分かつてくる。そればかりでなく、そのモオリスの傍らに自分のあることまで、屢々彼とカロリース、ことにその伯母との不和の原因になるらしい事に氣づき、彼女はその家にもゐたたまれなくなり、とうとうド・メートル夫人のもとに移り、さうしていつまでも元氣になれないでゐる弟を心ならずも巴里に残して、夫人とともにニヴェルネエの旅に出る。

第十冊目の日記は、そのニヴェルネエの旅ながら書かれたものである。ユウジエニイは三十三、一八三九年の春のことである。そこには、はじめて目にしたその中部佛蘭西の自然の美しさ、よく氣の合ふ夫人との旅の愉しさなどが、ひさしぶりで彼女の輕妙な筆に生き生きと寫されてゐるが、一方、彼女の心は絶えず巴里に病んでゐる弟のために脅やかされがちである。

その旅の途中、モオリスが急にカロリースに伴はれてル・ケエラに歸ることになつたといふ知らせを受けると、ユウジエニイはいそいでトゥルまで往つて、そこで彼等と落ち合つた。それからカロリースと二人で病人を介抱しながら、苦しい旅を續けて、漸つと無事にル・ケエラに歸つた。けれども、それから十日ほどした七月十七日の朝、モオリスは遂に最後の息をひきとつた。まだ二十八であつた。作品としては死後にはじめて公にせられた「ル・サントオル」といふ特異な散文詩のほかは、すべて斷片的なものばかりであるが、彼もまたその姉とおなじくその日記や手紙の中に美しい天才を示してゐる。

モオリスの死後、その翌々日からユウジエニイは再び日記の筆をとり出してゐる。手帳のはじめに、「なほも彼のために。逝けるモオリス、天にゐるモオリスのために。」と記し、さながら生けるもので話しかけるやうに、彼女はモオリスの死後のル・ケエラの日々を書きとめる。しかし、彼女の筆は重たげで、ややもすれば息切れがし、ときどき殆ど嗚咽してゐるかにおもはれる。いまは、すべてのものが彼女に苦痛をよびおこす。何ひとつとして彼女にモオリスのことを思ひ出させぬものはないのだ。ル・ケエラの日々の平和、氣候のおだやかさへ、彼女の心を泪ぐましめる。「もしお前が此處で暮らしてゐたら、お前は死なすにもすんだであらうに。」

それでもユウジエニイは日記の筆だけは棄てようとしなない。一年近くうちに四冊ほども書き上げてゐるが、その後はさすがに筆をとることも稀れになり、日付のないやうな日記がだんだん多くなつて来て、しまひには「すべてのものが死んでゆく。私もまた、すべてのものに對して死んでゆく。私は心痛のあまりに、云ひやうのない苦惱の状態のうちに、死んでゆくのだ。——この惨めな日記よ、これらの消え去りゆくすべてのものと共に、忘却の中へ入つてゆくがいい。私はもう此處には何も書くまい。私が蘇るまでは、私の魂の埋められた墓の中から神様が私を蘇らせてくれるまでは。……」といった投げやりな氣もちさへも書きつけるやうになる。

さうして遂に一八四〇年十二月末、ユウジエニイの手から筆は落ちて、そこで日記は終るのである。

彼女はその後十年ちかい年月を、殆どル・ケエラを離れず、老いたる父に仕へながら、修道院に入りたいといふ夢も空しく、一八四八年五月三十一日、四十二歳で寂しく逝つた。

ユウジエニイの死後、彼女の書きのこした日記が、モオリスの遺稿の出版に盡力してゐたバルベイ・ドゥヴルグイなどの友人の間に知れると、それが彼等を夢中にさせて、まづ、その日記のはうが先きに、一八五五年「RELIQUIAE」といふ表題で、五十部ばかり印刷されて、知友間に贈られた。

その寄贈者のうちには知名の文士がきはめて少ない。ジョルジュ・サンド、サント・ブウブ及びザビエル・ド・メートルの三人のほかには、ただ當時の新進詩人ポオドレエルの名のあるのが異様に目につく。この若いポオドレエルに贈られた本には「眞白なる花を美しく黒き花に」といふ獻辭が書かれてあるさうである。

サント・ブウブはそのとき「アテネエム」誌でこの無名の婦人の日記を激賞した。

一八六三年になつて、ユウジエニイの日記の新版が出て、その前年に出たモオリスの日記と手紙の新版とともに世に並び行はれだすと、このグラン姉弟の日記の愛讀者は漸く知名の文士の間にも現はれるやうになつた。アミエル、マシユウ・アアノルドなどがある。もつと私達に近いところでは、フランシ

ス・ジャムがある。ジャムはその詩のなかでこの美しい魂をもちあつた姉と弟のことを屢々歌つてゐるが、又、その回想記の中でもこの二人の姉弟が若き日の自分に與へた深い影響を物語り、それから或年の春さきはその故址ル・ケエラを訪れたときの思ひ出を書いてゐる。その一節を此處にざつと譯して、このノオトを終へることにする。

「私がル・ケエラに着いたのは、ちやうど受胎告知の日だつた。ガイヤックまで、私の従兄弟たちが迎へに来てゐてくれた。さうして私に昔風な二輪馬車を自由に使はせてくれたので、それに私は乗つてグラン家の館から數軒のところまで往つた。雪がまだ一面に薄く残つてゐた。それから私は自分の巡禮地に向つて登り出した。……やがて彼等の館が目の前に現はれ出した。……何もかも工合がよかつた。その館は（今は或はずつと前から）無住らしかつた。私を案内してくれたよばよばのお婆さんは、いたつて無口で、なんにも言はずに其處に私を一人きりにさせて置いてくれたが、それはよく私のことを理解してくれたがのやうだつた。この納屋、この薪小屋、この雪片の掩つてゐる中庭、この臺所は、私がこれまでによく見かけたものと少しも變らないのではないだらうか？ 物憂さ、退屈な時間、發熱と頭痛、心配事、針仕事、吐息、獨身の侘びしさ、金錢上の不如意、名門の誇り、小作人との會話、さう云つたもののすべては田舎貴族の陳腐な日常生活だ。だが、さう云つたすべてのものの上方に、天の均衡がある。爐傍の薄暗さを人に氣づかしめるやうな光の煌めきがある。私の魂は長いこと黙してゐた。モオリ

スの最期の日々、眞夜中に彼が苦しさに呻き出してゐる隣室へ何度となくスリッパの儘で慌ててユウジエニイが横切つていつた狭苦しい部屋のなかへ私は入つたりした。彼女が睡むるまでその眼のあたりを去らないでゐてくれる自分の星を鏡屏の隙間からユウジエニイがちつと見あげてゐた小部屋の埃に手を觸れようとして、私はその凸凹になつた床のはうへ身を踏めた。私はモオリスの部屋にも入つて見た。私はそのなかで跪いた、その死の床の色の褪めた寢臺掛けに自分の額をくつつけるやうにして。私の魂のひそかな、痛切な叫びが、何かを呼ばふごとく、彼等のはうへ上がつていつた。私は祈りのなかへすつかり沈んだ。すると突然、私の閉ちた目の闇のなかに、昔のル・ケエラが蘇つた。日が赫いてゐる。彼等はそのなかに居た。私はその葡萄作りのかぶる帽子で彼をそれと認めた。彼は小脇に一冊の本をかかへて、ゆつくりと歩いてゐた。私は、あるかないかの雪を融かしてゐる熱い外氣の中からふと笑ひ聲や叫び聲を耳にしだした。……それから小川のせせらぎを。……」

後記

この集ははじめ、甲鳥書林のかたがたから、一巻の選集ふうなものを出さないかと云はれるまま、私もさういふ氣も
ちになつて、その仕事にとりかかつて見たのであるが、どうもまださういふものを作ることは自分には駄目らしく、い
ましばらくその方は預つていただくことにした。そしてその代りに、このまへの短篇集「晩夏」のあとで書いた小説や
小品などを主として、一巻の冊子を編むことになつたが、それらのものに昔の「狐の手套」や「雉子日記」のなかから
も幾つかの小品を選んで取り交⁺へてあるのは、はじめのさういふ選集をつくらうとした氣もちがいくぶん其處に痕を
とどめてゐるのである。

**

そのために、随分古いものからごく最近のものまでが、此の一巻のうちにはかなり雜然と入り込んでゐるので、此處
に、それらのものを年代順に並べておいて見よう。

- 昭和七年 三つの手紙
- 八年 覺書 マルセル・ブルウスト
- 九年 リラの花など 小説のことなど
- 十一年 ヴェランダにて
- 十二年 雉子日記 續雉子日記
- 春日遅々
- 七つの手紙
- 十三年 山の家にて 雲について (「初秋の淺間」改題)
- ユウジェニイ・ド・ゲランの日記
- 十五年 木の十字架 伊勢物語など
- 若菜の巻など
- 十六年 黒髪山

- 更級日記
- 曠野
- 十七年 ふるさとびと
- 十八年 斑雪 櫛の上
- 「死者の書」

大體、かういふことになる。唯、數年間のをりをりの讀書記のやうなものを集めておいた「狐の手套」だけは、あまり些細になるので、これには加へなかつた。猶、それらの一つ一つの作品について云ふべきことは、それぞれのところ
で既に書いておいたつもりである。

書名の「曠野」は巻頭に載せた一短篇の題をそのまま用ひることにしたのである。それを採つて書名にしたときは、そのほかにどうも好い題が見つからなかつたため、別にそれには何んの意味もなかつた。——しかし、いま、この後記を書きながら、過去十年、自分の漸くしてきたかすかな仕事をふり返つてみて、これから自分のなすべき仕事の領分のあまりにも茫漠としてゐることを考へると、なにけなく書名にした此の言葉が、意外なきびしさでもつて私の心にひしひしと感ぜられて來てならない。(昭和十八年十二月二十四日)

堀辰雄著作目録

聖家族

横光利一序、五百部印刷、江川書房、昭和七年。

(その後、昭和十一年、野田書房より八十部印刷せらる)

ルウベンスの偽畫

あひびき、恢復期。 三百部印刷、江川書房、昭和八年。

(そのうちの二部は東郷青児、古賀春江肉筆の善薇を挿繪とす)

麥藁帽子

燃ゆる頬。 四季叢書の一なり。 四季社、昭和八年。

美しい村

序曲、美しい村、夏、暗い道、ノオト。 野田書房、昭和九年。

物語の女

窓、挿話、馬車を待つ間、旅の繪、鳥料理。 山本書店、昭和九年。

風立ちぬ

序曲、春、風立ちぬ、冬、死のかけの谷。 野田書房、昭和十三年。

かげろふの日記

ほととぎす。 五つの手紙を序とす。 創元社、昭和十四年。

晩夏

姨捨、晩夏、朴の咲く頃。窓 (NILKE)、マダム・ルクレチア小路 (MERMIER) 甲鳥書林、昭和十六年。

菜穂子

楡の家。 創元社、昭和十六年。

幼年時代

花を持てる女、三つの挿話。 青磁社、昭和十七年。

詩集

深澤紅子水彩畫挿入、百八十部印刷、山本書店、昭和十五年。

(立原道造の生前戯れに編める「堀辰雄詩集」をそのまま上梓してその墓前に捧げしもの)

狐の手套

小品と隨筆。 野田書房、昭和十一年。

雉子日記

山の家にて、讀書の日々、リルケ雜記…… 河出書房、昭和十五年。

昭和十九年九月十日 初版印刷
昭和十九年九月二十日 初版發行

(二〇〇〇部)

出版會承認
い410075
(110029甲鳥書林)



著者 略歴
明治三十七年十二月二十八日東京に生る、東京帝國大學國文學部卒業、小説家。著作に、かげらう日記、晩夏、菜穂子等あり。

發行所

(本社)
奈良縣丹波市町川原城
東京都京橋區銀座三ノ四
京都市中京區三條通高倉東人

養徳社

著者 堀辰雄
發行者 (養徳社) 中市弘
奈良縣丹波市町川原城
會員番號一一九五〇一
印刷者 (京都四二) 宮崎勇治
京都市下京區西洞院七條南
内外印刷株式會社代表者
配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

定價	四圓貳拾錢
査定番號	四ノ二一智級Ⅲ類

985
127

終

